

中山道随想録・330枚書き下ろし

共著 奇妙な紀行文

400字詰原稿用紙 330枚書き下ろし
平成十七年十一月十五日改稿

たおなが 踏基

炎昼や御霊みたまも惑う木曾の道・踏基

プロローグ

道は誰がどのようにして作ったのであるうか。動物は生きる手段として、獣道を作ると考えられている。人も動物と同じようにして、生きる手段として最初道を作ったのである。

農耕民族の日本人は、自然発生的に集落や村を行き来しながら、道を作っている。

部落や集落が大きくなり村となり街となり、生活レベルの向上に連れて作画的に道は管理されるようになった。

欧州では、広場を中心にして街が形成されてきた。城壁に囲まれた欧州の広場の文化に対して、日本は街道、つまり「道の文化」といわれている。

道は地域を繋ぎ、時を繋ぎ、人を繋いできた。古来より日本の文化は道を起点にして、沿線に鄙びた茶屋や旅籠が誕生し、過去、現在、未来を繋いで往来する人々の、時を越えた段階的交流により、形成されたと言っても過言ではない。

大和朝廷が確立すると、中央と地方との往来が必要になり、道の整備は政治的色彩を帯びてくる。勢力拡大と共に幹線道路が整備され、現在の国道の原形となる五畿七道が誕生する。

東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道である。

平安・鎌倉時代になると、京都に上る東海道は、重要性を増し幹線道路として利用され、その後の戦国時代から織豊政権の下では整備事業は全国規模で広がっていった。

徳川初代将軍家康は、慶長八年(一六〇三年)に江戸城下の区画整理と併せて、日本橋起点の五街道を幹線道路として整備し幕府直轄とした。

昔の五街道つまり、東海道、中山道(木曾街道とも称した)、甲州道中、日光道中、奥州道中である。

東海道・・・品川、大津 五十三次
中山道・・・板橋、守山 六十七次

(大津、草津を加え六十九次とする説もあり)

甲州道中・・・内藤新宿、上諏訪 四十五次
日光道中・・・千住、鉢石 二十一次

奥州道中・・・白沢、白河 十次

幕府は万治元年(一六五九年)に、道中奉行を置き、三海道を後日、道中と改名し、

街道の整備、改良、関所、架橋、渡船、並木、一里塚、宿駅、助郷、人馬等の管理監督を行った。

特に中山道は、昔から多くの街道が交差しており、文字どおり人・物・情報・文化の交差点でもあった。

温暖な太平洋岸に面した、東海道に比べて整備は遅れ、暫くは裏街道的な存在だった。中山道とも書くが、ルーツは律令時代の五畿七道の一つ東山道に由来している。

東山道から中山道の移行期には、既に宿駅が設けられている。

数多の武将が群雄割拠する戦国時代には、小田原の北条氏が、倉賀野、高崎、板鼻、安中、松井田、坂本の六宿を創設、武田氏は、下諏訪、塩尻、洗馬、贄川、奈良井、蕨原、福島の七宿で伝馬の継立てを行っていた。

明治の文豪島崎藤村の名作「夜明け前」の書き出しで有名な「木曾路はすべて山の中である」に代表される信州木曾峪を通過するため別名木曾街道ともいわれた。

中山道最大規模の宿場は、起点から十番目の武蔵国児玉郡本庄で、本陣一、脇本陣二、問屋六、旅籠七十を要していた。

最長宿場は、三十四番目「奈良井千軒」の賑わいを誇った奈良井宿である。木曾路は、贄川、奈良井、蕨原、宮ノ越、福島、上松、須原、野尻、三留野みどりの、妻籠、馬籠までの十一宿で構成される。

奈良井宿のある土産店の女主人はいう。

最近妻籠・馬籠は家の表に露骨に観光の店がはみだしているのに対し、奈良井宿で

は今もなお、家と店が生活と共存して息づいているのだという。この言葉に木曾十一宿、昔の姿を感じて惹かれるものがある。

全長百二十九里(約五百七キメ)の中山道は江戸時代、江戸日本橋から武蔵、上野、信濃、美濃を通り、近江草津で東海道と合流し、京都に向かった。

太平洋に沿って行く東海道とは対照的に山岳地帯を行くので、一日に歩く距離が短く、そのため宿場の数は、一番多く東海道草津宿に合流するまで六十七宿もあった。起点の大津、草津を加えれば実に六十九宿である。

昔は、参勤交代の公用で、大体一日平均十里(四十キメ)が標準だったようだ。

東海道(江戸日本橋)京都三條大橋)が百二十五里(四百九十キメ)で十二日間、草津、大津を加えた中山道(江戸日本橋)京都三條大橋)が百三十五里(五百三十三キメ)で十四日掛けていたようだ。別の本によれば、全長百二十六里(五百四十四キメ)とあるから大津、草津を経て京都までの里程を加えた数字であろうか。

江戸時代、参勤交代で中山道を利用した大名は三十藩あったといわれている。

中山道は東海道と違って大河も少ないため、川留めの心配もなく比較的予定通りの日程が組めたようである。

比宮(徳川九代将軍家重夫人)、五十宮(徳川十代将軍家治夫人)、楽宮(徳川十二代将軍家慶夫人)、和宮(徳川十四代将軍家茂夫人)等の宮家の姫君の輿入れ行列が中山道を通ったので、姫街道とも呼ばれた。

しかし、反面峠越えが多く難儀はしたよ

うである。

主な峠を拾ってみると、碓氷峠(群馬県)笠取峠(長野県)和田峠(長野県)塩尻峠(長野県)鳥居峠(長野県)妻籠峠(長野県)馬籠峠(長野県)琵琶峠(岐阜県)物見峠(岐阜県)うとう峠(岐阜県)摺針峠(滋賀県)などが代表的な峠である。

また太平洋側へ、日本海側へ分かれて行く街道も多く中山道の果たした役割は、多大なものがある。

主な街道は、川越街道(板橋宿より分岐)秩父往還(熊谷宿より分岐)例幣使街道(倉賀野宿より分岐)北国街道(追分宿より分岐)下仁田街道(岩村田宿より分岐)小諸街道(岩村田宿より分岐)佐久往還(岩村田宿より分岐)甲州道中(下諏訪宿より分岐)伊那街道(下諏訪宿より分岐)美濃路(垂井宿より分岐)北陸道(鳥居本宿より分岐)等である。

江戸時代、天保八(一八三七)一八四三(刊行の本に、「北越雪譜」がある。

全七巻(初編巻之上中下二編巻之一)四・発行元江戸文深堂)の著者鈴木牧之は、新潟県南魚沼郡塩沢に明和七年(一七七〇年)一月七日生まれ、太田蜀山人や十返舎一九とも親交のあった人である。

他にも著作があつて、秋山郷(長野県下水内郡栄村)の紀行文「秋山紀行」小説大寺躍「塩治判官一代記」等、何れも口語訳本が今でも一般に読まれているという。

鈴木牧之は、江戸時代の随想録、紀行文作家として著名である。

紀行文古典は幾つもある。

鈴木牧之と親交があつたという、十返舎一九の弥次さん・喜多さんのお伊勢参りの戯作に、「東道中膝栗毛」がある。当時の代表的な庶民の紀行文である。

十返舎一九は、原稿料だけで生活できた日本最初の職業作家といわれている。

安藤広重作の「東海道五拾三次」五十五枚の浮世絵は、木版画で描いた精緻な素晴らしい旅本である。

松尾芭蕉のご存知、「奥の細道」「野ざらし紀行(甲子吟行)」「笈の小文」「更級紀行」また然りである。他にも「伊勢物語」「十六夜日記」「海道記」「東関日記」「外国人ものでケンペル「江戸参府旅行日記」シ・ポルト「江戸参府紀行」がある。

近代に入り明治以降、交通機関は飛躍的に発展し、昭和に至って新幹線網が整備され、高速道路も普及した。

更に現在は、欧米並の車社会となったのが災いしてか、観光地に向うための道は単なる「通過場所」となり果てて、必ずしも昔のように、道は人々の文化を繋ぐ荷い手として寄与していない。

こうした昔の街道が、近代高速交通網により寸断され、保存されずに無くなつてしまふのを憂いて、歩いて旅を重ねながら記録に止めて残したいという思いの、現代の紀行文や随想録作家も結構いるようである。旅に人生を重ね合わせて懐古する気持ちは、今も昔も変わらないのであろうか。

中山道街道沿いには、今でも数多くの名所旧跡が残されており、歩いて楽しめる街

道であり後世にも温存したい道である。

こうしてみると本来街道、「道の文化」とは、近代交通手段に頼らないで、時間の扉を叩きながらの、徒歩により発展した文化だったのではあるまいか。

事件の発端

上野清太郎が、中山道を徒歩で日本橋から京都まで、大学二年の留年中に踏破したのは理由があった。

全国的に燎原の野火のように広がる昭和四十年以降の学園紛争に癡々して、これから進むべき司法の道を問い直し、自分を見詰め直す旅であったのである。

もう一つは、破産後の父親の逃避行が、中山道沿いだったこともあった。

いわばその心境は、今も昔も老若男女の迷いを振り切る四国巡礼や秩父・坂東札所巡礼に似た心境に近いものがあつた。

もうひとつ別な動機があつたようだ。

別名木曾街道とも言われた中山道だが、島崎藤村の故郷、妻籠や馬籠「夜明け前」の舞台となつた南木曾を通つていたからである。野次馬的に述べるならば、島崎藤村の愛人であつた、姪の島崎こま子の数奇な運命を辿り最後に、郷里の妻籠や馬籠に戻つた舞台にも触れてみたかつたのである。

大正二年(一九一三年)四十一歳の藤村は、幼い三人の娘を亡くした後、相前後するよ

うに妻の冬子にも先立たれた。

寂しさの故なのか、手伝いに来ていた姪のこま子を闇に襲い、妊娠させ仏国に逃げようにして外遊した。

朝日新聞の連載小説として掲載された、自伝的な長編小説「新生」で、節子と岸本捨吉の葛藤を、己の懺悔と告白の形で描く誘引ともなつたのである。

これは、藤村ファンなら周知の事実であろう。藤村のフランス遊学後、恋が再燃した二人だが兄の怒りで引き裂かれ、こま子は台湾に、藤村は「愛絶ち」を誓い、父正樹をモデルにした大作「夜明け前」を執筆し「中央公論」の連載が始まるのである。

台湾から戻つた一方の島崎こま子は、三高洛水寮の賄婦を皮切りに、一転、京大社会学社会科学研究会(京大社研)合宿所の寮母として、治安維持法犠牲者救援のために獅子奮迅の活躍をし、日本の最も危険な場所に身を置くこととなる。

やがて自らも、体制変革を目指す日本の学究徒メツカ、京大社研を襲う特高警察と壮絶に戦う左翼活動家になっていく。

島崎こま子の最後は、赤貧で行倒れ板橋救貧院に収容される境遇にまで落ちぶれる。回復後に婦人公論に手記発表、やがて郷里妻籠に返るといふ一生である。

妻籠に帰つても、終日「アカ」のレッテルを貼られながら、特高警察に見張られる日々を送る。本陣のお嬢さんとして、土地の子供達に書道を教える。

偉大な叔父を愛したばかりに、悲惨で数奇な運命に翻弄された姪の島崎こま子の余生である。やがて妻籠を離れて上京し、生前藤村から貰つた数珠を片手に、神奈川県大磯の地福寺に眠る叔父の墓に詣でた後も、二十余年生き長らえた島崎こま子であつたが、中野の病院で誰にも看取られずに急死したのである。

当時ノンポリ学生だつた上野清太郎が、中山道徒歩の旅のもう一つの理由は、藤村研究家で文科三類駒場寮友人から、この逸話を聞かされた後だつたかもしれない。

この話は、法曹三者の矛盾点を色濃く内在し、昭和に至つても明治憲法の遺物ともいふべき、旧態然とした剛直な司法官僚制度が、ある種底無しの暗部を抱えていた時代、今から四十数年程前の話である。

そうした暗部は、現代でも余韻を引き摺り、必ずしも解消され、完全に払拭されたとはいふ難い面がある。先ず、話は主人公上野清太郎が、何故弁護士になつたかの理由を詳細に語るところから始まる。

この話の主人公上野清太郎も、一・五年間の司法修習終了後、本当は任官希望、つまり裁判官に成る積りの一人であつた。

平成十一年、時の政府小淵恵三内閣総理大臣時代に、二十一世紀の高度化、複雑化社会を迎えるにあたり、司法の抱える諸問題調査や、IT(Information Technology)社会に備えて法的対処への改革を検討する目的で、十三人の有識者委員会による司法制度改革審議会を発足させている。前例のない審議会の発足は誠に慧眼であつた。

司法制度改革審議会第一回は、同年七月二十七日開始、平成十三年六月十二日第六十三回の会合を重ねた。その間大阪、福岡、札幌、東京で四回の公聴会、七回の国内実情視察会(含アメリカ、ドイツ、フランス、イギリスの海外実情調査)も実施された。

二年間の調査審議結果を取り纏め、同審議会は、最終的に司法制度改革審議会の時代を画した、根幹に拘る抜本的且つ壮大な意見書が、二十世紀の日本を支える司法制度という副題付で、平成十三年六月十二日付け提出された。

答申書の骨子は、今迄改革の取組をして来なかつた、法曹二者への猛省を促すと共に、国民の司法参加、慢性的に不足気味の裁判所や検察庁の人材体制の充実を提言していた。本提言を受け、文部科学省は、平成十五年十二月に、法科大学院協会を設置し、大学院認可を行っている。

平成十七年度現在、全国で七十四校(国立二十三、公立二、私立四十九校、総定員五八二五人)法科大学院が開校された。

司法制度改革審議会の答申を受けた、日本版口・スクールの発足である。やがて司法の諸問題を解決し、暗部も解消され改革・改善がなされるものと期待されている。

昔の旧憲法下では、裁判官・検事の養成(制度(司法官試験)と弁護士(養成制度(弁護士試験)とに分けられていたようだが、新憲法の下での法曹二者(裁判官・検事・弁護士)の養成は、全て最高裁判所管轄の司法養成所において実施されるようになった。

旧憲法の法制下では、明らかに、裁判官・検事の職位が、弁護士より上位にあるとの見解が多数を占めていたからに他ならない。

日本の司法反動の歴史ともいえる、裁判官新任拒否は、昭和四十五年(一九七〇年)三名の裁判官希望者に対する拒否から始まっているという。

それは丁度、全共闘の学生運動が高揚して、全国拠点大学でバリケード封鎖が実施されていた時期と期を一にしている。

実は、その後も平成六年(一九九四年)までに、毎年行われており合計五十名もの裁判官希望者が新任拒否された事実がある。

日弁連(日本弁護士連合会)は、最高裁判所の「人柄、能力、見識を総合的に判断した結果」とする説明では到底納得できないと、会長名でこれに抗する形式の「新任拒否に対する声明文」を、平成十六年五月二日付けの質問状として発表している。

上野清太郎も、裁判官になる希望が、最高裁判所の判断で不採用と決定され、任官拒否の内示を受けた一人であった。

成績が悪かつたわけでも、司法修習中の素行が悪かつたわけでも、学生運動をやっていたわけでも、思想傾向に偏りがあつたわけでもないのに、何か不適当な理由により、たつた一通の電報「ニンカンキョヒ」を受理した。最高裁判所の判断は理不尽と思つたが理由は全く説明がなかつた。

教官の検察官・裁判官による成績優秀者に対する修習期間中の「リクルート」、また逆に不適格者に対する陰湿な進路誘導、い

わゆる「逆肩たたき」が公然と行われた時代のことである。

上野清太郎に裁判官よりも、検察官もしくは警察庁特殊専門職である弁護士に成るべく働き掛けがなされた。背後に驚くべき力が働いていたとは、この時点では、上野清太郎自身知る由とて無かつたのである。

結果、上野清太郎は、自ら選んだ現在日本橋二丁目の、弁護士法人・岸本法律事務所所にイソ弁として、旧大宮市現在のさいたま市の自宅から電車を利用して、毎日通つてきていた。

JR東京駅の八重洲口北口で下車して、徒歩約十五分のところに弁護士法人・岸本法律事務所はあつた。

自由業といわれる弁護士の世界でも、雇う側と雇われる側が歴然である。

ボス弁は文字どおり雇用主で、イソ弁とはつまり居候弁護士(略、非雇用主つまり従業員のこと)である。従業員は、上野清太郎以外にベテラン女性の事務員澄子他一人と、三人の弁護士を抱えていた。

弁護士の数からいえば、岸本親子含めて都合六人所属の法律事務所であつた。東京では中堅所の事務所である。

上野清太郎のT大学二年先輩の、岸本義雄弁護士は、実質的なボス弁であつた。

名目上の代表は、父親岸本義一であつたが、既に息子の岸本義雄は、事務所を切り回す有能な二代目所長として、法曹界に名が知られていた。

父親岸本義一は、コロンビア大学ロースク

ル学位取得後、現地法律事務所にて米国独禁法、訴訟法、国際契約法等の実務経験をを経て、霞ヶ関の関弁連理事(関東弁護士連合会)の肩書き付であった。

だから、最初から息子の岸本義雄は、父親の法律事務所を継ぐ形で、法曹業界に入っている。

関弁連は、関東甲信越各県と静岡県の弁護士によって構成され、日弁連(日本弁護士連合会)の下部組織的な活動をしていた。

岸本義雄は、大学法学部三年在学中に司法試験に一発で合格した秀才であった。

いわば、地盤看板もあり父親譲りの明晰な頭脳と毛並みの良さ、同じT大卒であっても上野清太郎とは気構えも家庭環境も異なる、新進気鋭の法曹界のエリートの人であった。

上野清太郎は二人兄弟であった。

父親は、(有)上野玩具工業の経営者だった。零細企業社長だった父親の上野一太郎の思わぬ事業の躓きが元でこの家の次男、上野清太郎の挫折の人生が始まるのである。

五歳年長の兄の信夫は、金町にある地元工業高校に通った。兄の信夫は後妻の喜美子の連れ子であった。

次男の清太郎は、父親の上野一太郎と後妻の喜美子の間に生まれた子供であったが、兄の信夫と違う高校、葛飾の自宅から都立両国高校に通った。

最近同校は、都教育委員会方針で、墨田地区の中高一貫六年生学校モデル実験校に指定されているようである。

上野清太郎の両国高校入学までの人生は、家庭環境は決して裕福とは言えないまでも、比較的恵まれて順調だったといえる。

上野清太郎は、高校一年間の休学を余儀なくされたが、奨学金を受けながら苦学して両国高校を卒業すると、一年浪人して何とか学費の安い国立系、T大学の文科一類に合格した。

両親は無論のこと、兄の信夫も祝ってくれた。それは一家にとって、薔薇色の未来が待っているような吉報だった。

上野清太郎が、幸いT大学の文科一類に入学できたのは、昭和三十八年(一九六三年)であった。未だ六十年安保闘争の名残が大学内の各所に燻っていた頃である。

翌年の昭和三十九年(一九六四年)は、日本の威信を掛けた東京オリンピックの年で、経済的・政治的にも、また文化的にも諸外国に伍して飛躍を義務付けられたような状況下にあった。

反面昭和三十九年以降の、K大W大C大と相次いだ学費闘争を前駆発端にして、昭和四十三、四十五年には「大学解体」をスロ・ガンにした、全共闘運動が急激に発展した。ピーク時には、全国の大学の八割の大学、百六十五校が紛争状態に入り、その半数の七十校でバリケード封鎖が行われた。大学の自治は正に崩壊寸前の状態にあった。

T大医学部紛争を契機にして、全共闘の学生が安田講堂にたてこもり、機動隊と全面衝突したのは、昭和四十三年(一九六八年)六月の出来事である。

安田講堂の衝突紛争終焉後、大方の学生にはシラケが蔓延したが、一部のセクトは急速に過激化、武装化に走っていった。赤軍派の「よど号」ハイジャック、連合赤軍のリンチ殺人事件や浅間山荘での銃撃事件はこれ以後に起こっている。

この時代、日本の司法修習生の中に、過去こうした全共闘の活動家で、学園紛争を扇動するような立場にあった人間や左翼先鋭分子が、紛れ込むことを極度に警戒した最高裁判法官僚がいたとしても無理からぬことで、ある面当然でもあった。

司法行政権を委ねられた最高裁判所管轄下で実施される、司法修習制度の完全な遂行、法曹界の「人権の砦」を守ることが、急務であり最重要だったのである。

駒場の寮生活をしていた上野清太郎は、文科三類の友達との交際が多く、どちらかといえばノンポリ学生の範疇に属していた。時に、寮でラジカルな左派系の友達との付き合いで、二三回確かに義理デモに参加したことがある程度である。

後半の旅の紀行文の自費出版の話は後述するとして、二年生の留年時に、気儘な中山道の旅に出た理由は、自暴自棄になつて大学の授業に嫌気がさしていたこともあるが、寮の全共闘の友人の煩わしい誘いから逃げる目的でもあったようだった。

T大生の青田買いはつとに知られていたが、何故か警視庁幹部の先輩から上野清太郎への頻繁な働き掛けも煩わしかった。五年掛けて専攻の法学部を出たにも拘ら

ず、司法試験合格は、卒業してから二年の歳月を要したのである。

つまり一年留年に加え、二年の歳月を費やしたことになる。当然在学中から司法試験合格の夢は描いたが、まさか法曹界で、今日のように本当に飯が喰えるようになるとは、思ってもみなかった。

駄目なら国家公務員か、法律関係のサラリーマンにでもなろうと思っていたからだ。現に国家公務員の上級職に合格していたが、司法試験の夢も断ち難かったのである。

岸本義雄のように、在学中の合格こそ果せなかったが、上野清太郎が、論文式合格発表で、東京霞ヶ関の法務省の午後四時きっかりに貼り出される掲示板の張り紙に自分の名前を確認した時は、二十八歳と二ヶ月になっていた。

十月の口述試験にも合格して最終的に、合格率3%以下の難関を突破した実感を得た時、ようやく、父親の事業倒産の一家の厄病神から逃れ、これからは幸運の女神の微笑む未来が開けたと上野清太郎が有頂天になっていたのは無理もなかった。

だが、司法修習期間の一・五年間に再度の挫折感を味わい、裁判官任官拒否のレッテルを貼られようとは、この段階では知る由とてなかったのである。

母の喜美子と長兄の信夫が、合格を祝ってくれた。その頃長兄の信夫も、既に結婚していたので司法試験に合格した弟を誇らしく思い、夫婦共々喜んでくれたのである。通常大学卒業後、数年間も受験勉強を継

続しなければ突破できない司法試験の難しさを考えれば、幸運にも選ばれた勝ち組の一人として、洋々たる人生が開けると素人の三人が思いこんだのも無理がなかった。

だが、岸本義雄と上野清太郎の差は、単に司法試験の合格時期やイソ弁とボス弁の差だけではなかった。

それは育った境遇にあった。上野清太郎の都立両国高校一年の時、東京葛飾区で玩具製造工場を経営していた父親の上野一太郎は、親会社の連鎖倒産のありを喰らって、東京地裁で破産宣告を受けている。

相談した地元葛飾の平井貴一弁護士に、車に乗せられ、東京地裁に破産申立を行い、地裁で審尋を受ければ、債権の免責が可能だとすっかり信じてしまった。

銀行や繋ぎ融資の地元信用金庫からの借金、雄に一億円を越えていたが、それまでの父親一太郎の(有)上野玩具工業の稼働率は、極めて順調で従業員を数人抱えた下町の比較的健全経営の会社として金融筋にも信用があった。

直接の原因は、二千五百万円の親会社の五枚の融通手形が、期限までに落ちなかったのである。

然も、約束手形と、融通手形の区別さえ、父親の上野一太郎は知識に疎かったのである。仕事を回して貰えると、口約束の下で迂闊にも、あるうことが親会社の会社役員に懇願されると、融通手形の裏書をしたのである。高性能プレス機械への投資も裏目

にでた。工場も家屋や土地は当然既に担保に入っていた。

普通、約束手形が期限までに落ちなかった場合でも、どんなに不渡りを買戻しても一端不渡りを出したという情報は直ぐに取引関係先や金融筋に伝わってしまう。

全ての金融機関が貸し出し資金の回収、通称「貸しはがし」に取り掛かる。約束手形の場合ですらそうである。まして知らなかったとはいえ、上野一太郎の融通手形の裏書等という行為は、信用を失う最悪で最愚の事例と言えたのである。

今まで仕事をくれた取引業者は、潮が引くように周りから遠のいていった。

融通手形を処理していたことが知れたのか、取引金融機関の信用を失い、通称「貸しはがし」の憂き目にあい、その場凌ぎの金策で、友人・知人からも借金をした揚句に、街の高利金業者の金で充当しなくては工場が廻らなくなってしまった。

あげくの果てに、上野清太郎の一家は、(有)上野玩具工業をたたんで債権者の追求を避け、代理人の平井貴一弁護士に勧めもあつて、夜逃げ同然で埼玉県大宮市、今のさいたま市に移り住まざるを得なくなった。

大宮の借家の確保で、喜美子は群馬県藤岡の実家の兄の援助を仰いだ。

実家の兄は、正直いって義兄の上野一太郎の倒産劇に出来るだけ拘りたくないというのが本音であった。

「いよいよ四つ木の家もお仕舞ですかね」妻の喜美子は感慨深げに、二人の息子と

一緒に、自宅の玄関を閉じた。

工場兼住居の玩具造りの屋根の下に、誰よりも多くの記憶と未練を残してきた。

それは、後妻として幼い四歳の信夫を連れて、最愛の上野一太郎頼りに嫁いだ日々の想い出に繋がっていた。よくぞ子連れの人を貰ってくれたと感謝して、結婚当初の夫婦仲は極めて良かった。

美人の喜美子を迎えて、一太郎も張り切っていた。二人でこの小さな玩具屋の土間で、セルロイドのプレス機械を汗を滴らせて操作する手に、若い希望と未来があった。

一年後、直ぐに次男清太郎が生まれた。

今や、(有)上野玩具工業所有の全ての土地・建物・機械類、自宅の家財に至るまでが管財人の手によって管理された。

居間の柱に古い時計が掛かっていた。

その柱時計だけが、母の機転で管理前に、四つ木から大宮の場末の小さなバラックのような家に移された。四つ木の家にあった時と同じように振り子の音が、変らぬ時を刻んでいた。

父親の上野一太郎だけは、大宮の家にまで押掛けてくる債権者からの追求を避けるかのように、一時行方をくらまざるを得なかった。一太郎はどうやら、昔の中山道沿いに自動車で逃避行を続けていた。

自分の居所は定期的に、妻の喜美子に電話連絡してきた。同時に申立代理人の平井弁護士とも連絡をとっているようであった。必要があると、戻ってきて少額管財手続きのできる、東京地裁に弁護士に同道して

出頭した。財産や経理上の事が絡む時は、妻の喜美子も同伴で弁護士事務所に向いた。

最近の精神科医の分析によると、最近妻にとつて、夫は自分の所有物だという感覚が強くなっているという。

昔は確かに夫が妻を所有物と思っていたのだが、何時の間にか逆転した。一般論で、結婚すると夫は妻を母親として見るようになるという。

逆に妻は夫を父親として見ることは殆ど無い。基本的に、夫が心理面で妻に頼りきってしまう。

夫が妻にべったりとくつき付き、まるで子供のようになってしまうのだという。

結婚後の父の一太郎の場合も、正にこれに近かった。最初の内こそ、意固地に夫の権威を保っていたが、特に倒産の悲劇が襲った後は、すっかり自信を喪失して、しっかり者の妻の喜美子に頼りきっていた。

父親の一太郎は、家を出る時ただ一言

「俺が馬鹿だった。すまない！だが清太郎は心配するな高校だけは行かせてやる。」

と詫びただけで倒産の原因を息子二人に一切語らなかつた。

父親はそういう性格だった。

父親の経営方針に、日頃から批判的だった兄の信夫は、それみただけで冷淡だった。

でも一家の置かれた窮状は、二人とも喜美子の日常行動から充分理解していた。

父親の一太郎は約束を果さなかつた。

いや、逃避行を続けて出来なかつたというより、腑抜けになつて果たせなかつたの

である。融通手形の裏書という自らの無知に起因した失態の大きさに苛まれ、己の不甲斐無さを責める余りに精神的な鬱状態がきて、眠られぬ日々が続いた。

平井弁護士との交渉でも、妻の喜美子が間に入らないと進展しなかつた。鬱状態に陥つた父親一太郎は、ひよつとすると自殺するのでは、そんな予感すら一家にあった。その予感是一年後、上野清太郎が高校二年の冬に、不幸にして的中した。

万策尽きた父親一太郎は、木曾山中の妻籠の旅館で服毒自殺したのである。

知らせを受けた時、開業当初から油まみれになつて一緒に工場で働き、プレス機械を動かす何よりも労苦を共にしたこともある喜美子は急に老け込んだ。兄の信夫も、工業高校を出たのに家業を手伝わずに川崎に飛出したことを悔やんでいた。

今は服毒自殺の場合、巷でも殆ど睡眠薬自殺の話は聞かれなくなっている。

睡眠薬もベンゾジアゼピン系が主流になり、副作用面からも改良されていたので、100%安全となり、睡眠薬自殺は出来ないとされているからである。

当時は医者によつては、呼吸抑制などの中枢神経系を麻痺させる、バルビツル酸系(バルビタル)やプロムワレリル尿素(プロバリンカルモチン)やアドレムが処方されることもあつたのである。

父親一太郎の遺体を木曾まで引取りに兄の信夫と喜美子が出掛けた。

鄙びた妻籠の宿「妻吉」の主人から通報

があつたという事で、仏になつた一太郎の遺体を前にして、二人は木曾福島の警察署の刑事から事情聴取を受けた。

父親は、睡眠薬自殺を遂げたと聞かされた。妻喜美子は信じられなかった。

確かに夫の一太郎は、破産後は睡眠薬を服用していたが、平井弁護士からの報告によれば、工場・家屋機械を処理する破産管財人も決まり、破産終結決定で、審尋の後にやつと債務の免責決定が成されると聞かされていたからだ。

木曾福島の警察署は、財布と名刺入れから上野一太郎の素性が知れると同時に、既に葛飾警察署に仏の身元照会を終えていた。上野一太郎が、東京地裁から破産宣告を受けたこと、喜美子が連れ子付の後妻であること、数人の社長から父親の事業推移や破産に至る経緯までも証言を得た上で、二人に事情聴取をしていたのである。

母喜美子は、父上野一太郎の不名誉な自殺を懸命に否定した。補足して父の頑固で意思の強い性格を強調したが、警察は上の空で言葉を聞き置いただけだったようだ。

木曾署の刑事は、枕元のバルビツール酸系の薬剤とウイスキーのボトルを指し示し、兎も角多量の薬を飲んだようだと言った。

実の所、単に薬量を間違えた事故死だったのか、本当に多量服用で自殺したのか不明であった。母の喜美子は、承服できずに絶対に自殺ではないと気丈に抗弁したのだが、警察調査には自殺として処理された。

何時も乾燥した二月の天候なのに、その日は珍しく雨の日だった。

群馬県の藤岡の火葬場で初めて、台車のレールに乗って父親上野一太郎の焼骨が引き出されてきた。

火葬炉の奥は未だバーナが赤熱状態で、開かれた耐熱扉から湯気を立てるかのような、独特の肉が焦げた臭いの記憶は、脳裏に沁み付き上野清太郎の、トラウマとなり一生忘れることのできないものになった。

骨上の時、喉仏の部分が綺麗に焼け残り、遺族四人で思わず合掌した。

おんぼやき(火葬場職員)も、こんな綺麗な骨は見た事がないといって褒めた。最も焼けた骨を褒めるのは、おんぼやきの務めであると後で知れた。

遺骨の一つ一つを、母親の喜美子、兄信夫夫婦、清太郎の四人の渡り箸で、骨壺に丁寧に納めた。最後に、妻の喜美子が残った喉仏の骨上納めをした。

喜美子は過ぎし年月の、想い出を誰聞かせるでもなく呟いていた。骨上げが終わると、鉄のドライバー状の先端で、おんぼやきが鉄板の上の骨を叩いて砕いた。

小さな箒で掃きながら残ったものを骨貯めに捨てた。清太郎は、自分の骨が叩かれ捨てられたようで厭だった。

小さな白い骨壺となつてしまつた父親を、母方の菩提寺、藤岡の光明寺で埋葬した。

上野家には埋葬する墓は無かつた。葬儀の参列者は、皆傘を差して、濡れながら、直ぐに初七日の環骨回向の墓に赴い

た。ほんの内輪の親族四人と、一時的に埋葬を同意した母方の兄の計五人だけの寂しい納骨であつた。

寺出入りの石屋の開けた墓石内に埋葬する時、立ち会つた光明寺の住職が、環骨勤行の簡単な読経の後で、墓の前で皆を笑わせようとした。

「この備えた墓前団子が、鴉の格好の御馳走になるんですよ。翌日にはすっかり無くなつていきますからねー」

「何処かで、見張っているのですかねー」母の兄だけが応じたが誰も笑わなかつた。取引先の社長を誰も呼ばなかつた。

自殺ということでも新聞種にもなつていたので、噂が広まって呼んでも来なかつたかもしれない。父親の上野一太郎と懇意の二三の同業社長が、参列を希望して、義理電話を寄こしたようだが、母親は丁寧に断つた。上野清太郎は、この馬鹿丁寧な断りは母の喜美子の意地だと思つた。

この日の出来事を、上野清太郎は決して忘れまいと心に決めていた。

破産宣告後の独自の収入は、自由になつた。会社経営が順調に廻つていた時から、すっかりで経理担当役員の子の喜美子は、父親の逃避行開始と同時に、窮乏を予測してかスパ・マ・ケットのレジ係として働いていた。最愛の一太郎を亡くした、喜美子の立ち直りはすぐぶる早かつた。

喜美子は、大宮に移り住んで直ぐに、市役所に生活保護の申請を提出していた。一家は、生活保護手当てと、工業高校卒

業で川崎に就職した五歳年長の義兄の信夫と、喜美子のパート収入がなければ、確実に路頭に迷っていたのかもしれない。

それだけに上野清太郎は、母は無論のこと、高校を卒業させてくれた血のつながらない五歳年長の義兄の信夫に、今でも頭が上がないのである。

上野清太郎自身も、一家の窮状を見かねて、安閑と高校に行っていられる身分でないことを自覚した。

父親の自殺後に両国高校の受持ち教官に一年間の休学届けを提出して、新聞直売所専属の新聞配達員の仕事をした。

上野清太郎の境遇に、受持ち教官も親身になって心配してくれた。でも誰の哀れみを受けたくなかった。最初は中途退学して働く積りだったからだ。

「折角良い高校に入ったのだ。絶対に高校だけは卒業しろ！俺の二の舞だけはするなよ。お前は更に大学まで頑張って行け！学費は俺が何とかしてやる。」

喜美子と義兄信夫の必死の説得がなければ、一年間休学届けに止まらず、そのまま両国高校を退学していたであろう。

父親代わりの信夫は、清太郎の学費工面で自己犠牲的な辛酸を強いられたようだが、それも厭わなかった。義弟の運に賭ける一縷の望みをそこに繋いだ。

上野清太郎の学費援助は、耐え難い窮状を救ってくれる一家の期待の星、一筋の光明にも思えたからである。二つの特別奨学金を貸与された、成績優秀な義弟に対する、

一種の教育投資的な意味合いがあった。

当時高校生の上野清太郎は、破産法、民事再生法、会社再生法という法律があることすら知らなかった。

父親が相談した、代理人平井貴一弁護士との破産手続きの何たるかも知る由とてなかつた。でも何となく法曹界、然も裁判官を目指すそうと、漠然と夢を描いたのは、この時の父親の破産宣告に続く自殺が動機だったのだから皮肉といえれば皮肉である。

東京二十三区の中で葛飾区は、大田区に次ぐ、中小企業で支えられる地域である。

江戸川、中川、荒川、綾瀬川の水運を利用した近代工場が創業した事例もあるが、大半が従業員数人以内の小規模工場で、金属プレス、機械部品、粉末冶金、ゴムベルト・ホース、玩具、印刷等が軒を接しており、何れも零細家内工業であった。

家内零細工業の街の風景は、葛飾では、明治〜大正の昔も、昭和の時代の今も余り変わりがない。一工場の出荷額は、二十三区の中でも下位に位置していた。

だから葛飾区域では、こうした連鎖倒産劇は日常茶飯事のできごとであり、別段珍しい事象ではなかったのである。

何時の時代も、零細下請け企業はシワ寄せを喰らう宿命にあった。

着実に生きる経営者と言えども、葛飾区の浮かれ話に多少なりとも乗せられて怪我をした者は多い。

特に、バブルが弾けた後、苦肉の金策の融通手形が誘引となって、上野清太郎の一

家の倒産のような悲劇話は、毎年百件規模で葛飾区内の至るところに転がっていた。

中小企業、零細企業の多い地域であることから、葛飾は昔から仏教や神道の伝統的な死生感の日本の宗教よりも、むしろ神のもとには誰でも平等とする、抑圧身分からの開放説を唱えるキリスト教等の大衆煽動の宗教布教や左翼系の労働運動も結構盛んで、日本共産党も葛飾区に拠点を置いていた。

上野清太郎が物心ついた頃、両親は既に家の土間に据えた、二台のプレス機械にしがみ付いていた。

地域一体に引継がれる、葛飾区の製造業の特徴は、働く場所と住む場所が近接の「職住接近型」、つまり平たく言えば全て、零細家内工業に因って培われたといえる。

葛飾の平成十年の規模別工場数でも、全五二八〇工場の内、従業員三人以下が三三八〇で64%を占め、九人以下が一六一〇で30%、合せれば何と90%強が零細家内工業なのである。

それだけに昔から、葛飾地域一帯は、危険性も内在し、企業の慾呆け経営者たちを地獄に誘い、墓穴に葬り去る魔の地帯だったともいえたのである。

大正生まれの父親上野一太郎は、根っからの職人であった。四つ木にあった玩具を作るセルロイド工場が倒産して、一台の中古プレス機械が売りに出ているのを聞いて手に入れたのが、そもそも(有)上野玩具工業を始める発端となったようだ。

この地の玩具産業の起こりは、大正三年の旧本田川端(現在の渋谷公園付近)千種セルロイド工場が創業したことにある。

一時は従業員二百数十名を擁し、この地区でも有数の大工場になったが、大正九年の不況のあおりを受けて倒産した。現在渋谷公園内に、セルロイド工場発祥の記念碑が残されている。

その後、渋谷、川端、四つ木地区は、セルロイド工業の街として発展した。海外に製品が輸出され、東京はもとより全国的にも名が知られるようになった。

戦後になっても、多少の景気の浮き沈みはあるものの、セルロイド玩具製品は活況を呈し、全盛期には日本の生産額の略九割が発祥地の葛飾地域で製造された。

野口雨情の童謡に『青い眼の人形』がある。大正十年十二月号の児童雑誌「金の船」に発表され、これに本居長世もとよりながよが曲を付けた。長調の曲が短調に変調して、また長調に戻って終わる旋律は大ヒットした。同時に、この地区で製造されたセルロイド製の青い眼の人形は飛ぶように売れたという。

青い眼をしたお人形は

アメリカ生まれのセルロイド

日本の港へついた時一杯涙を浮かべてた
わたしは言葉がわからない

迷子になったらなんとせう

やさしい日本の嬢ちゃんよ

仲良く遊んでやっつくれ

元々この雨情の歌詞は、三女が二歳の時に、セルロイド製のキュー・ピーと遊んでいる情景を観て詞を書いたと伝えられている。

この大ヒットした童謡には後実談があつて、昭和二年に日米親善の架け橋となつて、アメリカから実際に、手作りの人形約一万体が、文部省を通じて全国の幼稚園、小学校に配られたのである。

そうした後実談もあつてか、セルロイド製人形は更に売れたのである。

もちろん、日本のセルロイド工業は、当時殆どが上野清太郎の一家のように零細な家内工業と、小規模の工場群で支えられていたのである。

今は、セルロイド玩具は殆ど無くなったが、玩具の街葛飾では、青戸の「テクノプラザ葛飾」で、玩具産業連合会の職人さんたちが「おもちゃ病院」で持込まれた壊れた玩具の無料修理を行なっている。

昭和二十五年以降、一時的な朝鮮動乱特需に、活路を見出し金属加工業にまで手を広げた工場もあつたが、そうした工場は特需が終わると皆斜陽になった。

上野清太郎の父親は、燃え易く危険なセルロイドからビニールやプラスチック成型加工にこそ転換したものの、終始一貫して玩具製造に固執して行きたいという信念を抱いていた。

「独楽は絶えず廻っていないくは倒れるが、最後は無慾万両だ!」

この言葉は、江戸時代の貯蓄十両、儲

け百両、見切り千両、無慾万両 からきていた古い格言で、何処かの誰かから聞きかじつた、いわば亡父上野一太郎の口癖でもあり座右の銘でもあつた。

東京地裁から破産宣告を受けた途端、つまり独楽が廻らなくなった途端、既に心も倒れてしまい、無慾万両と聞き直れなくなっていたのであるうか?

父親の真意は例え倒れても、無慾万両といえる男でありたいと、そんな人生を送りたいと願っていたのではあるまいか?

本当に父親は自殺するような弱い男だったのであるうか?父の口癖を想い出す度に、上野清太郎は、何処か違うのではないか?ふとそんな疑問が心を過ぎる時があつた。

始めは、五歳年長の信夫も、工場実習と称して、金町の工業高校から帰ると両親の仕事を手伝っていたが、専属従業員やパートの女性を雇用してからは、父親一太郎の経営方針や仕事方法を批判するようになって疎遠になった。

それは、何処の工場経営の親子関係にもみられた極く普通の確執であつた。

上野清太郎は、当然父親の仕事を継ぐのは兄だと思っていた。

両親も最初は、その積りであつたようだが、でも父親の一太郎は、小学校時代から健康優良児で表彰され、自分の血の繋がる次男の清太郎が自慢であつた。

事業を次いでくれるのは、長男信夫よりも次男清太郎であつたら良いなあと密に期

待もしていたはずである。

長男信夫は、金町の工業高校を卒業すると、地元を離れて臨海部に新設された川崎の機械工場にさつさと就職して、葛飾の家に寄り付かなかったからだ。

ところが、次男清太郎が弁護士になった頃から、兄の信夫はどうした風の吹き回しか、心境の変化が定かでないが、何時の間にか元の古巣の葛飾に舞戻り、密に(有)上野玩具工業の再興を画策していたようなのである。

上野清太郎は、大学卒業後の二年以内に、最難関の司法試験に挑戦し無事合格した。

その後の司法修習期間の教育も大過なく、無事終了した。しかし結局、希望の裁判官に成れなかったのである。最高裁判所のある判断の下で任官拒否されたのである。

四月から始まる司法修習の前年、最高裁判所から口述試験時に配布された書類に、必要事項を記入して十一月に提出した。

司法修習中は、修習生には修習専任義務が課せられた。仕事をしている者は、例えばアルバイトであっても退職しなければならなかった。

更に来年の四月の研修所に入所するまでに、十二月中旬の面接と身体検査を受けなければならなかった。

過去に逮捕・起訴された経歴者は、全く別会場で面接が行われた。

司法試験合格者の中に、昔の学生運動や全共闘の闘士が合格して、実際に混じるこ

ともあったからである。

最高裁判所は、国籍の有無から、合格者の詳細な個人情報全てを収集して場合によっては、逮捕歴・起訴歴ある者に対しては特別に誓約書を書かせて、あるいは保証人を呼び出して面接が実施されたのである。

最高裁判所の、この段階の身辺調査は過去のアルバイト先に至るまで、手紙を出したり、電話を掛けたりして、徹底的に司法修習生の素行調査が行われたのである。

必ずしも全部そうだと言いつてもいいが、場合によっては、最高裁判所の名を伏せ、権力をかさに謀報活動公認の警視庁公安部を動員した調査も辞さない程徹底していたといわれていたのである。

上野清太郎の家族構成はもちろん、家族の経歴や素行の全て、本人の労働運動歴、思想傾向等々が、最高裁判所によって白日の下に暴露されたのである。

もちろん、上野清太郎が、理由は不明であるが、大学二年の留年期間中に、中山道を徒歩で京都まで踏破したこと、然も、三十番目の宿、塩尻宿以降の行動が何故か詳しく記録されていたのである。

その他、上野清太郎の場合は、父親が、東京地裁で破産宣告を受け、翌年自殺した事、母親が後妻である事等々全てである。

葛飾区四つ木の新聞専売所の親父は、最高裁判所から手紙をもらったり、あるいは電話をもらったりした時は、さぞやビックリ仰天したことであろう。

丁大の学生時代の家庭教師のアルバイト先の三軒の家庭では、何故今頃あの親切な先生のごとで、最高裁判所からこんな手紙がくるのだらうと一様に疑問に思ったに違いない。

この調査一つをもってしても、過去日本の司法制度の異常さが垣間見えるであろう。冒頭に述べた、政府が司法制度改革審議会を発足させ、十三人の有識者による意見を提出させた本当の狙いが、素人目にも良く理解できるのである。

文科省の日本版口・スクールの発足で、やがて司法の暗部も解消され改革・改善がなされるものと期待されているのだが・・・。

紀行文一編

神田の街は実に多面的な顔をしている。

JR神田駅、御茶ノ水駅、水道橋駅、白山道り、明大通り、本郷通り等の三駅と三道路が交差する街、五つの私立大学が共存する学生の街、在庫書籍一千万冊といわれる古本屋街、湯島聖堂とニコライ堂二つの聖堂を結ぶ聖橋、幽霊坂や男女坂、三崎稲荷神社や出世不動尊、江戸から明治時代の文化・歴史が垣間見られる街、そして時代の大きな趨勢が、昔工口本ビニール本等の雑記本を商う覗きの一角を、若者向けのスキムを商う街に変身させていた。

ある日、フリージャーナリストの関口轍次が、自費出版と思しき小冊子、上野清太郎

著「中山道一人歩き」を手にしたのは、たまたま神田の古本屋街であった。

関口轍次の顔も多面的で、ノンフクシヨン作家でありルライターでもあった。今は、週刊誌の企画部に記事を書いたり、文庫本を執筆したりして暮らしていた。

神田神保町の「株DトップP・ニュース」社の503号室に自分の事務所を構えていたので、近くの神田街のみならず、何時ものほつつき歩く貪欲なネタ探しの習性は、関口轍次の行動そのものであった。古本屋を梯子して、興味を抱いた本を購入するのも、その活動の一貫だったに過ぎない。

小冊子は、「中山道一人歩き」著者上野清太郎が大学二年時に、中山道を徒歩で踏破した記録であった。

本人のあとがきから著者の昔の旅と知れたが、本当に四十年前に記述した冊子であるのかは疑問が残った。何故なら所々、時代考証面で矛盾点が存在するからである。

ひよつとして、昔の記録を元に意図して現在に置き換え、自費出版したのではないかと思わせる節があった。明らかに書き直されているような箇所が随所にあった。

しかし、それは何のためにそうしたのがあるのか？ そうしなければならぬ、著者に何かの事情があったのであろうか？

旅の途中の感想や調べた土地の神社仏閣の歴史を併記しながら、克明に紀行文形式で書き残している。

文体は、非情な位に客観的である。

まるで感情のない観光案内、過去の歴史を振り返る防備録に近い文章に徹して淡々と記している。

それにしても、何故著者の上野清太郎は、かくも詳細な紀行文を学生時代に残す気になったのであろうか？

青年時代には、誰しも覚えがあるが、自分の未来を見詰めて孤独な一人旅に出たくなる時がある。

シラフを背負い時にはヒッチハイクで、自動車を止め、あるいは野宿覚悟で、ユースホステルや寺社の厨に世話になりながら、上野清太郎も徒歩の旅を重ねたようだ。

最初関口轍次は、そんな単純な想いで、なんの変哲も無いが、現代と過去が入混じった青春の断片のような文章、気にも止めずにパラパラと拾い読みしながら自分の人生を重ね合わせる積りで、頁を繰っていた。

全文を詳細に読むには時間が惜しかった。斜め読みだったにも拘らず、関口轍次は一つの疑念を抱いた。この本は、ある事件を伝えるメッセジではあるまいか？

紀行文としては文章の書き方も素人臭く稚拙で、中山道踏破の労苦は是とするが、何か得たいの知れぬ感覚、文章行間にある種犯罪の匂いが隠されているような、不思議な閃きにも似た想いが、突如として身裡を駆け巡るのを禁じえなかったのである。

長年この道で喰ったことがある、関口轍次のジャーナリスト特有の直感であった。

関口轍次が、何故そう思ったのかは後述

するが、先ずはそのまま紀行文を再録する。紀行文は、中山道の京都を加えて七十宿、二編に別けて構成されていた。

日本橋から上尾、沓掛を経て蕪原宿迄の行程が、紀行文その一の編、蕪原から伏見、関が原を経て京都迄が、紀行文その二の編に淡々と記されていた。

特徴的な点を上げれば、老境でもないのに寺社の記述が多い点であった。

1. 日本橋より板橋へ

江戸日本橋は、東海道、中山道、甲州道中、日光道中の起点である。慶長八年(一六〇三)に架けられた日本橋は、単に二本の橋が渡されただけということから、後に日本橋の名が起ったという説があるが定かではない。以後日本橋は、何度かの修復を経て二十代目まで今日に至っている。現在の石造りのアーチ型ルネサンス様式は、明治四十四年(一九一一)に建設された。橋の中央にあった「日本国道路元標」は橋の袂に移され、代りに刻んだ五十軒の銅板が中央に埋められている。

日本橋を東に向かってスタートするとすぐ左側に三越百貨店がある。天和三年(一六八三)伊勢出身の三井八郎右衛門高利が呉服店越後屋を開き「現金掛値なし」の営業で成功、後に金融業にも進出し三井両替店を設立した。明治末期、百貨店三越と名称を変更する。周辺は三井関連企業が密集している。

神田駅のガード下をくぐり、須田町信号の五差路を直進し万世橋を渡りすぐ左折して昌平橋

を渡り右カーブしながら坂を上って行くと、右側に神田明神がある。祭神は大国主命と平将門で、江戸三大祭りの一つとして有名である。ここには映画、テレビでおなじみの銭形平次の碑もある。野村湖堂の名作「銭形平次捕物控」の主人公ではあるが勿論架空の人物である。左側の森の中には湯島聖堂がある。前身は徳川幕府の儒臣、林羅山が上野に建てた家塾で元禄三年(一六九〇)徳川五代將軍綱吉がここ湯島に移し、後幕府の正式の学問所となり儒学(孔子・孟子の教え)を中心に教えた所である。

道を進み本郷に入ると右手に東大赤門がある。東大の敷地は、加賀藩前田家の上屋敷跡である。赤門は文政十年(一八二七)加賀藩主前田斉泰に嫁いだ徳川十一代將軍家斉の息女の溶姫のために建てられた朱塗りの御守殿門である。東大構内には当時の緒候江戸藩邸中第一の名園といわれた心字池がある。通常三四郎池と呼んでいるが、これは夏目漱石の小説「三四郎」にちなんで付けられた俗称である。

東大農学部前の三叉路が本郷追分で、直進するのが日光御成道、左の道が中山道で、白山、巣鴨を通って板橋宿に至る。白山周辺には、お寺が多く有名人のお墓がたくさん見受けられる。白山一丁目信号から左に入り坂を百歩ほど下りて行くと右側に円乗寺があり、寺の入口に八百屋お七の墓がある。元の道に戻り先に進むとすぐ右側に大円寺がある。八百屋お七ゆかりのお寺として有名で、入口にはほうろく地蔵が安置されている。またここには、幕末の砲術家高嶋秋帆の墓がある。

その他、高林寺には緒方洪庵、本念寺には

太田蜀山人などのお墓がある。この本念寺から左へ二百歩ほど行くと小石川植物園がある。現在は東大付属植物園であるが、江戸時代には館林藩の下屋敷であった。館林藩主綱吉が徳川五代將軍に付くところを菓草園とした。また徳川八代將軍吉宗は、この地に小石川養生所を開設した。青木昆陽が、ここで甘藷を試作して、成功したことも良く知られている。

中山道に戻り、山手線巣鴨駅手前を右に五百歩ほど入ると国指定特別名勝六義園がある。元禄十五年(一七〇二)徳川五代將軍綱吉の側用人柳沢吉保(後、川越藩主、甲府藩主)が自ら設計指揮して完成した回遊式築山泉水庭園である。庭園は吉保の文学的教養により作庭され、園名は古今和歌集の序文に見える六義により命名され、園内八十八ヶ所の名勝と共に元禄時代を代表する和歌趣味豊かな大名庭である。都内屈指の名勝として文化財保護法により指定されている。

中山道に戻り、巣鴨駅を越える道は二つに分かれ直進するのが国道一七号線で、左の地蔵通り商店街の道が旧中山道である。地蔵通りに入るとすぐ左手に真性寺があり、ここに江戸六地蔵の一つがある。参拝者も多くいつも賑わっている。真性寺の向かい側の高岩寺には有名な「とげぬき地蔵」がある。お地蔵様をタワシでこすると病気が治るといわれ参拝客でいつも賑わっている。

六百歩ほど先に進むと右側に庚申塚があり、文亀二年(一五〇二)道行く人々の安全を守って建てられたもので、「中山道庚申塚猿田彦大神庚申堂」の石碑が建っている。当時は茶屋などもあり巣鴨の庚申塚として人々が集まっていた。

国道一七号線の右側の慈眼寺には、明治、大正時代の大文豪芥川竜之介、谷崎潤一郎、江戸時代の蘭画家司馬江漢、吉良上野介の家臣小平八郎(赤穂義士の討ち入りの際殺害された)などのお墓がある。本妙寺には、江戸北町奉行遠山金四郎、剣豪千葉周作、囲碁の本因坊家代々のお墓がある。元の道に戻り先に進み明治通りを越えると板橋宿となる。

2. 板橋より蔵へ

旧道は、明治通りを横断して貨物線の踏切を越えて進むが踏切の手前左側の板橋駅東口広場の向かい側に新撰組隊長近藤勇の墓がある。天然理心流の剣豪近藤勇は徳川十四代將軍家茂上洛の際その警護にあたり、以後新撰組を組織して勤皇志士の取り締まりに当たりその名を浴中に轟かせた人物である。千葉県流山で捕らえられ明治元年(一八六八)板橋の処刑場で処刑された。近藤勇を偲んでこの地に墓が建てられた。

駅前の一等地に墓地があるのは全国でも珍しい。旧道は踏切を越えて進み国道一七号線を斜めに横断する。不動通り商店街が旧中山道板橋宿の中心である。横断すると右側にファミリーレストランスカイライクがあるが、この裏側に東光寺があり、ここには関ヶ原の戦いに敗れ八丈島に流された西軍の副将宇喜田秀家の墓がある。また境内には寛文二年(一六六二)建立の江戸では最古の庚申塔がある。青面金剛童子を中心に本尊とし、日像、月像、童子、夜叉、鬼、猿、鶏が刻まれ美麗で一見の価値がある。

商店街を先に進むと、右側に板橋七福神の恵比寿様として知られている観明寺がある。ここ

にも東光寺の物と匹敵する庚申塔がある。中宿にはスーパーライフのお店があるが、ここが板橋本陣飯田新左衛門の屋敷跡である。石神井川に架かっている橋が板橋である。地名の由来は板の橋からである。橋の袂に日本橋より二里二十五町三十三間と記された木柱が建っている。

板橋より三百メートルほど進むと縁切榎が右側にある。この榎を見ると離婚される、または離婚がかなうという言い伝えがあった。そのため寛延二年(一七四九)閑院宮直仁親王の息女五十宮が徳川十代將軍家治に降嫁する時も、文化元年(一八〇四)有栖川宮織仁親王の息女楽宮が徳川十二代將軍家慶に降嫁するときもこの榎を避けて迂回し、文久元年(一八六一)孝明天皇の妹和宮が徳川十四代將軍家茂に降嫁の時はこの木にこもをかぶせたという。

ここから一キロほど進むと旧道は国道一七号線に合流し、さらに一キロほど進むと国指定史跡となっている志村一里塚が左手にある。日本橋から三里の地点で、東京都内に残る一里塚はことと北区にある西ヶ原一里塚だけである。先に進む荒川に架かる戸田橋を渡ると埼玉県戸田市となる。

3. 蕨より浦和へ

戸田橋を渡り国道一七号線を進んで行くと、道は二つに分かれ右の道が旧中山道で中山道商店街になっている。商店街の左手に岡田本陣跡があり、現在は蕨市立歴史民俗資料館となっている。蕨城、中山道、蕨宿などの資料、文化財等が展示されている。岡田家は蕨城主渋川氏の家臣岡田正信の子孫である。当本陣には老中水野忠邦、

皇女和宮、明治天皇などが休泊している。

旧道の右手には、足利一門である渋川家の居城であった蕨城跡がある。蕨城跡は現在、蕨城跡公園となっている。蕨城は戦国時代、小田原北条氏の支配するところとなったが北条氏滅亡後廃城となった。蕨城跡と隣接して和楽備神社がある。創建年代は定かではないが、渋川氏が蕨城を築城した時に城の守護神として八幡大神を祀ったのが始まりと伝えられ、江戸時代までは蕨八幡宮と称していた。明治四十四年(一九一〇)周辺の十八社を合祀して和楽備神社と改称した。蕨宿の総鎮守として信仰が厚く十二月十七日のおかめ市は大いに賑わう。

旧道に戻り商店街を進んで行くと右奥に真言宗三学院がある。本尊は慈覚大師作と伝えられる十一面観音像である。天正十九年(一五九二)徳川家康が寺領二十石を寄進、幕末まで続いていた。境内も広く子育て地蔵、六地藏、馬頭観音など見るべき物が数多くある。旧道はこの先国道一七号線を斜めに横切り右側に宝蔵寺を見ながら更に進んで行き栄橋を渡ると浦和宿となる。

4. 浦和より大宮へ

浦和市辻に入ると右側に辻一里塚跡があり石碑が建っている。傍には水の神弁財天も鎮座している。この辺りは湿地帯で水難を守るために、弁財天を建て地区の守り神とすると共に、中山道を旅する人々の安泰を願った。

旧道はこの先、国道一七号線を横断してそのまま直進すると右手にこんもりとした森が見えてくる。ここが調神社で、祭神は天照大神、豊受比売神、素戔鳴尊である。地元では調の宮

と呼ばれている古社で、鳥居や狛犬がない変わった神社である。中世には調と月は同じ読みから月信仰と結びつき月の使者である兎が狛犬代わりに境内の入口を守っている。「ツキはツキを呼ぶとのいわれから、幸運を授かるうと多くの人々が参拝に訪れる。境内には櫂の古木が多く日蓮上人が馬をつないだと伝えられる「駒つなぎの櫂」の大木がある。

旧道は商店街になっており仲町に入ると左側に真言宗玉蔵院延命寺がある。弘法大師の開山中興開山は印融上人である。奈良長谷寺系統の由緒あるお寺で、天正十八年(一五九〇)徳川家康から十石が寄進されている。絹本着色両界曼陀羅「木造地藏菩薩立像」などの文化財が堂内に残っている。元々浦和の起源は、この地藏尊を拝みに人々が集まってきた町という説がある。

玉蔵院の少し先左側に慈恵稲荷神社があるがこの参道は一七市場跡である。毎月一七日の日に市が開かれて、市は上宿が二日・十七日、中宿が七日・二十一日、下宿が十二日・二十七日となっており、月六回開かれていた。穀物、衣類を中心に売買されており盛況を極めていた。

本陣は星野家が勤めていたが遺構はなく、仲町公園に本陣跡を示す案内板が建っているのみである。この先旧道は浦和橋を渡り国鉄北浦和駅を左に見ながら進んで行くと左側に浄土宗郭信寺がある。この寺には、浦和市指定文化財となっている鎌倉時代の阿弥陀如来座像が安置されている。この先道を進み左手に国鉄与野駅を見ながら進んで行くとやがて櫂並木に至り大宮宿となる。

5. 大宮より上尾へ

櫻並木が終わる所に、武蔵国一宮「氷川神社」の赤い鳥居が建っており、旧道は直進するが、赤い鳥居のある道は参道で、ここから約二キロの参道が続き、櫻、桜などの並木は見事である。この参道は古中山道で江戸時代以前はこの道を通っていたが、神社内を通るのは神様に申し訳ないということで寛永五年(一六二八)に新中山道(今でいう旧中山道)を作った。

氷川神社の祭神は、素戔嗚尊、稲田姫命、大己貴命で八世紀には「武蔵国一宮」と定められた。徳川家康は開幕後、朱印領三百石を寄進している。氷川神社の分社は、埼玉県、東京都、神奈川県下に二百八十社あり、文字通り「武蔵国一宮」である。十二月十日には伝統的な大湯祭が行われ、参道には出店がびっしり並んで多くの人で賑わう。熊手市、十日市とも呼ばれている。赤い鳥居の所まで戻り直進する旧道を進んで行くと、まもなく左側に高島屋デパートがある。ここが紀州藩鷹場跡であった。高島屋デパートの所が大宮駅前であるがこの付近が大宮宿の中心地で、氷川神社の門前町として栄えたが、本陣、脇本陣、問屋場、旅籠などの遺構はなく今は商店街となっている。

商店街(旧中山道)を進んで行くと旧中山道と旧国道一六号線と交差する所の右手奥に曹洞宗大宮山光寺がある。創建は熊野那智山光明房の東光坊宿禰が黒塚の鬼を退治し、ここに草庵を結んだという古刹である。氷川神社に隣接する大宮公園の北側には、盆栽の故郷として全国に知られている「盆栽村」があり、この一角に盆栽四季の家がある。自由に散策と集いが

出来る憩いの場として有名である。元の道に戻り、旧道を進んで行き東北本線の高架をくぐる。まもなく左側に大田御嶽山道の道標がある。この辺りで大宮宿は終りとなる。

6. 上尾より桶川へ

旧中山道は宮原駅の前を通りしばらく進んで行くと右側に加茂神社がある。社殿壁面に加茂競べ馬の立派な彫刻があり、基壇部に「文政九丙戌九月吉日」の銘が入っている。溪斎英泉が描く木曾街道六十九次のうち「上尾宿・加茂神社」として神社と茶屋を描いている。少し行くと左側に石造不動尊を祀った魂霊社がある。愛宕町に入ると左手の櫻の森の中に愛宕神社が見えてくる。

更に進んで行くと左側に埼玉銀行上尾支店があるが、ここが細井脇本陣跡で、向かい側が井上脇本陣跡で駐車場奥に当時の屋根瓦が飾ってある。隣は林本陣跡でその隣の藤村医院は白石脇本陣跡である。この辺りが上尾宿の中心地であった。

埼玉銀行上尾支店のすぐ先に上尾宿総鎮守の氷川鍬神社がある。東京国立博物館所蔵「中山道分間延絵図」によれば、鍬大神宮(今の氷川鍬神社)の正面に本陣、両側と向かいに脇本陣三軒があったとされている。古くは鍬大神宮といつて、祭神は稲田姫命、豊鋤入姫命で農耕神である。明治になって氷川女神社、浅間神社を合祀して氷川鍬神社の名前になった。境内には二賢堂の記念碑が建っているが、これは菅原道真と朱文公の二賢者を祀ったことによるものであり、江戸から、信州飯山出身の雲室上人を、

鍬大神宮境内の「聚正義塾」という学舎に迎え、有為の若者の勉学の場に供したという。原市は、戦国時代から三と八の日に市がたつ古い市場町として、また平方は、江戸までの荒川船運、河川の要所として昔から発展している。

この先左側に上尾駅があるが、ここを過ぎると右側に真言宗遍照院があり、本尊は不動明王である。江戸時代には、二十石の朱印地を領した由緒ある寺で、寺子屋も開かれ筆子塚も残っている。商店街が終わってしばらく行くと右側に黒塚に囲まれた古い門構えの須田家がある。江戸時代この付近で栽培された紅花を江戸から遠く京都まで運んだ武州紅花の仲介問屋で、紅花関係資料を始めとし数多くの須田家文書が残っており、現在上尾市教育委員会が保管され市の文化財指定になっている。道はこの先直進して行くと桶川市に入っていく。

7. 桶川より鴻巣へ

旧道を進んで行くとまもなく県道川越栗橋線と交差する。この右側に「旧跡木戸跡」が建っており、桶川市指定旧跡になっている。この辺りから商店街となり賑やかな通りとなり、左側に幕末の頃建てられた旅籠屋が残っており現在も武村旅館として営業しており当時の庶民の宿屋の姿を伝える貴重なものである。

武村旅館の裏手には、天文十五年(一五四六)桂全善寿上人の創建である浄土宗浄念寺がある。朱塗の山門には、宿場に時を告げた「時の鐘」が残っている。旧道に戻り少し進んで行くと、数軒の蔵造りの商家が堂々と建っており、いずれも江戸時代末期の建物で貴重な建造物である。

蔵造りの商家の少し先右側に古い本陣門が建っている所が府川家本陣跡である。瓦葺、切妻、上段の間、座敷、湯殿、厠などが残っている。皇女和宮の下向や明治天皇行幸の際には大修理が行われた。埼玉県文化財指定となっている。

ここからしばらく進んで行くと左側に、弘治三年(一五五七)開基と伝えられる曹洞宗大雲寺がある。本堂脇に地蔵三体があるが、この中に「女郎買い地蔵」という粋な地蔵がある。寺の若い坊主が女郎買いに行ったのを宿場の人に見つかってしまったので、困った和尚はそれを地蔵様のせいにして地蔵様に鎧を打ち付け、鎖で縛って若い坊主を破門から救ったというお話である。今も鎧の跡が残っている。

道はまもなく宿場はずれになり、やがて間の宿である北本宿へと入って行く。北本市に入ると、右側に多聞寺と天神社がある。多聞寺は真言宗智山派、本尊は毘沙門天立像、境内の樹齢二百年のムクロジの木は埼玉県指定天然記念物である。天神社の祭神は菅原道真で、神仏師安田松慶作の「菅原道真座像」が安置されている。北本宿は、正式な宿場ではないが、桶川宿と鴻巣宿の間にあり、立場、茶屋などがあつた間の宿である。北本駅前を通り、少し行くと右側に浄土宗勝林寺、左側に浅間神社がある。道はまもなく人形の街鴻巣に到達する。

8・鴻巣より熊谷へ

旧道と県道東松山鴻巣線が交差する左側に浄土宗勝願寺がある。鎌倉時代に登戸(鴻巣市)に創建され、天正元年(一五七三)惣誓清蔵が現在地に移した。仁王門の仁王様は見応えがあり、

徳川家との関係が深く徳川家康もしばしば参詣している。勝願寺は僧侶養成のお寺で、関東十八檀林の一つである。またこの辺りが本陣跡と推定される。遺構は残っていない。

道を進んで行き、鴻巣駅を過ぎたあたりの右側に法要寺がある。境内には馬頭観世音、高麗狗、庚申塔などの文化財がある。この先しばらく行くと、宿場はずれ近くの右側に鴻神社がある。氷川社鴻ノ宮とも呼ばれており、鴻巣の地名の由来となった由緒ある地元の信仰が厚い神社である。

旧中山道は左にカーブしながら高崎線の踏切を越えて進んで行くと、左側に箕田小学校、続いて箕田公民館がありその先右手に氷川八幡神社が見えてくる。当社は羅生門の鬼退治で有名な渡辺綱を祀った神社といわれている。神社の入口には、宝暦九年(一七五九)に建てられた箕田碑が建っている。箕田は武蔵武士発祥の地で、平安時代に多くのすぐれた武人が住んでこの地方を開発経営した。箕田源氏の活躍ならびに箕田の地が武蔵武士の本源地であつたことが記されている。特に三代渡辺綱は頼光四天王の一人として剛勇の誉れが高かつた。

中宿橋を渡り道なりに進んで行くと吹上町に入り、左に竜昌寺、そして史跡一里塚跡の標識を見ることが出来る。旧中山道は、高崎線の踏切を越えると国道一七号線に合流する。国道をしばらく歩き、熊谷信用金庫の信号の所を左折して少し進むと、高崎線の右側に出る。そこに吹上間の宿の石柱と案内板が建っている。道は再び高崎線の踏切を越え、すぐ右折してそのまま進むと堤防沿いの道、久下に出るともう熊

谷である。

9・熊谷より深谷へ

久下の堤防沿いの道が旧中山道で、中山道屈指の景勝地といわれた所であるが、馬子唄には「久下の長土手深谷の並木、さぞや寒かる淋しかる」ともいわれた物騒な所でもあつた。道を進んで行くと堤防下に芝居、講談でお馴染みの白井権八ゆかりの権八地蔵がある。ここには地蔵堂と石灯笼そして小さな地蔵様が二十ヶほど安置されている。白井権八がここで上州商人を殺害、大金を奪いその時傍の地蔵にこの話は誰にも話をするなと頼んだことから、この地蔵を権八地蔵と呼ぶようになったといつ伝説である。

旧道に戻り道を進んで行くと、旅人が休息したといわれるみかりや茶屋跡がある。深斎英泉描く「熊谷八丁堤景」はこの辺りで、八丁一里塚跡もある。旧中山道は秩父鉄道、高崎線の踏切を渡ると国道一七号線に合流する。合流地点より一キロほど進むと右側に高城神社と熊谷寺がある。高城神社は、約二千年前に創建された神社で、天正十八年(一五九一)豊臣勢により焼かれたが、その後忍藩主によって再興された。

当社には、古絵図、蹴鞠、青銅製の常夜灯などの文化財が残っている。浄土宗蓮生山熊谷寺は、源氏の武将であつた熊谷次郎直実の開山である。直実は建久三年(一一九二)武士に嫌気がさし、出家して仏門に入り蓮生と名乗つた。寺の境内は広く約一万平方メートルあり鬱蒼と茂る木々に囲まれたお寺である。また直実ゆかりの品々も寺内に保存されている。

熊谷宿は昭和二十年八月十四日(終戦の前日)

の空襲により町の大半が焼け宿場の面影は失われ往時を偲ぶことはほとんど出来ない。先に進むと左側に竹井家本陣跡があり、石碑が建っている。当時の本陣は広大で、敷地千五百坪、部屋数四十七、江戸時代中山道を旅した狂歌師太田蜀山人は「熊谷の駅にいれば人家ごと賑わいて江戸の様似たり」と記している。本陣跡裏手に星溪園がある。元和元年(一六二二)荒川氾濫後、水が湧き出て泉になった。慶応年間(一八六五—一八六七)、本陣を勤めていた竹井氏がこを別邸とし池を中心に庭園を作った。現在熊谷市の所有となり熊谷市指定の名勝となっている。

しばらく進むと左側に秩父道標が建っており左に行く道が秩父往還で秩父を通り雁坂峠を越えて甲府へ至る道である。この道は秩父観音巡礼道として多くの人が利用した道である。この先熊谷警察署を越えるとまもなく左に入る道が旧道である。旧道に入るとすぐ新島一里塚があり、樹齢三百年の櫻が聳えている。旧道は玉井農業試験場の所で国道一七号線を斜めに横切つて、さらに熊谷バイパスを横断し奈良井用水を渡つて進んで行くと深谷に入る。

10. 深谷より本庄へ

奈良井用水を渡つてしばらく行くと、東方にさしかかり、右奥に室町時代上杉氏の居城であった東方城跡がある。さらに進むと、右側に御嶽神社、左側に国済寺がある。十三世紀末、関東管領上杉氏は新田氏を押しやるためこの地に館を築いた。館は一辺百七十メートルの正方形であった。康応二年(一三九〇)館内に国済寺を建てた。本堂裏には築山が残っている。天正十八

年(一五九〇)には徳川家康から寺領三十石の朱印状を寄進されている由緒あるお寺である。

国済寺の所で旧道は国道一七号線と交差するが、ここに「みかえりの松」と呼ばれている松があり、碑が建っている。江戸時代には半里に渡り松並木が立ち並んでいたというが今は見る影もない。国道と交差するとすぐ右側に常夜灯があるがこの辺りから深谷宿の中心地となる。深谷宿は旅籠も多く、湊英泉描く木曾街道六十九次の「深谷之駅」には飯盛女の姿が描かれている。参勤交代だけでなく、商人、旅行客も多く訪れ、小林一茶、太田蜀山人、葛飾北斎、渡辺華山などの文化人が立寄っている。

旧道を進むと左側に呑竜院、右側に萱場稲荷神社が見えてくる。しばらく進むと旧道は、国道一七号線を横断し右に滝宮神社があり、また少し進むと国道一七号線に合流する。国道は岡部町に入ると、右側に曹洞宗源勝院がある。源勝院は岡部の地を領地とした安部家の菩提寺として建てられた寺である。天正十八年(一五九〇)徳川家康の関東入国とともに、初代安部信勝に岡部領が与えられた。信勝は大阪城で死亡したが二代目以降もこの地を安堵された。

ここから五百メートルほど進むと、右側に高札場跡があり、左側には道標、地藏菩薩、馬頭観音などの石仏がある。さらに進んで行くと、源平一の谷合戦で、薩摩守忠度を討ち取った岡部六弥太忠澄の石碑が建っている。彼の墓はこの奥の普濟寺にある。

国道一七号線をさらに進むと旧中山道は右の道となる。先へ進んで行くと右側に、島護産泰神社がある。当社の創建年代は不明であるがかなり古いようである。祭神は竇竇杵尊、木花咲耶姫命である。当社を島護と称するのはこの地方が利根川のしばしばの氾濫により、深谷宿北部に位置する南西島、北西島、大塚島、内ヶ島、高島、矢島、血洗島、伊勢島、横瀬、中瀬の地名をもつ地域は常に被害を受けたため当社をこれらの守護神として信仰したことによると伝えられている。旧道は深谷バイパスを横切り滝岡橋に至る。

11. 本庄より新町へ

滝岡橋を渡ると本庄市に入るが、この辺りの旧中山道は河川工事によりかなり分断されているが、何とか道をたどることが出来る。藤田小学校の先左側に八幡大神社がある。ここから一キロほど行くと、直進が旧三国街道で左の道が旧中山道である。この追分のところに天王様がある。旧道はやがて、国道一七号線と交差し、不動坂を上つて商店街に入ると本庄宿となる。

本庄宿は中山道有数の宿場町として栄え、宿場の中心にあつた田村本陣の遺構はないが、本陣の門は高札場と一緒に、旧道右手にある本庄市立歴史民族資料館に移管されている。近くに大正院、仏母寺、多聞寺などのお寺がある。

一キロメートルぐらい進むと右側に金讚神社がある。金讚神社の祭神は天照大神、日本武尊、素戔鳴尊の三神である。創建は欽明天皇の二年(五四二)と伝えられている。武蔵七党の一つ児玉党の氏神として、また本庄城主歴代の信仰が厚かった。その後本庄宿の総鎮守となり、境内の楠、樅の古木は埼玉県、本庄市指定天然記念物となっている。

旧道を道なりに二キロメートルほど進むと神保原(じんぼはら)に入り、やがて国道一七号線を斜めに横断しさらに一キロメートルほど行くと、右側に雨乞いの神様の金久保八幡神社がある。さらに進むと左側に曹洞宗陽雲寺が見えてくる。曹洞宗のお寺で元久二年(一一〇五)創建と伝えられ、初めは満願寺と称していた。室町時代には崇栄寺と改称、戦国時代この地が武田氏に支配されて、武田信玄夫人秀姫がこの寺に居住するに至り、彼女の法号陽雲院をとって寺名を陽雲寺とした。当寺に残されている武田信玄自筆起請文、古河公方足利政氏の文書、武田信玄陽雲院夫妻画像などが埼玉県指定有形文化財になっている。

少し進むと国道一七号線と合流する。合流地点左側に臨濟宗円覚寺派大光寺がある。建保三年(一一二五)武蔵七党の一つ丹党の勅使河原権三郎が創建したもので、勧請開山は日本へ初めて禅宗を伝えた宋西禅師である。当寺には宋西禅師直筆の額が残っている。すぐ先が神流川(かんながわ)で橋を渡れば新町宿である。

12. 新町より倉賀野へ

神流川を渡ると堤防右手に神流川古戦場跡碑が建っている。天正十年(一五八二)豊臣秀吉による小田原北条攻めの神流川古戦場の跡碑である。秀吉方は滝川一益、北条方は北条氏直・氏邦で両軍合わせて三万の兵が激戦、付近の寺院、民家は大半が焼失したといわれている。

道はすぐ三叉路になっており、左が国道一七号線で、右が旧中山道で少し行くと右側に諏訪神社がある。諏訪神社に隣接して、真言宗専福寺、真言宗浄泉寺がある。道を進んで行くと

左側に小林本陣跡がある。今は敷地も建物も小さくなって本陣跡には見えないが、通りに本陣跡の標柱が建っている。かつては、建坪百三十五坪、玄関二十畳、広間十五畳の本陣であった。本陣の裏には、慶長十三年(一六〇八)に創建された真言宗宝勝寺があり、樺造りの鐘楼門が年代を感じさせる。境内には六地藏、百番供養塔などがある。

道は温井川弁天橋を渡ると三叉路になっており右の道が旧中山道である。旧道をしばらく進んで行くと右側に伊勢嶋神社があり、境内には常夜灯、庚申塔、金剛像、猿田彦大神、二十二夜などの石造物が散在している。旧中山道は鳥川堤防沿いに出る。この辺りの旧道は、河川工事により定かではないが、伊勢の森の祠が旧中山道の名残をとどめている。

新町から少し脇に逸れて、藤岡中区の光明寺にいく。光明寺は弘法大師関東八十八ヶ所第四番霊場であり、新上州三十三観音の十七番札所でもある。同じ数の霊場が四国や坂東に設けられ、巡礼は平安時代からのよつだ。十一面観音を祀り、延文四年(一三五九)法印浄義の開山である。大師画像は髪大師の秘仏を伝えている。高崎の白衣観音のある慈眼院も特別霊場である。

倉賀野から脇に逸れるが、岩鼻陣屋跡に行く。寛政五年(一七九三)徳川幕府によって代官所が設置された。妾と玉村に住んでいた、国定忠次が襲った代官所跡である。広場が陣屋跡であり、東側の小山に神社が祀ってある。慶應四年(一八六八)六月、新政府は岩鼻県を設置し県庁とした。明治四年(一八七二)岩鼻県廃止、県庁が高崎城址内に移り第一次群馬

県が誕生する。

旧道はこの先中島の集落を通り烏川の堤防に出る。江戸時代にはここから渡船を利用したが当初は不定期で通行人は大変難儀したという。常時渡船出来るようになったのは宝暦九年(一七五九)といわれている。現在は烏川新柳瀬橋を渡って倉賀野宿へと入って行く。

13. 倉賀野より高崎へ

烏川新柳瀬橋を渡り左に曲がり、国道一七号線を横断し高崎線の陸橋を越えてしばらく進むと、右側に閻魔堂があるが、ここが中山道と日光例幣使街道との追分である。追分には「是従右江戸道、左日光道」の道標と文化十一年(一一八四)建立の常夜灯が建っている。正保四年(一六四七)第一回の日光例幣使(幕府の命で京都から日光東照宮へ派遣される公家が勤める例幣使が中山道を下り倉賀野より日光道へ入った)派遣があつて以来慶応三年(一八六七)の最後まで二百二十一年間一回の中止もなく継続された。ここから倉賀野宿で、暫く進むと倉賀野駅近くに浄土宗九品寺(ほんじ)がある。京都知恩院系統のお寺で倉賀野五郎行信が延徳三年(一四八九)に創建した。境内には戦国時代活躍した倉賀野十六騎の五十嵐紀伊守、須賀佐渡守の墓がある。

さらに道を進み上町に入ると、群馬銀行倉賀野支店の向かい側が脇本陣跡須賀家で、古い建物が残っている。その隣須賀医院が問屋場跡で表通りに高札場が建っており、今も遺構が残されている。道を少し進んで行くと左側に倉賀野神社がある。前身は飯玉社で由緒があり、江戸時代は倉賀野宿及び近郷の総鎮守であった。明

治に入り近くの神社を合祀して倉賀野神社となった。神社の五百祀ほど先には、前方後円墳の浅間山古墳がある。道はこの先高崎市の中心街へと進んで行く。

14. 高崎より板鼻へ

旧中山道は上信電鉄の踏切を越え、和田町、新田町と進んで行くと、新田町交差点の左側に愛宕神社がある。和田氏の建立であるが、高崎藩主松平信吉が元和三年(一六一七)再建した。境内には弁天堂、八幡、稲荷、秋葉の末社があり、当社の井戸は水質がよく明治天皇行幸の折、御膳水として使用されたと伝えられる。

まもなく繁華街に入り高崎駅前通との交差点左側に諏訪神社がある。当社は小さな土蔵造りの神社で全国でも珍しい。当地は度重なる火災を受けた町で火災から社を守るために土蔵造りに工夫をしたものと思われる。道の左手には、高崎城跡、高崎神社がある。

高崎城は慶長三年(一五九八)井伊直政が徳川家康の命により、廃城になっていた和田城跡に新城を築き、高崎城と命名した。外堀、乾櫓、東門が往時を偲ばせる。城跡は市役所、学校、病院などになっている。高崎神社は旧熊野神社と称し、祭神は伊弉冉命、速玉男命、事解男命である。鎌倉時代中期、和田城主和田小太郎正信が相模国三浦より覬請し守護神とした。後、慶長三年(一五九八)井伊直政が高崎城築城の際今の地に奉還し高崎の総鎮守とした。明治四十年(一九〇七)、境内末社十二社、市内三十六社を合併し高崎神社と改称された。

高崎は幕府閣僚を勤める藩主が多かったため、

各大名も宿泊を遠慮したとみえ、本陣も脇本陣もなかったようである。旧中山道は諏訪神社の所を更に直進し本町三丁目信号を左折して左手に惠徳寺を見ながら坂を下って行く。やがて右側に曹洞宗長松寺がある。当寺には寛永十年(一六三三)徳川三代將軍家光の実弟大納言忠長が自刃した部屋が残っている。忠長は父秀忠の死後、家光との権力争いに破れ、高崎城に幽閉され二十七歳の若さで自刃するに至った。忠長の墓は高崎市内通町の大信寺にあり姉の千姫から贈られた硯箱などの遺品も残っている。岡田醤油屋を左に見ながら道なりに進むとやがて君ヶ代橋に至る。

15. 板鼻より安中へ

旧道は、君ヶ代橋で国道一八号線に合流し、橋を渡って少し進み右に入る道が旧中山道である。道を少し進むと右側に常安寺、左に若宮八幡宮がある。祭神は、大鷲鷲命、仁徳天皇で、平安末期永承六年(一〇五二)源頼義、義家父子の建立である。即ち前九年の役が勃発し、奥州の安部氏の反乱を鎮圧に向かう源頼義、義家父子はこの地に仮陣屋を置き軍勢を集めると共に戦勝を祈願して当社を建立した。凱戦の時、拜殿などを増築し、鎧、兜、弓矢を奉納し、以後源氏の信仰する神社となった。

この少し先の右側に、黒堀に囲まれた家が茶屋本陣飯野家であり、ここには宝歴四年(一七五四)日光例幣使菅原成郷や文久元年(一八六一)皇女和宮江戸への下向の時の記録が残っている。道を先に進むと国道一八号線に合流し、この少し先の道の両側に一里塚が残っている。左側は

大木が茂り、右側は祠が建っている。旧道はこの少し先から左側の碓氷川の堤防へ上がって行く。対岸の山が達磨山で眺めが素晴らしい。達磨市で有名な小林山達磨寺がある。旧道は鼻高橋の所で一度国道一八号線と合流するがすぐ左側に入って行く。その合流点の右側に大きな鳥居があり、その七百祀ほど奥に八幡宮がある。源義家が東北遠征の折当社に祈願、これ以後源氏の信仰する神社となった。

旧道をしばらく進むと、左側に板鼻郵便局がありここが脇本陣跡である。さらに進むと、右側に板鼻公民館がありここが本陣跡であるが遺構は残っていない。公民館前に板鼻本陣跡碑が建っている。かつては建坪百六十七坪、門構え、玄関付きであった。文久元年(一八六一)皇女和宮が徳川十四代將軍家茂に降嫁の時当本陣に一泊、書院と共に上草履が保存されている。

板鼻宿にはお寺も多く、時宗聞名寺、日連宗実相寺、真言宗大乘寺、天台宗称名寺、曹洞宗南窓寺などがある。旧道は宿場を出ると、国道一八号線に合流し鷹之巢橋に到達する。鷹之巢橋を渡ってすぐ右へ入る道が旧道で、まもなく江戸より二十九里と記された一里塚跡碑がある。更に進んで久芳橋を渡ると安中宿となる。

16. 安中より松井田へ

旧道は久芳橋で国道一八号線に合流するが、旧道は橋を渡るとすぐ左側の道となりまもなく安中宿となる。当地は、安中越前守忠政が永録二年(一五五九)に安中城を築き城下町として栄えたが、武田方であった忠政は長篠の戦いに敗れて討死した。江戸時代は、井伊、水野、堀田、

創作「奇妙な紀行文」

内藤、板倉と城主が変わり、明治となり廃城となった。現在本丸は文化センター、二の丸は安中小学校になっている。

宿場の中心にある安中郵便局に安中本陣跡の石柱が建っている。本陣は須藤家が勤め、建坪百九十二坪、門構え、玄関付であった。道を進むと右側の群馬銀行安中支店の所が高札場跡で、標識が建っている。右手高台には吉野神社がある。

安中小学校のすぐ傍には、新島讓記念会堂(安中教会)がある。新島讓は安中藩江戸屋敷で生まれ国禁を犯して渡米、キリスト教に共鳴、洗礼を受け、帰国後この安中で日本におけるキリスト教伝導を始めた。京都の同志社大学の創立者として有名である。新島讓旧宅は安中一丁目にあり、新島讓の碑がある。

旧道はやがて国道一八号線を斜めに横切り、原市杉並木にさしかかるが、江戸時代には並木は一キロメートルに渡り、数百本の杉があつたと伝えられるが、次第に枯渇してしまい現在は老木十数本が残っているだけである。原市杉並木を出るとまもなく右側に八本木延命地藏尊がある。本尊の地藏菩薩像は木像寄木造りで室町初期の作と伝えられる。日本三地藏の一つで霊験あらたかな秘仏で、中山道を通る参勤交代の大名もここで下乗下馬して参詣し旅の安全を祈ったという。道なりに進んで行くと右側に日枝神社があり、ここから一キロメートルほど行き国道一八号線を斜めに横切ると松井田宿となる。

17. 松井田より坂本へ

国道一八号線から左へ入って行く道が旧中山道であるが、この辺りから眺める妙義山の眺め

は絶景である。道はすぐ交差点となり左に行く道が妙義道である。旧道をさらに進むと右側に松本本陣跡があるが、僅かに土蔵が残っている。この先右奥に真言宗不動寺がある。寛元元年(一一四三)慈猛上人による開山で、本尊は千手観世音菩薩である。また群馬県的重要文化財に指定されている鎌倉時代の不動明王座像も安置されている。不動寺のすぐ先には松井田八幡宮がある。県重要文化財の本殿は、三間流造りで、軒下の暮股、海老紅梁などの彫刻は桃山様式で、いずれも江戸時代初期のものである。

さらに道を進むと右側に大泉山補陀寺が見える。この先二百メートルほど進むと松井田警察署があり、その手前を左に入って行く道が旧中山道で少し進むと新堀貯水池の碑がある。旧道は信越線を越えさらに国道一八号線を斜めに横切り、国道の右側を信越線と並んで進んで行く。

しばらく行くと五料の集落に入り、信越線の右側に五料茶屋本陣がある。本陣は西と東があるが、いずれも中島家で西が本家、東が分家である。観覧は有料になっているが庭園の眺めは素晴らしい。茶屋本陣は参勤交代の大名や公家などの休憩所として置かれたものである。お西とお東が一年交替でその任に当たったそうである。

五料茶屋本陣からしばらく進み信越線を越えて丸山坂にかかると左側に夜泣地藏がある。昔、中馬の荷物を安定させるため地藏の頭を積んで武州深谷まで運ばれここで捨てられた。すると「五料恋しや」と夜泣きするので近所の人を哀れんで五料まで持ち帰り胸の上に地藏の頭を乗せたという。これが夜泣地藏のいわれという。

道はまもなく下りとなり信越線を越えて、国道

一八号線に合流し少し進んでまた分かれ、信越線を越えて北側を進むと横川の集落に入る。横川駅を少し過ぎると右側に横川茶屋本陣跡がある。関所通過の折りしばしの休憩を取った所である。この先右側に碓氷関所跡がある。碓氷関所は江戸時代以前は関長原にあつたが、元和二年(一六一六)徳川幕府の命により現在地に移転され、安中藩の管理で十数人が警護に当り、大名の反乱防止と「入鉄砲に出女」を取り締まった。

18. 坂本より軽井沢へ

旧道は碓氷関所跡を出て信越線を越えて右折し、国道一八号線に合流しそのまま進むと左側に中山道坂本宿の標識が建っている。ここが下木戸口のあつた所である。坂本宿は幕府の命令により地元や高崎、安中藩の住民を移住させて宿場作りが行われた。本陣二、脇本陣二、問屋場一、旅籠四十、人馬五十人五十匹の規模であつた。我国最初の都市計画だつたといわれている。

遺構は見当たらないが、昔の宿場の面影をとどめる古い家が残っている。宿場を進んで行く上木戸口であつた所にも中山道坂本宿の標識が建っている。この先右側に芭蕉句碑と八幡宮がある。旅の安全を祈願した神社といわれている。国道を右、左とカーブしながら上って行く。と、中山道一番の難所といわれた碓氷峠上り口に至る。右側に旧中山道入口の標識と案内板が建っている。

ここから道は、いよいよ碓氷峠にさしかかる。道幅は狭く完全な山道で勾配も急である。旧道入口から五百メートルほど上った所に、堂峰番所跡があり碓氷関所を通らずに山中を抜けてきた旅人

を取り締まった番所である。番所は両方の谷が迫っている場所をさらに掘り切って道幅だけとした場所に設置されている。番所跡から一キロほど上って行くと坂本宿が一望できる「覗き」に出る。碓氷峠で唯一、坂本宿が一望できる場所である。急坂で一休みするには峠道では一番であろう。ここから眺める坂本宿はすばらしい。さらに上ると弘法の井戸があり湧き水が出ている。ここから更に上って行くと四軒茶屋跡があり、往時の石垣が残っている。力餅、わらび餅などの名物を売っていたという。ここから道は平坦になり五百ほど進むと堀切跡に着く。ここは松井田城主大道寺氏が北国勢と戦った古戦場跡である。堀切古戦場跡を過ぎると道は一段と急坂となり「座頭ころがし」と呼ばれている所に至る。この後山中茶屋跡、笹沢施行所跡、関橋守の思婦石碑と上って行くとまもなく標高千八百十の碓氷峠の頂上に着く。

19. 軽井沢より沓掛へ

碓氷峠の頂上が県境である。頂上には上野国(群馬県)と信濃国(長野県)にまたがる熊野神社(群馬県)と信濃国(長野県)にまたがる熊野神社が鎮座している。当社は三つの神殿からなり中央の本宮は県境、東の新宮は群馬県、西の那智宮は長野県で、祭りは両県の神宮によって行われる。祭神は本宮が伊弉冉命、新宮は速玉男命、那智宮は事解男命である。石段の左右にある狛犬は室町時代中期の作で長野県内では一番古いものだそうである。

峠の左手には見晴台があり、妙義山、浅間山がすぐ近くに見え、遠くにはアルプスの山々が見え眺めは絶景である。旧道は見晴台の所から

曲がりくねった山道を下って行くと二手橋に到達する。

二手橋を渡ればもう軽井沢、橋を渡った左手に芭蕉句碑があり「馬をさえなむる雪のあしたかな」と刻まれている。この向かい側にシヨール記念礼拝堂がある。カナダ国籍スコットランド人宣教師アレキサンダー・クロフト・シヨール氏は、明治中期滅亡の危機にあつた軽井沢を避暑地として蘇らせた。今日の避暑地、観光地としての軽井沢を築いた人で軽井沢の人々の尊敬の念は深い。衰退の原因は、天明の浅間山大爆発と大飢饉によるものである。その軽井沢の恩人アレキサンダー・クロフト・シヨール氏の記念礼拝堂である。この教会は軽井沢で結婚式をというカップルに人気がある。

シヨール記念礼拝堂から少し歩くと、今は避暑地の中心街旧軽井沢銀座と呼ばれ都会から多くの人々が訪れて賑わいを見せている通りが旧中山道である。江戸時代にはここが宿場の中心街で本陣、脇本陣、問屋場、旅籠などがあり賑わっていたが、当時の面影は何も残っていない。脇本陣佐忠は今軽井沢町観光会館となっている。

旧道は旧軽井沢銀座通りを過ぎると、やがて林の中の静かな道となり軽井沢高校を過ぎた所で、国道一八号線に合流する。この先右側に軽井沢町歴史民族資料館があり、東山道、中山道、井沢町歴史民族資料館があり、東山道、中山道、軽井沢・沓掛・追分三宿の関係資料などが展示されている。道をさらに進み軽井沢中学校の所を左折して信越線の踏切を越えて行く道が旧中山道で、川に沿って進んで行き信越線を越える

20. 沓掛より追分へ

旧道と国道一八号線との合流点から沓掛宿となる。合流点の右側に長倉神社がある。創建は定かではないが、延喜式佐久三座の一つとして有名である。ここからの浅間山の眺めは絶景である。境内の隣接地は長倉公園になっており憩いの場所となっている。長倉公園の中に映画、芝居、講談でお馴染みの沓掛時次郎の墓がある。かなり立派な墓碑が建っている。この地の名物、時次郎まんじゅうはつとに有名である。

この先少し進んで行くと左側に信越線中軽井沢駅がある。駅の左側に宮之前一里塚跡が建っている。元の場所は五百ほど手前の湯川を渡った所にあつた。元の位置辺りはペンションが建てられ、一里塚跡碑が邪魔になり移転させられたようである。

元の道に戻ると八十二銀行があるが、ここが脇本陣跡で駐車場の片隅に脇本陣跡碑が建っている。八十二銀行の向かい側が土屋本陣跡で、遺構はないが今も「土屋本陣」の表札がかかっている。建坪二百九坪、門構え、玄関付であったが現在は普通の住宅になっている。沓掛宿は本陣一、脇本陣三、問屋場一、旅籠十七軒の規模であつた。戦後まもなく大火に見舞われ宿場の大半を焼失したのは残念である。反面、地名を沓掛から中軽井沢と変更してから避暑地として夏になると都会から大勢の人が訪れ、賑わいをみせるようになったのは皮肉なことである。

21. 追分より小田井へ

沓掛宿を出ると国道一八号線は古宿を通り、やがて信越線信濃追分駅を左手にみて借宿へと

入って行く。軽井沢西部小学校を過ぎた所の両

側に、追分一里塚跡があり、江戸へ三十九里、

京都へ九十一里十四丁の標識が建っている。一

里塚跡の少し先を右斜めに入る道が、旧中山道

でここを入ると右側に江戸時代建物風の追分宿

郷土館がある。建物は宿場の雰囲気を出すため

内外観とも木造風を基調とし、外観は江戸時代

の旅籠に似せて木造の出桁造りをめぐらしてい

る。室内は当地で発祥した信濃追分馬子唄のバツ

クミュージックを聞きながら宿場時代の面影に

ひたるように設計されている。ホールには溪斎

英泉の代表作錦絵木曾街道六十九次から「追分」

が陶画に表示されている。追分宿資料館の隣に

は浅間神社があるが本殿は室町時代に建てられ

たもので貴重な建築物である。

山道を先に進むと左側に「美しい村」「風た

ちぬ」「菜穂子」などで知られる堀辰雄が住ん

でいた家があるが、現在堀辰雄文学記念館とし

て一般公開されている。書斎も残っておりまた

その生涯の愛蔵品が展示されている。道の右側

にある油屋旅館が脇本陣跡であり、その先が土

屋本陣跡でここには復元された高札場が建っ

ている。寛永十年(一六三三)の古文書によると、

柱は四寸角、高さ六尺の大きさであったという。

旧道はここからすぐ国道一八号線に合流し、

この地点が「追分宿分去れ」で中山道と北国街

道の分岐点である。「さらしなは右みよしのは

左にて月と花と追分の宿」とつたわれているよ

うに、ここを右すれば北国街道月の名所の更科

や越後路に、左すれば吉野や関西方面に別れた

所である。安置された石仏、石碑、石灯籠など

に昔が偲ばれる。旧道はすぐ左へと入り林の中

を進んで行く。

22. 小田井より岩村田へ

旧中山道は大久保の坂を越えて少し行くと右

側に一対の一里塚があり見事に保存されている。

西塚、東塚とも径十三メートル、高さ五メートル、周囲四十

を測ることが出来、両塚とも枝垂桜の老木が

茂っており、長野県史跡に指定されている。道

を先に進むと信越線御代田駅に出るが駅の左側

を通り商店街を通り抜けて行くと、やがて中山

道小田井宿入口の標識が右側に建っている。

暫く行くと中山道宿の案内板が建っているが、

この場所が高札場跡である。小田井宿が宿場と

しての役割を終えたのは、明治三年(一八七〇)

であるが、宿場の遺構は現在も比較的残ってい

る。この先左側に安川本陣跡があり江戸時代の

原形をほぼとどめている。本陣は安川家が勤め

建坪百九十五坪、門構え、玄関付であった。当

宿は皇女和宮をはじめとして宮家や公家の姫君

の休泊に利用されることが多かったので「姫の

宿」とも呼ばれた。

その先左側に小田井郵便局があるが、ここが

脇本陣跡で標識が建っている。小田井郵便局の

少し先左側に名主の小林家が営んだ旧旅籠屋の

大黒屋がある。十七世紀末の建物で二階は出格

子、細格子になっている。また当家には貴重な

古文書が保存されている。道は緩やかな坂道を

進んで行くとやがて岩村田宿へと入って行く。

23. 岩村田より塩名田へ

小田井宿を出て、皎月原かづきがはらに入ると左側に

鵜縄沢端うなざわはた一里塚が原形に近い状態を保っている。

宿場に入ると左側に住吉神社があり境内右側に

「従是善光寺道」の石碑が建っている。道を少

し進むと左側に岩村田本町郵便局があるがこの

裏に曹洞宗大田山竜雲寺がある。鎌倉時代の初

期地頭大井氏(甲斐源氏)の菩提寺として創建さ

れたが、一時荒れ果てたのをその後武田信玄が

復興した。山門には武田菱の紋が入っており、

境内には信玄の大五輪塔が建っている。また寺

内には佐久市指定文化財の武田文書が保管され

ている。

岩村田は内藤美濃守の城下町で本陣、脇本陣

もなく、また旅籠も少なく宿泊客はほとんどな

かった。旧道は一旦国道一四一号線に合流し、

すぐ右折して小海線の踏切を越えて行く道であ

る。踏切の手前右側に浄土宗西念寺がある。永

禄三年(一五六〇)の創建で、本尊は藤原時代末

期作の木造阿弥陀如来座像である。信濃国五ヶ

寺の宗頭で格式の高いお寺である。境内には岩

村田城主内藤美濃守正国、小諸藩主仙石権兵衛

秀久の墓がある。

旧道は浅間総合病院の前を通り、しばらく行く

と左側に名所「相生の松」があり石碑が建っ

ている。男松、女松が同根であったため相生の松

と呼ばれ、江戸時代、ここを通る緒大名夫人の

ために茶席を設けたという。道はこの先砂田の

集落を通り右手に見える美しい浅間山を眺めな

がら進んで行くとやがて林間の道となり、右側

に駒形神社が見えてくる。創建は明らかではな

いが、この地方は信濃牧の地であり、祭神は男

女二神像を安置しているので牧に関連した神社

と推定される。本殿は一間社流造りで国重要文

化財に指定されている。境内には陰陽石、駒形

石がある。道はこの先駒形坂を下って行くと塩名田宿となる。

24・塩名田より八幡へ

駒形坂を下って行くと県道と合流し塩名田宿に入る。入口には道祖神が建っており傍には塩名田宿の標識も建っている。塩名田宿は岩村田宿、八幡宿との距離はそれぞれ、一里十丁、二十七丁と短い。洪水が頻発する千曲川があったので交通の確保という重要な役目を担っていた。

宿場に入るとすぐ小諸道と交差するが、左側に大井屋商店があり、ここが本陣善兵衛家である。建坪百七十坪、門構え、玄関付の立派な本陣であったが現在遺構は残っていない。向かい側が本陣新左衛門家で、建坪百二十九坪、門構え、玄関付で建物の一部が昔のままの形で残っている。現在は丸山氏の住宅となっている。

道を進んで行くとやがて枳形となり旧道は県道と分かれて右下の細い道となる。河原宿といわれた所で旧道の面影が残っている。途中湧き水が出ている所があるがここが御休み所であった。「御や須三所、嘉登や」の看板が残っている。河原宿が終わると千曲川岸に着く。塩名田宿と御馬寄の間を流れる千曲川は大変美しい川であるが、反面荒れ川で度々洪水の被害を受けた。渡川を確保するのは大変だったようである。平橋になったり、船渡になったりして試行錯誤している。明治初期には船橋方式(船を九艘つないでその上に板を乗せて橋とする)とした。この時船を繋いだ船繋石が残っている。木橋が懸けられたのは明治二十五年(一八九二)のことである。余談であるが塩名田には無形文化財「塩名

田甚句」と「塩名田節」が有名である。旧道はこの後左側の上って行き県道に合流し千曲川に架かる中津橋を渡る。

25・八幡より望月へ

千曲川を越えると御馬寄となり右側の高台に大日如来像が建っている。浅間山を背にしての柔和な顔をした地藏様で人々の心を和やかにしてくれる。傍には芭蕉句碑も建っている。ここ御馬寄では毎月一日、六日に市が立ち、穀物相場はここで決定されていた。大日如来像のすぐ先右側に一里塚跡の標柱が建っているが遺構は残っていない。

道を進んで行くと左側に浅科村役場があり、この先右側奥に曹洞宗常泉寺がある。明応二年(一四九三)創立、常月庵と称した。元和二年(一六二六)当地に移転、境内に湧泉があったことから常泉寺と改称された。参道の敷石は江戸時代の物である。

元の道に戻り中沢橋を渡り少し行くと右側に八幡神社がある。創建は定かではないが貞観年間(八五九〜八七七)と推定されている。祭神は応神天皇、神功皇后である。境内にある高来社は八幡神社の旧本殿で国重要文化財に指定されている。また天保十四年(一八四三)に建立された随神門の彫刻は江戸時代を代表するもので、唐獅子をはじめとした彫刻は見事である。

この先右側に本陣跡がある。本陣は小松氏が勤め、現在も住んでいる。建坪百二十坪、門構え、玄関付で、今も本陣門が残っている。八幡宿は、本陣一、脇本陣四、問屋場二、旅籠三軒の規模であった。宿場の面影は残っているが本

陣門以外の遺構はほとんど残っていない。宿場を出て道を進んで行くとやがて国道一四二号線に合流し、「この先国道から分かれ右折して瓜生坂を上って行く。」

26・望月より芦田へ

瓜生坂を上って行くと頂上手前に瓜生坂一里塚跡碑が建っているが遺構はほとんど見当たらない。頂上には享保二年(一七一七)作の観世音像と元文元年(一七三六)作の念仏百万遍塔が建っておりここから鹿曲川と望月宿が一望できる。瓜生坂を下って行くと国道一四二号線に合流し、すぐ右へ入ると長坂となる。坂道には馬頭観音道祖神などの石仏群が十数基並んでいる。

旧道はこの先鹿曲川を渡り島田屋旅館の所を右折して進んで行く。道の左手長坂橋の手前の洞窟の中には弁財天が祀られており、洞窟の入口には芭蕉句碑が建っている。元の道に戻り少し進み千曲バス望月営業所前を通り過ぎると左側に望月町歴史民族資料館があり、ここが大森本陣跡である。本陣は建坪百八十坪、門構え、玄関付で高札場もあった。館内には、縄文時代の出土品や望月の駒の歴史、望月宿の往時を物語る貴重な資料などが展示されている。

資料館のすぐ先右側には旅籠と問屋をかねた出桁造りの真山家が江戸時代そのままに残っており、国の重要文化財に指定されている。道の右側鹿曲川を越えた所に城光院がある。平安時代よりこの地を治めていた望月氏の菩提寺で文明七年(一四七五)望月城主望月遠江守光恒が開基した由緒あるお寺である。

道を少し進んで行くと左側に大伴神社がある。

延喜式内社で佐久三社の一つで、武日連と月読命を祀つてある望月牧の鎮守社である。毎年八月十五日には勇壮な火祭りとして名高い神祭りの舞台となる。道は少し狭くなるがまもなく国道一四二号線と交差し、坂を上つて行くとやがて右に下る道があるが、これが旧中山道で茂田井の入口である。この道の入口に「右中山道茂田井間之宿方面」の標識と、「中山道茂田井入口」案内板が建っている。茂田井は正式の宿ではないが、東の望月宿と西の芦田宿との間にある村で間の宿と呼ばれていた。

茂田井は昔ながらの土蔵、白壁、土塀が続き、なかでも大沢酒造は元禄二年(一六八九)の創業で、大沢家は名主を勤めた家柄で現在も酒造業を営んでおり、民族資料館も併設している。酒と旅を好んだ歌人若山牧水は度々この地を訪れ「人の世に楽しみ多ししかれども酒なしにして何のたのしみ」と詠んでいる。この若山牧水の歌碑が大沢酒造の少し先に建っている。旧道は、茂田井を出て国道一四二号線に合流し芦田川を渡る。

27. 芦田より長久保へ

芦田川を渡ると芦田宿となる。宿場に入ると右側に土屋本陣跡がある。土屋家は慶長初期に中山道芦田宿開設以来、明治に至るまで本陣を勤めた。建坪百六十三坪、門構え、玄関付で、寛政十二年(一八〇〇)に現存の客殿が再建されている。客殿は間口五間(約九丈)奥行き十一間(約二十丈)の切妻造り、妻入り、棧瓦葺で屋根の前後に鯨をかかっている。玄関は唐破風とともに懸魚、墓股、頭貫、肘木などで構成され、江戸時代後期の様式をよく現している。

本陣跡の直ぐ先左側に旅籠屋土屋金丸旅館がある。江戸時代の建物で腕木の彫刻、出桁造りが残っている。看板「津ちや」は江戸時代そのままであり、宿場の面影を残している。今も芦田で唯一の旅館を経営している。

宿場を出て道を先に進むと国道一四二号線に沿って旧道があり、笠松峠松並木となる。慶長七年(一六〇二)赤松約七百五十本が芦田宿はずれから笠取峠の頂上まで約二キロにわたって植えられた。その後老化、台風被害などにより現在は百本余りに減っている。浮世絵師安藤広重描く、笠松峠松並木はつとに有名である。旧道は松並木を過ぎて少し行くと国道一四二号線に合流し、その先の雑木林の中に笠松峠一里塚石碑と案内板が建っている。南塚は残っていないが、北塚は残っており赤松が植えられている。一休みするには格好の場所である。

やがて峠にさしかかるが、昔は今の峰の茶屋の所が茶屋小松屋であつたらしい。かつてここで「笠取名物三国一のうちからもち」を売っていた。峠には笠松峠石碑と常夜灯が建っている。道はこの先下りとなり旧道は随所に残っており部分的に旧道を歩くことが出来る。

28. 長久保より和田へ

峠を下つて行くと右手に長久保の氏神様で地の信仰を集めている松尾神社が見え長久保宿となる。さらに道を下つて行くと右側に、長久保本陣がある。石合家が勤めていた当本陣は、建坪二百二十六坪、門構え、玄関付で、今も上段之間、二之間、三之間が残っており、中山道本陣中最古の建築物として貴重な存在である。

当家には江戸時代の古文書などが数多く残されており、長門町文化財に指定されている。

続いて竹内家住宅がある。竹内家は屋号を釜鳴屋といつて、寛永年間(一六二四～一六二八)より昭和の初めまで酒造業を営んでいた家で、建物は江戸時代前期のものといわれているが不詳である。千五百坪の敷地に、百坪の建物が建っている。土間は幅三間半(六・三六丈)で奥まで通し、その中に細長く板敷をとっている。土間の上は巨大な小屋組が現れている。屋根には「本卯建」が上げられており、長門町指定文化財となっている。

ここから道は左に曲がり少し行くと国道一四二号線に合流し、しばらく先へ進むと右側に一里塚跡案内板が建っているが遺構はない。道路工事により、塚は国道に呑み込まれてしまった。

29. 和田より下諏訪へ

落合橋を渡ると右側に「中山道これより和田の里」の石碑と「中山道案内板」が建っている。国道一四二号線を先に進み右へ入る道が旧道で、すぐ左側に「是より和田宿」の石碑が建っている。旧道を進んで行くと右側に八幡神社がある。祭神は応神天皇で、本殿の屋根は茅葺きで風格がある。境内には和田城主大井信定の碑が建っている。

この先右側に曹洞宗信定寺があるが、当寺は武田、上杉の合戦で討死にした和田城主大井信定の菩提を弔うために天文二十三年(一五五四)創建された。本尊釈迦如来は鎌倉時代の作で、三宝荒神像、山水六曲屏風、小梵鐘などと共に文化財指定となっている。

ここから少し進むと宿場の中心地となり、左側に和田宿本陣跡がある。和田本陣は長井氏が

名主、問屋場を兼ね勤めていた。建坪二百二十坪、門構え、玄関付であった。現在の本陣は部屋の一部が残っており、門は復元して一般公開されている。本陣の向かい側が脇本陣羽田家で、建坪百四十四坪、門構え、玄関付であった。

本陣跡から旧道は左にカーブしながら進みまもなく国道一四二号線に合流し、合流点の左側に中山道一里塚の石碑が建ち、江戸より五十里と記されている。しばらく国道を進み唐沢で左の道に入るのが旧中山道で、山の中の道をしばらく進んで行くとやがて唐沢一里塚跡に到達する。旧道はこの先で国道一四二号線に合流し、やがて男女倉口に至り、ここから旧道は再び別れ和田川に沿って木々に覆われた山道を上って行く。

男女倉口から二キロほど上って行くと接待(和田峠施行所)に到着する。接待(和田峠施行所)は江戸呉服町の豪商かせや与兵衛が旅人の疲れを癒すため金千両を幕府に寄付しその利子百両を二分して和田峠と碓氷峠に接待(施行所)を設置した。旅人には粥一杯、馬には煮麦を与えたと

五百三十一町の和田峠の頂上に着き、ここには峠の案内板が建っている。峠からは急な坂道を下って行くが旧道は寸断されており、昔の旧道をたどることは無理で国道一四二号線を歩くことになる。左側の「中山道一里塚江戸より五十三里」の標識を過ぎて、道はカーブを繰り返しながら下って行く。やがて樋橋に至るが、この手前右側に浪人塚(水戸浪士の墓)がひっそりとたたずんでいる。元治元年(一八六四)十一月二十日水戸浪士一行千余人勤皇の志を遂げようと和田峠を越えてきた時、松本、高島両藩が防いだ激戦地跡で、塚には討ち死にした浪士を葬り桜を植え墓碑が建てられている。坂を下って行くと下諏訪となる。

30 下諏訪より塩尻へ

中山道は砥川に沿って下って行き、夕立坂にかかると左側に正安二年(一三〇〇)開山の臨濟宗妙心寺派慈雲寺がある。優れた僧が続き臨濟宗の信州筆頭として信州文化の中心となった。天桂の松、大梵鐘、杉並木、竜の口などが有名で、裏山には高島城を築いた豊臣秀吉の家臣、日根野織部正高吉の墓もある。ここからは諏訪湖が一望でき素晴らしい眺めである。

道の右下が諏訪大社下社春宮である。当社は諏訪大社下社秋宮と同じ祭神(後述)で、農耕開拓神である。拝殿は大隅流の村田長左衛門矩重が立川流の秋宮と競って作ったもので、清楚美があり国の重要文化財に指定されている。旧道は諏訪大社春宮を右に見ながら進んで行くとすぐ下諏訪の中心地となる。

宿場の入口の左側に来迎寺があり、寺の入口

には和泉式部の守り本尊で鎌倉幕府執権北条時頼が運んできたと伝えられる地藏尊と彼女の幼少の頃にまつわる「かね」の伝説案内板が建っている。ここから百ほど行くと左側に本陣跡がある。本陣は岩波家が問屋場も兼ねて勤めた。敷地八百坪、建坪三百坪で、皇女和宮が江戸下向の時宿泊した上段之間は現在も残っており一般公開されている。本陣門は文久年間(一八六一〜一八六三)に建てられたものである。本陣遺構は本陣岩波家として公開されている。本陣の向かい側が脇本陣跡で、脇本陣は丸屋家が勤めており、今も旅館「まるや」として続いている。「まるや」のすぐ傍には下諏訪町歴史民族資料館があり、宿場の資料、街道資料、古文書などが展示されている。本陣跡のすぐ先には中山道下諏訪問屋場跡の石碑が影の如く建っている。ここが甲州道中終点地で、かつ中山道合流点となっている。

この先百ほど行くと諏訪大社下社秋宮がある。諏訪大社下社秋宮は全国一万余の分社を持つ我国最古の神社である。祭神は建御名方神とその妃八坂刀売命で、古くは狩猟農耕の神、戦神として、現在は産業、交通安全、縁結びの神として信仰されている。幣拝殿、左右片拝殿、神楽殿は江戸中期、諏訪の名匠立川和四郎富棟の代表作で国の重要文化財に指定されている。

当社の最大の祭は七年に一度行われる御柱祭で縦の太木を山奥より引き出し神社の四隅に建てるもので天下の大祭として全国に知られている。神社から直進する道が旧甲州道中で右折の道が旧中山道である。すぐ国道二〇号線に合流し、少し行くと左側に相楽塚がある。道を進み十四

瀬川を越えて左に入る道が旧中山道で少し先に進むと長池東堀の交差点の所に道標があり、「右中山道、左いなみち」と刻んである。旧道を進んで行き国道二〇号線を斜めに横断し、しばらく進むと御小休本陣に到達し、本陣今井家の建物が昔の姿で残っている。旧道はこの辺りから急に狭くなりやがて塩尻峠へと進んで行く。

31. 塩尻より洗馬へ

国道二〇号線を左手下に見ながら旧道を上って行くとき眼下に岡谷市が見渡せる。峠入口右側に清水観音が建っており、ここから清水が湧き出ており、清水を飲みながら岡谷市を眼下に眺め一休みするとよい。これから先はひたすら山道を上って峠へと向かって行く。

塩尻峠は標高千五百五十九メートルで太平洋側と日本海側との分水嶺で、眺望は絶景で諏訪盆地、八ヶ岳、霧ヶ峰、北アルプスなどが楽しめる。しかし戦国期にはしばしば戦いの場となった。特に激しかったのは天文十七年(一五四八)武田晴信と小笠原長時の塩尻峠の戦いであるといわれている。

峠を下って行くと、夜通道の標識と石仏がある。何時の頃か美しい娘が夜ここを通って岡谷の男に逢に行ったと伝えられることからこの道を夜通道と呼ぶようになったといわれている。影ぼうしの峠を更に下って行くと、塩尻市の史跡に指定されている東山一里塚跡があり、やがて道は柿沢に入り、国道二〇号線と二度交差し旧道は直進する。

ここから少し進むと右側に豪壮な山門をもつ真言宗永福寺と葦葺きの見事な観音堂がある。永福寺山門は初代立木音四郎種清の作、観音堂

は二代目立川和四郎富昌の作である。

旧道はまもなく国道一五三号線と合流し、ここからは塩尻の宿場となる。道を進むと右側に中町郵便局があり、ここが高札場跡で石柱が建っている。この少し先の左側が本陣跡で、塩尻宿本陣跡の石柱と木板が建っている。本陣は建坪三百六十七坪、門構え、玄関付で中山道の本陣では最大規模であったが残念ながら明治十五年(一八八二)の大火で焼失してしまった。

さらに道を進んで行くと左側に幕府領塩尻陣屋跡があり古い建物が残っている。道の右側には江戸時代の旅籠屋で屋号を「いてうや」という小野家住宅がある。江戸時代末期の建築で二階の居間の壁には、桜や鶴などが色鮮やかに描かれており、国重要文化財指定になっている。

この先の歩道橋の所を右に入って行く狭い道が旧中山道で、すぐ右側に阿礼神社があり、この辺りが上木戸口である。

この先右側に国の重要文化財指定になっている堀内家住宅が建っている。堀内家は江戸時代旧堀ノ内村の名主を勤めた豪農である。建物は十八世紀後半とみられ、数次にわたる改造の結果、当初の姿が不明な点も多いが、表、中、裏と三つに区切られていたようである。屋根の上には飾られている雀がざりは見事である。

この先で旧道は国道一五三号線に合流し塩尻橋を渡り、左に入る道が旧中山道で少し行くと右側に八幡社がある。道なりに進み中央本線を越え一キロほど行くと、道の両側に一对の平出一里塚がある。東塚は周囲五十メートル、高さ一・七メートル、西塚は周囲四十五メートル、高さ二メートルで、塚には松が植えられており、「山本勸助子育の松」とい

われており、塩尻市史跡指定になっている。

平出一里塚の左手一キロほどの所には平出遺跡考古博物館があり、ここには日本最北端の銅鐸が保存されている。旧中山道は平出遺跡考古博物館を左に見ながら進み中央本線を越えて国道一九号線に合流し国道を一キロほど進み右へ入る道が旧道でまもなく洗馬となる。

32. 洗馬より本山へ

旧道を進んで行くと右側に幽斎脇懸松があり、まもなく洗馬宿追分に到達する。ここは中山道と北国往還との追分で洗馬は「信濃の分去れ」といわれている。道標には「右中山道左北国往還善光寺道」と記されている。北国往還を少し入ると安政四年(一八五七)に建立された高さ四尺の見事な常夜灯が建っている。

中山道に戻るとすぐ宿場となり、左側に明治天皇御休所跡の碑が建っているが、ここが脇本陣跡である。脇本陣は建坪百三十九坪、門構え、玄関付であった。本陣は昭和の大火で焼失、その場所は洗馬駅前で中山道、洗馬宿の標柱、標石が建っている。本陣は建坪百五十七坪、門構え、裏影の玄関付であった。

道の左側には真宗大谷派聖徳山万福寺がある。当寺は本陣、脇本陣に事故があった時の緊急避難場所に指定されており、由緒あるお寺である。洗馬宿は今でこそ閑散としているが当時は善光寺詣、御岳講の旅人で大いに賑わったそうである。この先道は上り坂となり中央本線を越え、と、左手奥に洗馬宿の鎮守となっている滝の社がある。さらに進んで行くと、牧野に至り左手に牧野一里塚跡がある。

33・本山より贅川へ

旧中山道は牧野を通り、やがて国道一九号線に合流し、しばらく進んで行くと三叉路となり右の道が旧道である。本山宿は国道一九号線のバイパスを作ったので町並みは比較的昔の宿場の面影を残している。屋根には防火壁を兼ねた扇形の「卯建」をあげている家もある。また各戸は昔の屋号の表札を掛けている。

ここは昔からそばの耕作が盛んで「そばきり」発祥の地としてつとに有名であった。太田蜀山人の狂歌に「本山の蕎麦名物と誰も知る荷物をここにおろし大根」と歌われている。

中町に入ると左側に明治天皇御駐蹕の碑が建っているが、ここが本陣跡で、本陣は小林家が勤めていた。現在の建物は新しいものであるが屋根には昔の雀おどりが乗せてある。本陣跡の少し先左側には本山公民館があるが、ここが脇本陣跡で花村家が勤めていた。

上町には本山神社があり、例祭には御輿と屋台車が宿場に繰り出される。神社の少し先左側の民家脇に一里塚跡、番所跡の標識が建っている。本山は松本領の木曾路入口の重要な場所であったので本山口留番所を設けて、米が他領に流出しないように監視したり、関所同様に女性の通行手形改めなどを行っていた。宿場を出ると旧道は国道一九号線に合流しまもなく日出塩の集落を通り、やがて桜沢の御境橋に到達する。現在はコンクリートの橋になっているが江戸時代には木橋であった。ここが松本領と尾張領との境で、御境橋を渡ると有名な木曾路となる。

34・贅川より奈良井へ

御境橋を渡り桜沢に入ると右側に「是より南木曾路」の道標が建っている。碑は、江戸からの旅人には木曾路の始まりを、京からの旅人には木曾路の終りを示し、裏面には「歌に絵にその名を知られたる木曾路はこの桜沢の地より神坂に至る南二十余里なり」と書いてある。桜沢は本山宿と贅川宿との中間にあり、奈良井川に沿ったなかなかの景勝地である。この桜沢に茶屋本陣百瀬家がある。明治天皇の御小休所にもなり、門前に明治天皇桜沢御小休所碑が建っている。

旧中山道は、国道一九号線に合流したり分かれたりして、片平、若神子、下遠、中畑の集落を通り贅川に至る。贅川駅前を過ぎ左に入り中央本線を越えて行く道が旧道で、道の左下に贅川番所跡がある。建武二年(一三三四)木曾氏の作った関所で、明治二年(一八六九)までの約六百六十年間木曾の北の入口として重要な役割を果たした。江戸時代の寛保元年(一七四一)に徳川幕府公式の関所となった。現在は贅川関所木曾考古館として一般公開されており、通行手形、街道資料、古文書などが展示されている。

贅川宿の規模は小さく本陣は千村家、脇本陣は贅川家が勤めていたがいずれも遺構は残っていない。旧道から右に入り中央本線、国道一九号線を越えた所に立派な山門を持つ観音寺がある。慶長二年(一五九七)僧珍水が建立、木曾郡唯一の高野山真言宗で、十一面観音を本尊とし、家内安全、無病息災、交通安全祈願の寺である。鎌倉時代の一位一刀彫の薬師如来像が安置されている。隣接して諏訪大社の系統で建御名方神と保食大神を祭る麻衣迺神社が静閑に鎮座して

いる。昔の影絵が追つてくるようだ。

宿場を出て奈良井川を左に見ながら桃園集落を過ぎて奈良井川の手前で国道一九号線に合流する。長瀬で左に入る道が旧道で、しばらく進むと再び国道に合流しこの先「漆器の町平沢」の看板のある信号を右に入ると平沢に至り、右側に木曾漆器館がある。館内には漆の採取から漆器の製品化までの工程がわかりやすく配列されている。また古今の優秀作品の展示が目保養になる。当館の庭には、「送くられつ送りつ果ては木曾の秋」と刻まれた芭蕉句碑が建っている。この先はもう奈良井宿となる。

35・奈良井より敷原へ

旧道は平沢駅前を通り、すぐ中央本線を越えて奈良井川を右手に見ながら堤防の道を進み右にカーブして奈良井橋を渡り、踏切を越えて中央本線に沿って少し行くと奈良井駅に着く。駅前右高台には二百地蔵が眠っている。地蔵といつても実際は観音像である。小さなものだが一つの表情は異なり誠に愛くるしい。素朴な山に住む人々の願いである。二百地蔵のすぐ傍には八幡神社ある。祭神は菅田別尊で、奈良井家の鬼門除け守護神として信仰されていたといつ。宿場に入るとすぐ左側には総檜造りの木曾大橋が奈良井川に架かっておりぜひ見えておくとよい。奈良井宿は、長い軒先の突出した家や、美しい格子の家が旧道の両脇に並んでいる。奈良井千軒といわれるほど繁盛した宿場で、今もほぼ昔の面影を残している。はずれには枳形の跡も残り、宿場内には揚水場もあり、今も生活に使っている。

旅籠屋では伊勢屋、越後屋、油屋などが残っており今も旅館を営んでおり、昔の面影を残している。伊勢屋は脇本陣も勤めていた由緒ある家柄である。越後屋は操業二百年の歴史を持つ旅籠屋で奈良井を代表する御宿で、現在も旅館を営んでおり、見逃すことはできない。

本陣は焼失し遺構はなく、今は公民館になっている。宿場の真ん中付近にある揚水場は今も清水がふんだんに湧き出ており旅行者を楽しませてくれる。宿場の西側には五つのお寺があり北から専念寺、法然寺、大宝寺、長泉寺、浄竜寺がある。法然寺は関ヶ原合戦のとき徳川秀忠の陣屋として有名である。大宝寺は庭園が美しく、またここにはマリア地蔵がひっそりと建っている。マリアの魂影が付き纏う。

南側の鍵の手を曲がってすぐ右側に奈良井宿を代表する塗櫺の創始者中村恵吉の中村邸がある。建物は奈良井の代表的なもので、天保年間(一八三〇)～一八四三の建築で、間口が狭く、出梁造りの家は猿頭をあしらった錯庇で逆さ釘形式である。京風の主屋のくぐり戸を開けると裏庭まで続く通り土間に沿って入口から店、勝手、中の間、座敷と設計されている。

この先右側に高札場跡があり、宿場はずれには、鎮神社があり境内には樹齢数百年の檜、杉、榎が茂っている。ここには榎川村歴史民族資料館があり一般公開されている。奈良井宿の古地図、古文書、宿札、生活用品、漆櫺、木工品などが展示されている。

中山道は神社前を通り少し進むと右側に鳥居峠入口碑が建っておりここから峠道となる。木曾路最大の難所として人々に恐れられた鳥居峠

入口である。三百ほど復元された石畳を上って行く。山道を上りくるみ沢を通り、右側の茶屋跡を見ながらさらに進んで行くと、峰の茶屋跡に着く。さらに上って行くと右側に捨て子を育てたという子育ての柵がある。やがて標高千七百九十七の鳥居峠頂上に着く。

頂上は松の木が並ぶ見晴らし台があり丸山公園になっている。古来からの峠に相応しく数基の句碑が建っている。芭蕉の句は「木曾の柵うき世の人の土産かな」「雲雀よりうえにやすらふ峠かな」の二句である。ここはまた木曾谷の守りの要であり、戦国時代木曾氏が三度にわたり武田氏の侵入を防いだ古戦場である。この先道は下りとなり眼下に藪原宿を眺めながら峠を下りて行く。

木曾福島的事件

ここで話を転じて、上野清太郎の所属する弁護士法人・岸本法律事務所における本来の活動に話を戻さなければならぬ。

昭和六十年三月、弁護士法人・岸本法律事務所、関弁連(関東弁護士連合会)の長野会ルートで、代表の岸本義一にある小さな贈収賄事件の弁護協力打診が入った。

上野清太郎が、紹介を受けた所長の岸本義一に拾われて、岸本法律事務所へ厄介になつた時から十年余り後のことである。

こうした区域を越えた弁護士の融通協力はない。この業界には左程珍しいことではない。むしろ良くあることで、仕事を融通しながら、

暇な弁護士に応援依頼したり、難事件裁判の時、知名度もあり経験豊かな弁護士を求め、物色依頼がなされたからである。

関弁連とは、関東甲信越の各県と静岡県にある十三の弁護士会(東京、第一東京、第二東京、横浜、埼玉、千葉、茨城、栃木、群馬、静岡、山梨、長野、新潟)によって構成される連合体である。

現在会員は東京三会が、九八〇〇 関東十県会二二〇〇 合計一二二〇〇名の会員を擁していた。

東京三会と関東十県会との連携は密接で、互いに仕事の情報交換や持ち回りのシンポジウム開催を企画した。

当時、岸本法律事務所は、中枢東京会の一翼を担っていた。

昭和五十九年(一九八四年)十一月二十日、関弁連の長野会で事件は起こった。

長野県内の地方自治体の木曾福島建設事務所に勤務していた、県庁より出向の青木久男と加藤測量会社三人が、指名競争入札を巡る贈収賄容疑で逮捕され、地検松本支部に身柄を送検勾留された。

それ自体は左程珍しい事件ではない。むしろ長野地検でも些細な事件の一つであった。

新参の上野清太郎は、所長岸本義一の命を受けてと言うより、被疑者が事件を起した木曾福島の地名を聞いた時、志願するよ

うに信州出張に手を挙げていた。早速新宿駅に出て、朝八時丁度発の特急

ス・パ・あずさ5号に飛び乗り、春浅い信濃路をひた走り、松本で篠ノ井線に乗り換え、長野市妻科の長野弁護士会に挨拶に赴いた。

余談であるが特急あずさは、昭和四十一年(一九六六年)十二月の開業で、「狩人」『あずさ2号』のヒットは、これから十年程後のことである。

最初は一日一往復に過ぎなかったが、次第に増発され現在はス・パ・あずさで新宿〜松本間を二・五時間で繋いでいる。

日本中を湧かせた長野の冬季五輪開催日は、それから十年後の平成十年(一九九八年)二月七日であったから、未だ信越新幹線も、信越高速道路も開業していない頃のことであつたのである。

今回の事件に三者二様の思惑があつた。信州の贈収賄の案件は、むしろ所長の岸本義一の温情による、上野清太郎の他流試合的な意味合いと、長野会の弁護士会の会長に恩を売る目的があつた。いわば計算された勢力拡大の意味合いであつた。

長野の弁理士会会長の思惑としては、今後東京会の後ろ盾を利用して、裁判の際に長野地方検察庁と有利に渡り合う積りがあつた。岸本義一が、転勤したての長野地検の次席検事丸山泰三と、司法修習生同期であることを知っていたからである。

上野清太郎は、予め岸本法律事務所には、手紙とFAXで今回の案件や被疑者青木被告の情報は寄せられていたのだが、長野地

検お膝元で、担当松本在住の赤池弁護士と顔繋ぎを兼ねて、現在の状況を直接把握したかったからである。

上野清太郎は、弁護士法人・岸本法律事務所に協力依頼を電話で寄せてきた、長野の弁護士会の会長に先ず面談した。

所長岸本義一の託と共に東京の土産を手渡すと、自己紹介を兼ねて仁義を切る形で、上野清太郎は丁重に挨拶した。弁護士の世界も、侠客の世界に似て中々に古風で、助ベンにきた者のけじめは大事にされた。

紹介された赤池弁護士が、一通り現在の状況を、妻科の弁護士会館で説明してくれた。被疑者逮捕・勾留後、既に高校同期の者を中心にして、被疑者青木久男の支援活動「きずなの輪」が発起人を中心に結成されている事等であつた。

更に自家用車で上野清太郎を歓待の意味を込め、松本の自分の事務所にも案内してくれた。なんでも長野の弁護士会の会長と、赤池弁護士は松本の高校の先輩後輩の関係であるらしかった。

恐らく、会長の思惑を直接聞いていたに違いない。初対面にも拘らずの助ベンの清太郎に馬鹿に親切であつた。夜は、松本で懇親を兼ねて二人で軽く一杯やった後、浅間温泉まで車で送ってくれたのである。

実は、上野清太郎には、他にも個人的な目的があつた。

それは、父親の上野一太郎が数年前に妻

籠の鄙びた宿「妻吉」で自殺した際に警察調書を執つたという、木曾警察署の刑事との面談であつた。どの道本件で、地元警察の木曾署も訪問しなければならなかった。

もう古い事で担当者が居ないかもしれない。あるいは居ても忘れているかもしれない。木曾警察署訪問の際、兎に角弁護士の目で状況を調べてみたかったのである。

可能なら、あの時の警察調書を、ぜひ公式に入手したいと密かに思つて長野入りした上野清太郎であつた。

弁護士は検察官と違つて捜査権はないが、資料を調査することは出来る。調査には、協力してくれる土地勘のある相棒がどうしても必要だつた。

ここで、事件に触れる前に贈収賄罪について簡単に解説しておかねばならない。

贈収賄とは、賄賂を贈ることと受取ることである。文字通り贈賄すなわち贈る側と、収賄すなわち受取る側の両方に適用される刑罰で、刑法百九十七〜八条に規定されている。

つまり、相手の職務権限などを自分の目的のために有利に働かせてもらえるように、金品等の賄賂を渡し便宜を図ってもらえるようにすることである。

金品等の賄賂とは、有形無形に関係なく、人の欲望を満たすあらゆるものと定義されている。

通常は金銭等の財産的利益が大部分であるが、判例では債務の肩代わり、割賦代金や工事代金を業者に払わせたり、自動車やタクシー料金の付直し、接待と称し自分達の飲食代を業者に肩代わりさせる場合はもちろん、稀に男女間の情交供応や大学・就職斡旋すらも賄賂に当たると見做される。

贈収賄罪成立要件の、職務権限を有する者であるが、あくまで公務員が対象で、民間企業の間は含まれていない。

公務員とは、国または地方公共団体の職員と、法令により公務に従事する職員とされている。国会議員や議員秘書、裁判官や検事官を始め、省官庁や地方自治体外郭の国公立の団体、共済組合、振興会に属する職員も含まれる。

従って事件発生舞台は、概ね省官庁・地方自治体である。

現在民営化を巡る議論で揺れる、金融公庫、郵政公社や、電々公社、日本道路公団や水資源開発公団等の公庫公社公団、新技術開発事業団、中小企業振興事業団の職員も然りである。

稀にNTT、JR、NHK等予算や会計報告で国会の承認を必要とする民間企業、国民の生命や身体の安全に係る検査代行機関や民間車検場でも、「みなし公務員」として贈収賄罪の対象となることがある。

賄賂の認識であるが、公務員側が金銭を要求しても、業者側が手数料等の名目と理解し、

賄賂の認識が無い場合は業者の贈賄罪は成立せず、公務員側の収賄罪のみ成立する。

逆のケースで昭和電工疑獄に連座した、福田起夫元大蔵主計局長の有名な事例がある。昭和電工の社長から金銭を受取しながら、奥さんが金銭と気付かず放置したために他四名と共に無罪となった。

受取った側に賄賂の認識がない限り、収賄罪は成立しないのである。

何れも、本人が賄賂と認識していたか否かがその罪状を決めるのである。

贈収賄罪は、直接の被害者が居無い知能犯罪である。

犯行は内密裡に実施され、通常は第三者が知ることは不可能であり、贈収相互の暗黙の了解や意識が拘る犯罪である。時に仲間割れが起こったり、請託したのに政治家や役人が暗黙の約束を履行せずして、当事者間で争いが発生し、密告垂れ込みが起ることにも少なくない。

相手を陥れるために、時には在りもしない事実を心象膨大に膨らませて、捜査官に売込んでくることもある。

昔はこうした情報一発屋が、マスコミや警察・検察に暗躍したが今は下火となった。代わりに、最近の事例で多くなったのが内部告発である。

いわゆる内部告発文章が地方新聞のマスコミに届き、地方警察や検察の知るところとなり、捜査が開始される。

企業や団体の内部の不正行為の客観的材料を握っている場合が多いので、警察や検察は容易に端緒の糸口が見出せる。

ところが、贈収賄の場合、単なる噂や恨みや不満、やつかみの類から告発するケースもあり、多くは匿名や偽名である。

捜査の端緒を正しく警察や検察が理解して、事件の核心に迫れば問題は無いが、玉石混交の情報を鵜呑みにしたまま、権限を嵩に動き出した時は、怖い結果が待っている。

日本の国家権力、特に検察庁権力は絶大で、公訴を始めるとこれを維持し、突進む力がしやにむに働くからである。一審判決の無罪率は僅か〇・一〇・二％といわれる位の強権を発動する。有罪率一〇〇％が検察の理想であるが、裏に冤罪発生危険性が何時でも付き纏う。

「国家訴求主義」を定めた刑事訴訟法の第二百四十七条に、公訴は、検察官がこれを行う。第二百四十八条 犯人の境遇、犯罪の軽重や情状により起訴しないこともできる」とある。

これが起訴猶予とか起訴便宜主義なる言葉である。つまり被疑者を起訴するか否かは、検察官の専権事項なのである。

裁判所に、公訴を提起することを起訴というが、起訴状は裁判所に予断を抱かせるような書類・証拠を提出してはならないという原則、起訴状一本主義なる言葉がある。逮捕とは、人の身体に直接力を加えて身

柄を一定期間勾留し、捜査の目的で拘束する強制手段のことである。第二百十三条に現行犯人は何人でも、逮捕状なくしてこれを逮捕できる」と記されている。

第二百十四条に然るべき機関(検察や警察)に引渡す必要があると記載されている。

通常は現行犯以外は、裁判所の発する逮捕状を必要とする。検察機関は法務省管轄で、本来警察の捜査を監督する役目を担う。

検察組織が裁判所構造と対比するようになっており、全く同一場所にある。

例えば、最高裁判所と最高検察庁は東京だけに各一庁、高等裁判所と高等検察庁は東京、大阪、名古屋、広島、福岡、仙台、札幌、高松の8箇所、地方裁判所(家庭裁判所)と地方検察庁は県庁所在地に函館、旭川、釧路を加えた50箇所、他に支部203箇所、簡易裁判所と区検察庁は全国400余りの箇所に置かれているのである。

賄賂を出す側の業者は、仕事欲しさで公務員と付き合い、時にはお世辞もいう、相手からの要求が無くともご機嫌伺いの積りで、中元や歳暮の社交儀礼の形を借りて、金銭等を自宅に贈ることもある。

突詰めればそうした常態化した慣行が行き過ぎると、官公庁自治体と業者の間の暗黙の了解事項と化し、いわゆる癒着が生じるケースも少なくない。

最近発覚するのは、公務員の定年後の天降り先の確保目的もあり、公務員側がその

代償として、指名競争入札で、予定価格と同額か、近い価格をそつと漏洩したりすることも珍しいことではない。

贈収賄の記事や報道が、マスコミを通じて一度紙面や画面にでる度に、一般大衆は溜飲を下げて喝采する。新聞社も大衆に迎合するような記事を書く。世辞や追従で偉くなつた気分になり、公僕であることを忘れた公務員や官吏のお上意識に、大衆の反発は古今東西昔も今も変わらない。

戦前は日本にも、諜報・スパイ業務まで容認された、特高秘密警察機関があった。

治安維持法成立後に、思想系検察検事の配下で活動した。旧刑事訴訟法を背景にした日本の司法・警察をも一元支配する、現在の検察庁より強力な検察王国が存在した。ある意味日本にも、近代法治国家に名を借りた秘密警察・検察機構、KGB(旧ソビエト連邦国家保安委員会)、MI15・MI16(英国諜報機関)、CIA(米国中央情報局)等にも似た組織があったのかもしれない。

戦後は、そうした強力な特高検察機構こそ、治安維持法の消滅と共に、表向き影を潜めはしたが、テロや極左や極右団体を監視する諜報活動(スパイ活動)と秘密情報収集公認の公安警察は、依然として日本に今でもちゃんと存在するのである。

統括指揮は、警視庁警備局公安部で、総務、第一課、四課、外国諜報機関の調査の外事第一、三課、日本共産党や極左暴力の

捜査は、通称「第四課」と呼ばれていた。

公安警察とは全く別機構であるが、公訴提起権を専権事項とした検察権力は、欧米並みの捜査を駆使する通常の警察権力と、ある時は反目しある時は協力しながらも、「法曹三者」の裁判所や弁護士会に対抗し、今でも強権を発動していた。

法律用語に「善意・悪意」なる庶民感覚と異なる不思議な法律用語がある。

善意とは、ある事実を知らないことを意味し、悪意とはある事実を知っていることを意味する。

青木久男と加藤測量会社の三人の小さな贈収賄事件を、上野清太郎等弁護士視点からでなく検察側の視点で眺めてみると、事件背景にある検察の暗部が垣間見えた。

長野県といえば、確かにレベルの高い文化芸術・教育県として全国に誇る風土があったが、完全に土建王国の様相を呈していた。長年、副知事が知事になるという順送りの多選風土が問題視され改革が強く叫ばれたのは、長野冬季五輪以後のことである。

平成十二年(二〇〇〇年)十月十五日、マスコミ受けして、素人と見くびつた物書き上がりの対立候補者に、恒例のように長野市側の県庁内から立候補の副知事が敗れ、新知事が誕生するという、県土建関係者としては前代未聞の出来事が起こった。

応援した副知事派の全くの惨敗に係者は皆驚愕し、県庁の幹部や県議の間に、大激震が走るまでは、長野県は全くの保守王

国の無風地帯だったのである。

知事選で、従来の官僚による県政支配体制に終止符が打たれたのである。

県庁幹部や議員連は、補選挙戦でもこの松本市側から立候補のこの男を所詮地方政治の未経験者と侮っていた節がある。

知事選においても同じであったが、元々県内には、松本市と長野市の間には根の深い『南北戦争』の対立風土があったことは否めない。

明治四年(一八七一年)十一月に、長野県と筑摩県が成立し、明治九年(一八七六年)に合併するまでの間、東北信の長野県、中南信と飛騨地方(岐阜県)の筑摩県の二県時代が続いていた。

両市の執念深い対立の構図は、何と一世紀以上に渡って歴史を遡るのである。

特に急峻な地形のダム建設や道路に拘る、県や自治体の土木行政の県や市の公務員に与えられる職務権限は絶大で、それだけに時として慢心した倫理観の欠如が、日頃から常態化していたと言っても過言でない。

県庁・地方自治体の組織は硬直化し、自浄作用が弱かった地域といえる。

観光産業以外に目ぼしい産業もなく、専ら土木建設産業の官需を頼みとし、議会にも建設業を背景に選出された議員も多く、平成十年の冬季五輪の開催地として国際的誘致合戦に、大手ゼネコも平然と出没しては暗躍していた。

何故なら、五輪誘致が決まった後に、準国家予算規模の資金が投入されて新幹線や

高速道路及び関連施設が、どつと建設されたからである。

青木久男の事件が、些細な贈収賄事件と違った意味は、中央官庁や事業団を巡り、時に政治家が介在する疑獄事件や、複数企業間の談合や贈収賄事件と異なるといったニュアンスである。

組織ぐるみの、大手ゼネコや一部上場の大企業と官庁間で巻起こす、官製談合事件とは異なるという意味である。

そうした大型贈収賄事件に比べれば、一見些細で微々たる県庁出先の一地方、木曾福島建設事務所の日常から発生した執るに足らない事件だったのである。

長野地方検察庁は、善光寺の南大門に至る道の傍ら、地方裁判所と隣接し、信州大学の教育学部や県庁合同庁舎、市立図書館等の建物と略同じ一角の旭町にあった。

やや登り勾配の道路に面し、四階建のコンクリート造りの建物は、階段を登り切った所に入りがあった。表示も目立たず、一般市民は、これが厳しい長野地方検察庁の建物と誰も思わなかった。

地方検察庁傘下には、松本、上田、佐久、諏訪、飯田、伊那と近隣地区を受持つて六支部四区あり、夫々管轄区域が決められていた。それら六市部四区で、全県をカバーしていた。機構は、検事正、次席検事、補佐する事務局スタッフ、検事、首席捜査官及び支える配下の面々で固められていた。

昭和五十九年四月、東京地方検察庁特捜

部から長野地方検察庁に、新しい次席検事の丸山泰三が、単身赴任してきた。

丸山泰三次席検事の転勤前、長野県内で歴史に残る大事件が発生した。

昭和四十〜五十年代の最大の事件といえた。昭和四十七年二月の連合赤軍の浅間山荘事件であった。でも事件は、東京霞ヶ関の合同庁舎内の警察庁と長野県警の混成部隊が事に当たり、長野地検が直接指揮した訳ではない。

検察官は、刑事事件の司法処理を担当することを主務としていたからである。

警察から送致(マスコミ用語で「送検」)された事件に対する捜査を行い、公訴の提起の是非を定め、公訴後は同事件に対して、裁判所に適切かつ公正な法の適用を求め、ための訴訟活動を行う所だったからである。

当時、激動を極めた東京地検特捜部に比べれば、長野地方検察庁に、大学紛争の影響こそあったが、左程大きな事件もなく、次席検事の丸山泰三は、大過なく定年を迎えられそうな雰囲気であった。

この時期平穏に見えても、司法検察の暗部を照らし出す暗黒劇場の序章の幕は既に開いており、まさに序章から第一幕の幕間だったのかもしれない。

次席検事の事は、部下を叱咤激励するのが務めであり、何時もの日課となっていた。

部下は多忙ではあったが起る事件といえは傷害と暴力、詐欺、公職選挙法や贈収賄、交通事故絡みの訴訟位なものだった。

長野地検管轄の大事件といえは、平成六

年の松本サリン事件が記憶に新しい。

本事件を下に平成十三年「日本の黒い霧―冤罪」監督熊井啓・主役中井貴一(日活)で司法・警察の恥部をえぐる、シリアスな映画が作られた位である。

長野県を最も揺らし、長野地検も無縁でなかった知事選の激震の余波は、松本サリン事件から六年後のことである。

毎年四月は、どこでも人事異動の季節であるが、華やかな東京地検特捜部でも、長野地検も例外ではなかった。

平成十二年の知事選後に、県庁組織ぐるみの選挙運動、現職副知事を擁立して争った、公職選挙法違反の摘発で県土木関係者が一斉摘発されると、心太人(こんた)事で県庁は忙しくなった。長野地検も連れて忙殺されたのである。

以後、土木建設工事や大手ゼネコンからの過去の工事に拘る、案件摘発が東京高検から、指示事項として通達されてきたのであるが、これとて、丸山泰三の次席検事の職務在任期間とは無縁であった。

確かに、丸山次席検事の退職以後、新知事誕生劇を巡って地検も仕事が増えた。

なにしろ行政素人のこの新知事は、松本地方銀行の有力頭取を後ろ盾にして、松本市の支持基盤を母体に、十二万票の大差を付けて初当選したから事は重大であった。

副知事擁立で敗れた陣営、長野県土木部技監及び長野市建設事務所職員が、公職選挙法違反により十人が罰金刑の略式命令を受け、一人が公訴を提起されるという不

祥事のおまけ付であった。

然も、中央マスコミを上手に操ることに長けた知事の出現は、議員連を慌てさせた。革新派を標榜し知事の矢継ぎ早の舌法鋭い土木行政批判の過激発言が、県土木部や自治体の根幹を揺るがしかねない事態となっていたからである。

議会の対抗策として六月定例議会は、平成十四年七月五日、知事の政治方針を巡って、戦後初の知事不信任を可決していた。

中央のマスコミは、成行き如何とこぞって注目した。その後、二度目の選挙で議会側が擁立した女性弁護士は、見事な位惨敗し不信任の意図は空しく破れた。議会側は以後、臆病になり猫の首に鈴を付ける人間が当分出現してこないように観えていた。

一方、再選を受け民意を得たものの知事の革新の大儀は、各方面で空回りし始め、前の知事擁立支持者間でも、確執となって表面化していた。

県議会では知事を孤立させ、反発を利した対抗策が、具体的に検討され始めていたからである。革新派知事追い落とし策や反撃策は、県上層部や地方首長の間でも緊急案件となっていた。偶然であるが、長野県現職知事と、贈収賄事件の被疑者青木被告は高校同期生であった。

丸山泰三には、東京地検特捜部から左遷のように飛ばされ、長野地方検察庁に回されたという被害者意識があった。

東京地検特捜部の同僚の名が、新聞やTVの画面に華やかに登場するにつけ、例えば次

席検事として職能は遇されても、信州の田舎で定年を迎えねばならないという、一抹の寂しさは、丸山泰三の胸からどうしても拭えなかった。

優秀な部下育成と土建工事絡みの公訴案件増加は、定年までに課せられた、最後の自分の使命と思っていたからである。

「なんだ!この地検のざまは・・こんな無能集団だとは知らなかった。一審無罪率1%の数字は、地検の中でも最低だ!お前たちは、何時から法曹界の負け犬になったのだ。法壇お飾りの裁判官や、野にある弁護士(やぢ)の族にも負けるのか!」
東京地検特捜部といえば、映画やTVドラマにも登場する、日本のFBIともいえる組織である。

永田町や霞ヶ関を舞台に大物政治家や省庁の官僚の犯罪も手掛ける、検察庁の中でも一際高い志操が要求され、いわば検察の花形捜査陣である。文字どおり特別捜査の任務を帯びた部署で、全国に東京、大阪、名古屋の三地検にしか組織されていない。後は、地方検察庁内の一般的な特別刑事部、捜査部である。

法務省傘下であるが、他省庁に比べて比較的学閥も少なく、上司同僚との折合も良く、自身遣り甲斐を感じていた丸山泰三にしてみれば、そこで執り扱ったロッキード事件やリクルート事件等の大型贈収賄事件の修羅場を踏む上司の姿、同僚の苦惱する捜査や裁判の現場を真近に観てきた身としては、長野地検の生温い雰囲気はどうにも

馴染めず我慢できなかったのであろう。

「特捜が動くからには、公訴は無論、必ず起訴に持込め！決して手ぶらで戻るな！」丸山泰三が、若い時に、先輩から叱咤され叩き込まれた言葉がある。

全て結果優先、青臭い弁護士論理や高み見物の裁判官の被疑者の人権なんぞは、初手から無視して掛かれとの教訓であった。この流儀を貫いてきた、いや貫かねば生きてこれなかった丸山泰三である。

丸山泰三にはこれといった功績もなく、検察官としてはどちらかといえば便利屋的に使われて、負け組の存在であった。

丸山泰三の在任中に、地検公訴案件の一審無罪率を、せめて半分の〇・五％位に減少させから定年を迎えたかったのである。部下の榊原真二は、新任の泰三次席親父のお小言がまた始まったと、面従腹背で聞き流そうとした。

配布された資料に目を通す振りをして各支部から召集された、五人の捜査官と共に一様に下を向いていた。

配布資料に、全国地検の起訴実績が他地検と比較されるように印刷されていた。無罪率一覽統計データもあって、長野地検無罪率一％の数字が際立っていた。

この数字は、長野地検の法曹界での負け癖というより、自分を今日まで一人前の捜査官に鍛えてくれた、前の上司中田晋の独特の捜査方針の結果でもあったからだ。

捜査官榊原真二は、首席捜査官の中田晋に可愛がられていた。自ら子飼であると自

認し、中田晋の信認も熱く傾倒していた。

同じ法曹界の仕事をする者として、検察だけが日本を背負って立つみたい厚顔な顔をするな、決してそれは負けではない。共存することにも時には必要なのだ・・と。

それが時として犯罪者の救済となることもある・・と。免罪者を作らないで済むこともある・・と。もちろん、弁護士の手腕により、罪を逃れる輩には、断固検察の鉄槌を下さねばならない。しかし、同じ司法修習生時代は皆、日本の悪を憎み正義のために、法曹界の将来を担う仲間として共に学んだ仲間じゃないか・・と。

実際は「法曹三者」といつても大きく性格は異なっていた。裁判官と検察官が国家公務員であるのに対して、弁護士は日弁連（日本弁護士連合会）という圧力団体に守られた、れっきとした民間人である。

実務の裁判の場面では、「法曹三者」は互いに丁々発止と火花を散らし、争う敵対関係にあった。

従って中田晋の言葉は、裁判で負けた時の部下の捜査官想いの慰めの言葉であったのだが、悔しさよりも中田晋の心情が理解できたので、不思議と納得し共感できた。

「学歴資格共に同一なのに、中央の一握りの乳母日傘のエリートが特急券を手にして要職を駆け上がるのは怪しからん！」六月になると、榊原真二の上司の首席捜査官の中田晋は、突然地検を辞して野に下り、長野市でさっさとヤメ検弁護士として開業したのである。

ヤメ検とは、国家公務員の検察官が事情で野に下り弁護士となることである。

もちろん、丸山泰三次席検事が、中田の頭上に移動配転してきた事が、直接の切欠となったことは言うまでも無い。

地検事務局長は、必死で慰留に努めたが、首席捜査官の意思は固く失敗に終わった。

次席検事の丸山泰三が辞するならともかく、第一線ばりばりの中田晋が辞めるのは困る。唯でさえ、雑務的事件の数に比して検察官の数は足りない。毎年司法修習生の確保を願って来たが、何時でも空振りに終わってきた。何とか人を遣り繰りしてきたが、ベテラン中田晋の辞表届けを、すんなり受理する立場になかったからである。

お互い多くを語らなかつたが、次席検事の丸山泰三と首席捜査官の中田晋の間で、捜査方針上の大きな確執があつたに違いなかった。検察の世界では、地位抜きで激しく渡り合うのは、当たり前で珍しいことではない。対立がエスカレートすれば、辞表を叩き付ける。辞めればヤメ検弁護士になれるから決断は早い。「喧嘩辞職」は一種の勲章でもあつた。

長野地検で形ばかりの送別会があつた。

首席捜査官中田晋が依願退職して、地検は少し寂しくなつた。中田のデスクは空席のままであつた。デスクを見るに付け、昔の雰囲気は榊原真二には懐かしかった。

中田が中央の報告をしている内に、皆がデスクの周りに集まってくる。

やがて仕事の話が始まり、各自の担当中

の現状報告に移行する。だんだん熱を帯びて、意気込みがデスクの周りに立ち込め、やがて部屋中に蔓延する。その雰囲気は一言では言われぬ程である。

悪い奴には鉄槌を下し、絶対に許さない、絶対に負けない、辛くとも歯を喰いしばって頑張るぞ、皆で地検の公訴案件を支え、裁判では絶対勝ち抜くぞ、といった新たな気概に満ち溢れた。

この中田晋の下で地検の仕事ができる悦びが活力となって、榊原真二の胸に溢れていた。

仕事は自分達で見つけてきた。

新聞や雑誌を読んだり、TVを観たり、何処かに犯罪の種は無いかと、常にアンテナを張り巡らせる。

端緒は極く詰らない話から始まる。

相手を見つけたら、気付かれないように内偵を始める。周辺から捜査の輪を狭めていき、確信が持てたらいきなり逮捕する。報告すると中田晋は最初に一言言っただけである。

「この被疑者を調べろ！」

業務多忙な翌年十月のとある日、二年目を迎えた丸山泰三は、自分の机の未決の箱に、松本支部管轄の木曾福島区事務官の一枚の報告書を見付けた。

読んでいる内に、昔の特捜部時代の記憶と、閃く勘が甦る思いがした。

それは、簡単な業者の垂れ込み情報だが、こうした小さな垂れ込みが端緒となって、いわゆる中二階の政治家と企業トップとの贈収賄を上げた経験があったからである。

直に電話を執り、区事務官から状況を把握しながら私見を述べると、松本支部長には直接指示を与えた。

翌日、朝一番に捜査官榊原真二は、次席親父の部屋に呼ばれていた。

「丸山だが、部屋まできてくれないか？」
電話を執った時から、朝から厭な予感があった。捜査の助っ人に行けという指示に違いないと思いつながら、次席検事の部屋のアを榊原はノックした。予感的中した。

「木曾福島の業社から垂れ込みがあった。贈収賄の疑いがある。被疑者は県土木部道路維持科の出向係長だ。出先の松本支部捜査官と地元木曾署に協力して、公訴できるか至急やって報告してくれ。やれそうだったら首席捜査官のポストの中田君がいらないので、榊原君、君にぜひやってもらいたいのだ。」

「次席！また助っ人ですか？今の案件はどうしますか？放っておいて良いのですか？」
「あーこっちの方が大事だ！県土木部上層部や、議会県議筋まで揺さぶれるかもしれないからだ。」

「許可するから、特捜本部の資料室で贈収賄関係の『ブツ読み』をやってくれ。担当には私の方から電話しておくから。」
『ブツ読み』とは、調書や証拠書類を読む業界用語である。『ブツ読み』をやり、木曾福島署に行つて捜査すると、次席親父はいつたのである。

予断を与え誘導する気なのかと、榊原真

二は気に入らなかつた。

中田晋なら、このような初動捜査場面では、捜査前に部下に予断を与えることは決してしなかつた。

丸山次席の意図は視え視えだった。この贈収賄事件で、県庁の大物職員や県議等の政治家を焙り出そうとしていたのだ。

次席親父は、榊原の顔を窺い、空席の首席捜査官ポストをちらつかせながらも、意味有り気によく淀んだ。

真二は口にくそ出さなかつたが、そんな無駄玉、どうせ繋りはしないさ。親父はどうも、特捜部時代の栄華の夢の大物狙いの癖が何時までも抜け切れないとみえる。ここ信州田舎は東京と違う、県庁周辺の伝聞情報を鶏呑みにし過ぎる。と内心で酷評していた。

丸山泰三の東京地検特捜部の経歴は、地検の中では、本庁のみならず出先の六支部・四区の上層部に至るまで、誰も逆らえない重い位置づけを持っていたからである。

「詳しくはこの報告者を読んでくれ！」
「例のご依頼の件、本庁担当は榊原捜査官です。以後、報告書は一括私に報告下さい。検事正への報告は私の方から。はい。それで一向にかまいません。」
榊原信二は、地検トップの検事正を無視する、その電話の声に苛立ち、逆らいたく

「本庁丸山ですが、支部長をお願いします。」
次席親父は再度松本支部に電話していた。

なる衝動をひたすら抑え込んだ。

何時もの面従腹背を心に言聞かせながら、次席親父の部屋を退出した。自分の机に戻り、榊原真二は、早速A4版一枚の報告書を読んでみた。

よくある些細な垂れ込み情報だった。

次席親父が示唆する『ブツ読み』を予めやって赴くような、重大な案件とも思えなかった。ふと、前首席捜査官中田晋ならどうするだろうか？と心にかすめた。

木曾警察署に赴くと、榊原信二は、地検出先担当者に逢うよりも、直ぐに署に出頭した。電話で、事前に本件担当の刑事に面談を申し入れた。縄張り根性を発揮するよりも、地元署と持ちつ持たれつで親交を深め、贈賄側業者加藤測量会社の実情を把握するのが得策と想ったからである。

「そうですか・・・公訴の目処が立ちましたか？・逮捕ええ・・・いいでしょう・・・業者ともに勾留してゲロさせて・・・必ず起訴に持込んで下さい。これを期に、県庁の土木部を攻められるとよいですね・・・」

丸山泰三は、命令口調で松本支部長との電話を切った。

県庁出向の青木久男と加藤測量会社三人が、指名競争入札を巡る贈収賄容疑で逮捕され、地検松本支部に身柄を送検され勾留されたのは、昭和五十九年（一九八四年）十一月二十日で、松本支部へのその電話から二週間後のことであった。

初公判を翌日に控えた翌年三月のある朝、丸山泰三は、松本支部の所長からの電話連

絡を受けると一心地して、何時もの様に今日の朝刊に手を伸ばしていた。

明日になれば、新聞各紙が地検情報と初公判模様を書きたてるに違いない。

かくして、地検の無罪率減少の方針に沿った、一人の次席検事丸山泰三の定年前の思いつきの野心と共に、長野地検の強権が發動されていった。

地検が長野地裁に提出した、木曾福島事務所のパソコン贈収賄事件の起訴状である。

青木久男被告は1983年一月～1984年一月頃にかけて、設計コンサルタント会社の加藤實被告等に、道路改修等九件の設計業務委託の指名競争入札で、予定価格と同額か近い価格を漏洩。落札させた謝礼として、パソコン二台等(計95万円相当)の供与を受けていた。

翌朝、各紙が事件を一齐に報じた。

信濃日日社の見出し

『弁護側 県土木部の体質問題』

△県木曾福島事務所での指名入札に絡む価格漏洩。贈収賄事件で、競争入札妨害と加重収賄の罪に問われた県土木部係長青木久男被告の初公判が五日、長野地裁であった。起訴事実の認定で青木被告は、パソコン授受の事実を認めたら「謝礼とかではない」と賄賂性を否認。入札価格の漏洩についても「業者指導によりある程度類推させる行為を行なったが、加藤測量会社だけに落札させるつもりはなかった」と述べた。弁護側は、冒頭陳述で、県土木部の慣行として従来から「業者指導」としての予定価格の漏洩

や業者からのパソコンの不正納入が行なわれていたことを主張。また同部が青木被告のパソコン三台の授受を「外部に出せる話じゃない」などど隠蔽を図った疑いも指摘し「裁かれるべきは土木部の体質」と訴えた。

毎日日報社の見出し

『組織的関与は否定・土木部長の会見』

青木被告の初公判で、K社からのパソコン供与の隠蔽に関与したとされた市川英男当時課長、現土木部長は五日、全く承知しておりません。心外です」と全面否定。青木君からは「台だ」と聞いていた。3台あったと知ったのは逮捕後」と述べた。また、組織的な入札価格の漏洩やパソコンの不正納入が行なわれていたとの弁護側の主張には「結果的に組織ぐるみとされても仕方ないが、命令的に組織的にみんなやるつもりとはなかった」と述べた。

産経タイムス社の見出し

『土木部長が隠蔽加担』

弁護士指摘に本人否定

県木曾福島事務所を舞台とした贈収賄事件で、5日の初公判の終了後、青木被告の弁護団は会見し「土木部の問題を、個人の青木被告に責任転嫁している」と憤りをあらわにした。これに対し県土木部長は「事実と違う点がある」と反論した。弁護側は冒頭陳述で、予定価格の漏洩について「土木部の長年の慣行。業者との協力関係のためにやむを得ないこと」とし、パソコン提供についても「被告は調達係に過ぎなかった」と主張した。さらに、問題が発覚した直後、当時土木部の道路課長だった市川英男部

長が、青木被告がパソコン3台を提供されているのを知りながら、一台だけを返還させ「残り2台は俺がやっておく」と、隠蔽工作に加担したと指摘。青木被告は組織ぐるみの犯行の犠牲者だったと強調した。これに対し市川部長は「部全体でパソコンの不適切な購入があったことは組織ぐるみだったといわれても仕方がない」と、改めて謝罪を表明したが、隠蔽工作については「最初から提供されたパソコン一台だけだと(青木被告)から説明を受けていた。事実と違う主張で、心外」と反論した。

毎朝新聞社の見出し

『青木被告が争う姿勢』

パソコン調達「賄賂ではない」

県木曾福島事務所を舞台にした贈収賄事件で、競争入札妨害、加重収賄の罪に問われている県土木部道路推進課市町村道係長の青木久男被告に対する初公判が五日、長野地裁で開かれ、青木被告は「パソコンは予算を流用して加藤測量会社側に手配してもらったもので、賄賂ではない」と起訴事実を一部否認し争う姿勢をみせた。また、青木被告は、業者に予定価格を漏らしたことについて「業者への指導として、ある程度の金額を類推させることはした」と起訴事実を大筋で認めた。冒頭陳述で検察側は、青木被告が県木曾福島建設所管理計画係長だった昭和四十七年九月頃、青木被告の後任者である同課主査からパソコン二台の調達を依頼され、予算流用の方法では虚偽の報告書を作成させることになり秘密性が保てないことから、業者に予定価格に近い金額を漏らす見返りにパソコンを

供与させることを画策した、と指摘した。さらに、賄賂として受取った3台のパソコンとディスプレイモニター一台(時価計百万円相当)のうち、ディスプレイモニター一台を青木被告個人で使用、残りは同課職員に渡したとしている。これに対し弁護側の冒頭陳述では、県土木部では予算流用してパソコンを調達する習慣があり上司も黙認していたと指摘。提供されたパソコンは、加藤測量側の示した積算価格にパソコン購入費を上乗せした予算流用で、賄賂には当たらないとした。

紀行文・二の編

永田町にある国会議事堂は、文字どおり日本の政治の中核である。

正面向って、右が衆議院、左参議院である。大正九年(一九二〇年)に着工し、十七年の歳月を掛けて昭和十一年(一九三六年)に完成した。建物には、3万トンの花崗岩や大理石がふんだんに使われ、述べ254万人もの人が工事に動員されたという。

国会議事堂と同じ永田町にある最高裁判所は、我国憲法によって設置された、司法行政の唯一且つ最高の権威府である。場所は、内堀通りの三宅坂に目立つ白い花崗岩の外壁で結構人目に付く建物である。

フリージャーナリストの関口轍次は、国会議事堂と最高裁判所の間にある、永田町の国立国会図書館にいた。

此処に来たのは、久し振りで学生時代と

フリーに成り始めの時からのことであった。私学の学生時代からジャーナリストを志し、新聞社を志望したが入社できずに通信社の記者となった。

関口轍次が通信社を退社して、フリーとなった当初も、ネタ探しの調査で良く国会図書館に通った覚えがあった。

国会図書館は、新館と本館に分かれていた。初めての内部でもないのに、部分的にリニューアルされ結構複雑で、どこに行ったら自分の目的を達することができるか、皆目見当も着かずに最初唯うつろった。

神田の古本屋街で見出した、一冊の自費出版本「中山道一人歩き」に、かくも自分が惹き付けられ時間を割く羽目になるうとは、最初は思っても見なかった。

著者の上野清太郎が、現在何処にいて、現在何をしている人物なのか? 一体何者なのかをなんとかして調べてみたかった。

学生時代の執筆を、一部手直した様子もあるとはいえ、これだけ根気良く執着して文書を記す人物は、恐らく何かの方面で大学卒業後もきつと頭角を現し、何処かの分野で、論文発表なり雑誌の寄稿なりをして、今も活躍しているに違いないと、そこに賭ける思いの国会図書館通いであった。

兎も角、本館二階の総合案内カウンターにいつて相談してみると、係りの女性が笑って親切に伝えてくれた。

「先ず館内のオンラインで検索してみても如何でしょう。そして画面上で目ぼしい

資料を探して閲覧申請して下さい。閲覧できる件数は3件までですが・・・検索の方法は、本館二階閲覧室にいる係の者が現場で詳しく教えてくれます。」

関口轍次の学生時代当時と著しく変っていたのは、誰でもアクセス可能な館内の電子検索システムの充実であった。

係の女性の助言は、誠に関口轍次にとって適切であった。午前中に本館三階の第二閲覧室で、上野清太郎なる人物の名前を、専門家向けの日本評論社の「法律時報」という雑誌の中に見出すことができた。

論文の内容は、米国事例と対比した日本判例の動向であった。小難しい法律用語の羅列で、関口轍次の理解の外にあった。

同姓同名ということも有り得るので、果たして、法曹界の専門雑誌投稿の人物が「中山道一人歩き」の著者であるかは不明であった。もし同一人物なら面談して、来意を告げ、関口轍次の浮んだ疑問を率直にぶつけて見たかった。

検索で見付かった上野清太郎という人物は、東京の弁護士であった。

「これは、面白くなってきたぞ。」

関口轍次は、久し振りに自分の仕事になりそうな予感を覚えて独語していた。

更に、上野清太郎の手掛りを得るには、紀行文その二の編を詳細に読んでみなければならなかった。

普通の人間が、紀行文を読んでも何の疑問も湧くはずの無い文章であった。

特定の誰かに読ませることを意図して、

書かれたものではないだろうか？

だが、もしその特定の誰かが文章を読んだとしたらどう反応するであろうか？

奈良井宿から、南木曾にかけての記述が他宿よりも念入りだった。関口轍次の疑問の原点は、最初からそこにあった。

紀行文は、京都を加えて七十宿、丁度三十五宿ずつ区切られて記載されているのに、紀行文その二の編が、その一の編より随分長いのは何故だろうか？

文章はその一の編同様淡々と記されているのだが、行間に訴えて、筆者が何か言いたかったことがあるのではあるまいか？

筆者の身に何か変化が起こった兆候でもあるのではあるまいか？

これは想い過ぎでしょうか？

関口轍次はあれこれと、文章中でその証拠を見付けようと懸命になっていた。

あとがきに続く巻末に、板橋宿から馬籠宿までの簡単な正誤表が、別刷りで挟み込まれてあった。慌てて出版してから、その後で間違いに気付いたのであろう。

実は、この正誤表がその後の謎を解く重大なヒントになったのである。

関口轍次は、こうして上野清太郎の残した紀行文を、ジャーナリストの眼で追っている内に不思議な気持ちになっていた。

紀行文作者が、あたかも自分の隣に座っているような錯覚である。親近感を覚える友情にも似た共感である。汚いこの小さな神田神保町の「株DトップP・ニュース」社の503号室の自分の事務所での作業が

楽しいのである。そして、紀行文作者の十返舎一九の弥次さん・喜多さんよろしく、

中山道を共に歩いているような感覚である。

確か弥次・喜多道中のお伊勢参りの戯作は、「東海道中膝栗毛」で、中山道とは異なる東海道であるのだが、徒歩の旅とはこうした気分になることができるものだ。

関口轍次は、著者との共感の思いと、徒歩の旅の楽しさを、次第に実感するようになっていた。

36. 敷原より宮ノ越へ

道を下って行くと六軒町高台に尾張藩の鷹匠が捕らえてきた子鷹をここで飼育していたという尾張藩御鷹匠役所跡がある。影に沿って通りを進み中央本線を越えると左側に高塚跡(防火用水)がある。元禄八年(一六九五)の大火を教訓としてこの場所に防火用として作られた。この先左側に高札場跡の標識が建っているが、本陣、脇本陣、問屋場などの遺構は残っていない。さらに追われて左側に宮川漆器店があり宮川史料館を兼ねている。宮川家は百四十年間続いた医師の家柄で木曾代官から帯刀を許されていた。伝来の巻物、刀剣、尺八、医療道具、書籍などが展示されている。線路の東側には、天武帝九年(六八四)創建と伝えられる敷原神社と桃山時代創建の臨濟宗極楽寺がある。敷原神社の社殿は建治三年(一一七七)再興で、本殿は文政十年(一八二七)二代目立川和四郎富昌の作で由緒ある神社である。極楽寺には小堀遠州の流れをくむ綺麗寂の庭園があり心字形の池と樹齢三百年の姫小松が見事である。また宝蔵庫には、

雪舟、応拳、沢庵、白隠など高名な画家や仏僧の書画をはじめ香時計や湯筒など藪原宿が賑わった江戸時代の道具類が多数展示されている。

中山道は藪原駅の手前で線路を渡り、駅を右に見ながら進んで行くと国道一九号線に合流する。国道を三キロほど進むと右に入る道が旧道で山吹横手と呼ばれ、春は山吹の花が一面に咲き川や山が美しい所であるが、道は途中で切れているので通ることは出来ない。従って国道に戻って山吹トンネルを抜け山吹橋を渡りすぐ右折する道が旧道であり、宮ノ越宿となる。

37. 宮ノ越より福島へ

山吹トンネルを出て旧道に入ると、右下に木曾川が流れており中央本線のガードをくぐると木曾義仲の愛妾巴御前にちなんで付けられた紅葉が美しい巴ヶ淵がある。袂には芭蕉の高弟許六の句碑が建っており、美人と木曾の美しさをたたえた「山吹も巴もいでて田植えかな」の句が刻まれている。句碑の影人、を思う。

巴ヶ淵左手の一段高い丘の上一帯が義仲の居館跡と伝承されている所で旗竿八幡宮がある。

義仲が平家追討の挙兵をした所である。元の道に戻り巴橋を渡り木曾川を左に見ながら旧道を進んで行くと右側に臨濟宗妙心寺派徳音寺がある。木曾八景に「徳音寺の晩鐘」と伝えられる木曾でも有数な古刹である。山門、観音堂などは小さいがなかなかの美観である。寺の奥には義仲、愛妾巴御前、義仲の母小枝御前の墓があり、境内に建てられた宣公郷土館には義仲画像、巴御前の長刀などが展示されている。徳音寺の前には義仲館があり、義仲に関する資料や

等身大の人形を使った情景や、義仲の生涯を綴った絵画などが展示されている。この地は義仲抜きでは通れない所で、義仲は武蔵の国で生まれだが、父の死後木曾で育ち治承四年(一一八〇)以仁王の令により木曾にて挙兵、北陸路で平家の大軍を破った。しかし従兄弟の源頼朝に疎まれ、尾行されて元暦元年(一一八四)鎌倉軍に破れ近江で戦死した。

義仲館の前を通り木曾川に架かる義仲橋を渡り右折する道が旧道で、曲がって少し進むと左側に本陣跡の標識が建っている。跡地はほとんど荒れ地になっており、僅かに土蔵が残っており宿場関係の資料が保管されている。この先左側に明治天皇宮ノ越御膳水の井戸が残っている。道は宮ノ越宿を出て中央本線を越えて進んで行くと、やがて原野の集落に着く。左側国道一九号線を越えた所に、木曾義仲を育てた中原兼遠が開祖した臨濟宗妙心寺派林昌寺がある。旧道に戻り先へ進むと中山道東西中間地の標識が建っており、江戸へ六十七里三十八丁と書かれている。道を進んで行くと正沢川に架かる七笑橋に至るが、ここで国道一九号線に合流して橋を渡ると旧道はすぐ右折する。七笑橋の右手あたりが、天文二十四年(一五五五)秋、甲斐の武田信玄と福島城主木曾義昌が戦った小沢川古戦場跡で、橋の袂に案内板が建っている。

38. 福島より上松へ

七笑橋から右折して旧道に入り天神橋を渡ると、左側高台に手習天神がある。この神社は、中原兼遠が中原一族、木曾義仲、巴御前の勉強のため京都北野天満宮を勧請して建立したものの

である。境内にある樹齢千年の一位の古木は見事である。天神橋の右手の方に中原兼遠の屋敷跡があるが、巴御前はここで生まれ、義仲はここで成長した。

道を先に進み中央本線を越えて左側の道を線路に沿って道なりに歩いて行くと、やがて国道一九号線に合流しそのまま進むと国道は福島トンネルに入っていくが、旧道は右の道を進むと正面高台に福島関所門が建っている。江戸幕府が江戸防衛のため、五街道の各所に関所を設けたが、東海道の箱根と新居、中山道の碓氷とこの福島が特に重要視されていた。関所の創設は慶長年間(一五九六～一六一五)で、管理は木曾代官山村氏で、「入鉄砲出女」を厳しく取り締まった。影の牢獄もあつた。今は福島関所史跡公園となっており、隣接して福島関所資料館があり、関所関係の資料が数多く展示されている。関所跡に隣接して高瀬家藤村資料館がある。

島崎藤村の作品、写真、書簡などが展示されている。同家は藤村の姉園子の嫁ぎ先でもあり、「家」などの藤村文学の中にしばしば登場する。また菓の「奇応丸」の製造販売で名高い旧家である。道は高台より坂を下り上町を通って本町に入ると、左側に福島町役場がありここが白木家本陣跡である。

ここで木曾川の西側をぜひ探索しておきたい。関所跡前の関所橋を渡ると興禅寺がある。木曾氏、山村氏の菩提寺で永亨六年(一四三四)創建で木曾義仲の墓、山村氏一族の墓がある。石庭「看雲庭」は枯山水の庭園としては東洋一の広さで見事である。興禅寺の南隣には、武田信玄の廟所となっている臨濟宗長福寺がある。役場

前の大手橋を渡ると尾張藩の木曾代官であった山村代官屋敷跡がある。屋敷内には山村代官に関する資料が展示されている。山村氏は福島關所を預かった家柄で、石高は七千五百石の高録で尾張藩の家臣であると同時に、幕府からも特別待遇を受けており名古屋と江戸に屋敷を拝領していた。

元の道に戻り役場前を通り岩屋本店旅館の所を左に曲がり、すぐ右に曲がると鍵の手となっておりここに高札場が建っている。高札場の所を左に曲がると、上之段町で左側に上之段用水がある。上之段用水の裏手には大通寺があり、ここには武田信玄の娘真理姫の供養塔がある。旧道は矢沢川を越えて右に曲がり矢沢町を通って木曾福島駅前に至る。駅前の御岳神社を左に見ながら坂を下りて行くと、旧道は国道一九号線に合流するが、すぐ酒屋の先を左へ入る道が旧道で少し逃げて行くと、左側に福島一里塚跡碑が建っている。

旧道はまもなく国道一九号線に合流しやがて元橋に至り、すぐ左に入り中央本線のガードをくぐって進み山道を上って行くと、右手の高台に御岳山遥拝所があり、ここから御岳山を眺めることができる。木曾路のうち御岳山の仰がれるのは鳥居峠の外はこの地だけである。ここから道は下りとなり中央本線のガードをくぐると国道一九号線に合流し上松に到着する。

39. 上松より須原へ

上松に入って木曾川に沿ってしばらく進むと右側に日本三大奇橋の一つ木曾の棧跡がある。「木曾の棧、太田の渡し、碓氷峠がなげりやよい」

と唄われた難所であった。棧は険しい崖に橋を架け僅かに通路を開いたものである。木曾路の旅情を暖めたことで名高いが、反面危険も背中合わせであり多くの人を失っており、現在はそ一部が残っている。長野県史跡に指定されている。対岸には芭蕉と子規の句碑があり、それぞれ「かけはしや命をからむつたかずら」「かけはしやあぶない処に山つじ」の句が刻まれている。句碑同志の影の密談のようだ。

道は国道一九号線を進み中央本線のガードをくぐり、やがて右赤沢森林への交差点信号の所を左に入り、十王沢川に架かる十王橋を渡る道が旧道で、上松宿となる。宿場に入るとすぐ左側に木曾玉林が天正十年(一五八二)に創建した玉林院があり、山門、多宝塔、黒松は往時の面影を伝えている。

この先左側に塚本歯科医院があるがここが本陣跡、向かい側の原家が脇本陣跡であるが、いずれも火災により焼失し遺構は残っていない。この先すぐ左側に一里塚跡があり、ここを左に入る細い路地が旧道である。しばらく道を追いかけて進んで行くと左側に上松小学校があるが、校内に藤村文学碑、尾張藩上松材木役所御陣屋跡、諏訪神社がある。

ここから「キヨルほど進むと民宿「たせや」江戸時代の立場茶屋多瀬屋」と江戸時代からの名物そば屋の越後屋がある。両店の間の狭い坂道を下り国道一九号線を越えた所に臨川寺があり、境内から「寢覚の床」を眼下に見ること出来る。激流が作り出した木曾路きつての溪流で、名前の由来は、かの有名な浦島伝説である。竜宮城から帰ったきた浦島太郎はここ上松に住み

つき、ここで竜宮城で貰った玉手箱を開いたところたちまちにして三百才の老人になってしまったという伝説である。臨川寺の境内には芭蕉、子規、沢庵和尚、貝原益軒などの句碑、歌碑が建っており、また浦島資料館もある。

旧道に戻り石畳の道、檜林の中を山側に左カーブして右カーブしながら進み中央本線の線路を越えると国道一九号線に合流し、すぐ左側に木曾八景の一つ、高さ三十ハル、幅十ハルの雄大な小野の滝がある。江戸時代には茶店があり名物小野の滝蕎麦切りを売っていたというが今は何もない。ここから須原までは、主として国道一九号線を進むことになるが、荻原集落では左に入る旧道が五百ハルほど、立町集落でも右に入る旧道が五百ハルほど残っている。国道一九号線を進んで行くとやがて須原宿の案内板が建っており左に入る道が旧道である。

40. 須原より野尻へ

須原宿はゆつたりとした穏やかな宿場町で昔の面影が残っているが、人影も疎らで火災により本陣、脇本陣ともに焼失し遺構は残っていない。宿場の真ん中辺りの右側に西尾家が酒屋を営んでいるが、ここが脇本陣跡である。西尾家は問屋場、庄屋も兼ねて脇本陣を勤めていた。本陣は木村家が勤めていたが今は住宅が建っている。近くには文豪島崎藤村による小説「ある女の生涯」の舞台となった清水医院跡があり、現在は普通の民家になっている。

宿場の南は左側には臨濟宗妙心寺派定勝寺があり、木曾三大寺の一つとして有名である。木曾三大寺(興禅寺、長福寺、定勝寺)のうちで

最も古く木曾氏の開基と伝えられるが、二度の木曾川の大洪水で流失し、現在の建物は慶長三年(一五九八)木曾代官であった石川備前守光吉が再興したものである。国の重要文化財に指定されている山門、本堂、庫裸は、桃山文化風の建築様式である。本堂には桃山文化の粹千羽鶴の壁画があり、圧巻は本堂に安置されている木曾檜の達磨像で、その大きさ、表情は迫力満点である。寺内には古文書、絵画類が保存されており、庭園も素晴らしくしばし時を忘れる。

旧道は線路を越え坂を下っていくと橋場集落に着く。伊那川の対岸の崖の上に乗出すように建っているのが岩出観音である。京の清水寺と同じ懸崖造りで、境内には地藏尊仏などの多数の石仏、おびただしい絵馬が奉納されている。溪斎英泉の木曾六十九次「伊那川橋遠景」に描かれている堂として有名であり、ここからの景色は抜群である。

4.1 野尻より三留野へ

伊那川に架かる伊那川橋を渡りしばらく進むと大島集落となるが、集落の途中から左へ入る道が旧道で、やがて長野集落に入り左に天長院を見ながら先へ進み、大桑村役場、郵便局、大桑駅を過ぎ踏切を渡ると国道一九号線に合流する。関山を通りしばらく進むとやがて野尻宿が正面に見えてくる。

野尻駅の案内板を見て右へ行く道が旧道である。宿場の入口左側に高札場跡がある。傍には「いぼ石」といわれる大きな石がありこれにさわるといぼがとれるといわれている。本陣は中町西側、森家が、脇本陣は、本陣向かい側木戸

家が勤めていたが、いずれも火災で焼失し遺構は影すら感じさせない。宿場の両出口には「はずれ」という屋号の家があり、宿場内は七曲がりといわれるように大きく曲がっており、いかにも宿場という感じがする。

宿場の左手国道一九号線を越えた所に妙覚寺があり、ここには天保三年(一八三二)の銘のある影の人々とマリア観音が有名である。裏庭も大変美しい。この先同じく国道一九号線の左側高台に須佐男神社が林の中にある。当神社は、安産の神様として親しまれている。

元の道に戻って進んで行くと、やがて下在郷に至りここの公民館に観音堂がある。道はなだらかな坂を下り線路の右側に一旦出て、また左側に入る。木曾川右岸の関西電力読書ダムを見ながら新茶屋跡、勝井坂、八人石と進んで行き、やがて国道一九号線の南木曾町の標識がある所を斜めに横切り坂を上って行く。

4.2 三留野より妻籠へ

南木曾町の標識がある所を左斜めに坂を上って行くのが旧道で、坂を上り切った所に庚申塔、二十三夜塔、観音像、馬頭観音などの石仏群がある。この先少し行くと熊野神社があり、ここで国道一九号線を横切りさらに踏切を越えて行くくと十二兼駅が左側に見える。道を進んで行くくと右側に明治天皇中川原御膳水碑が建っており、この先で国道一九号線に合流する。沓掛、羅天と進んで行き金知屋で左に入る道が旧道で坂を上り切った所が三留野宿である。

宿場に入るとすぐ右側に三留野本陣跡がある。本陣は鮎沢家が勤めていたが、明治の大火で焼

失し遺構は残っていない。屋敷跡は公民館となっており庭内の枝垂梅が名残をとどめている。根周り一・八^尺、高さ八^尺あり南木曾町の天然記念物に指定されている。この先左奥には曹洞宗等覚寺がある。貞享二年(一六八五)大雲和尚の開山で、当寺には南木曾町有形文化財に指定されている十一体の円空仏があり、なかでも偉駄天像がすばらしい。影を引いた等覚寺の隣には東山神社がある。

南木曾博物館の傍に「妻吉」という宿があった、宿の前に、井戸と水場がある。平日にも拘らず、井戸の周りが賑やかで、貴重なものを失って、一つ無くしたような人ばかりである。

旧道は南木曾駅の左側の高台を進んで行くが、駅の上辺りに石垣のある十八世紀始めの建築と推定される住宅があるが、これが先程の東山神社の神官園原家である。ここには園原先生碑が建っている。園原先生とは、園原旧富のことで、江戸時代中期の神学者で尾張、美濃、信濃に門人多数を擁していた。

南木曾駅の西側には、国の重要文化財に指定されている桃介橋が架かっている。電力王と敬称された福沢桃介が水力発電開発のため架けた吊橋で全長二百四十七^尺の日本でも最大の木橋である。福沢桃介は埼玉県吉見町出身で福沢論吉の養子となり、名古屋を中心とする実業界で活躍、特に木曾川水力発電の開発に情熱を注いだ。日本最初の女優といわれた川上音二郎の妻川上貞奴との策謀のロマンは有名である。旧道を先に進み中央本線を越えて少し行くと、右側にかぶと観音、左側に木曾義仲、巴御前ゆかりの振り袖の松がある。

43. 妻籠より馬籠へ

振り袖の松からさらに山の中を進んで行くと、やがて「江戸から七十八里」と記された上久保一里塚があり、ほぼ原形をとどめている。南木曾町には十二兼、金知屋、上久保、下り谷の四つの一里塚があるが原形をとどめているのはここだけである。南木曾町史跡指定になっている。竹藪の中の小道を進んで行くと右手一段高い所に妻籠城跡がある。妻籠城は主郭、二の郭、空堀、帯曲輪をそなえた規模の大きい山城で、主郭からの妻籠宿、三留野宿の遠望が素晴らしい。天正十二年(一五八四)小牧長久手の戦いの折、ここも戦場となり、その後慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の戦いの時も妻籠城に軍勢が入っている。森の奥に死体の上がらぬ池があり、木の枝に不思議な縄が揺れた後に白骨が横たわる。関ヶ原の戦いが徳川方の勝利に終わった日、徳川秀忠はこの城に泊っており、関ヶ原の戦いに参戦出来ず家康の不興を被ったことはつと有名である。殺された無念さを思う。一国一城令により、元和二年(一六一六)廃城となって影すらもない。

道を先に進んで行くと真下に妻籠宿が見えてくる。左側に鯉の形をした鯉岩と呼ばれる岩がある。坂を下りて行くと左側には、かつて木曾氏、武田氏の関所であった口留番所跡があり、さらに進んで行くと右側に高札場跡がある。正徳二年(一七二二)の書上に、「一段の石垣(下段長さ一丈六尺横七尺高さ三尺上段長さ一丈三尺横五尺五寸高さ一尺磨石)の上に、長さ一丈三尺幅六寸厚さ五寸横五尺五寸の土台を置き、五

寸の柱」とあり、この記録によって復元された。ここからは年間を通して観光客で賑わう妻籠宿の宿場となる。高札場跡から少し行くと、右側に脇本陣奥谷がある。脇本陣の奥谷は屋号で家名は林氏で、代々脇本陣、問屋を勤めた。木曾五木の禁制が解かれて、明治十年(一八七七)に総檜造りに建て替えられたのが現在の建物である。先代六郎氏の母に当たる「おゆう」様は島崎藤村の幼友達、若菜集「初恋」の女性といわれている。現在は奥谷郷土館となっており、木曾路の歴史、中山道の資料、町並み保存資料、島崎藤村文学資料などが展示されている。

隣接して歴史資料館がある。脇本陣の向かい側には島崎家本陣が江戸時代の図面を元に復元され、現在は本陣資料館として一般公開されている。島崎氏は武田信玄の家臣の子孫で、藤村の小説「夜明け前」の青山寿平次の家で、藤村の母「縫」の生家でもある。また藤村の兄「広助」が馬籠本陣から養子に來ている。

この先道は枳形になっており、曲がり終ったところの左側に延命地藏堂がある。延命地藏堂の脇から石段を上って行くと光徳寺があり、明治九年(一五〇〇)開山で、現在の本堂は享保十八年(一七三三)脇本陣林平八郎が中心となって建てたものである。勅使門は左甚五郎の作で、樹齢三百年の老枝垂桜が歴史を語ってくれる。

寺下の町並みは、昔のまま保存されており観光客を十分楽しませてくれる。十八世紀中期の建築とされる下嵯峨屋、上嵯峨屋は江戸時代そのままの旅籠屋の面影を残している。いずれも南木曾町の指定文化財になっている。

宿場を出て妻籠発電所を見ながら橋場を過ぎ、

神明坂を上り神明橋を渡ると大妻籠に至り、急な坂を上り詰めると道は平坦になり下り谷の集落に至る。

44. 馬籠より落合へ

下り谷を通り坂道を上って行くと左側に倉科祖霊社がある。天正十四年(一五八六)松本城主小笠原貞慶の重臣倉科七郎左衛門朝軌が従者三百余人と共に地元の土豪に襲われて討ち死に命じた。百六十年後その倉科の霊を祀ったもので、命日の四月三日が例祭である。

ここから少し進むと男滝、女滝の見事な二つの滝を見ることが出来る。浮世絵師安藤広重描く木曾冬山の図、十返舎一九の物語の挿絵に出てくる名所で、吉川英治の小説「宮本武蔵」に武蔵が恋と煩惱の苦から脱しようと滝壺に入り修業しているところへ、お通さんが現れて二人は結ばれるというロマンの滝である。

滝上の道を進むと右側に一石柘白木改番所跡がある。尾張藩が直轄管理し、木曾五木(ひのき、さわら、ねずこ、あすなろ、こうやまき)をはじめとする木材の谷外持ち出しを取り締まった。所謂「木一本首一つ」の禁令を出して山林の管理をした。結果的には鬱蒼たる木曾檜の美林はこの禁制によって守り育てられたこととなる。このすぐ先には江戸時代の旅人の休息の場であった一石柘新茶屋跡がある。中山道の宿駅制度のなかで、宿場と宿場の間に新茶屋という休憩所を設けた。妻籠と馬籠の中間の一石柘の牧野家は江戸初期からの新茶屋である。牧野家は昭和四十五年(一九七〇)迄営業したが経営が成り立たず廃業した。現在は妻籠宿保存財

団が預かり冬期を除いてお休所として観光客に解放している。

ここから坂を上り切ると標高七百九十位の馬籠峠頂上に到達する。妻籠宿から三留野宿まで展望出来、正岡子規の「白雲や青葉若葉の三十里」の句碑が建っている。ここから道は下りとなり、十返舎一九歌碑、水車塚を通りさらに下って行くと馬籠宿が一望出来、やがて馬籠宿に着く。宿場に入ると左側に高札場跡がある。

石畳の道を下りて行くと右側に蜂谷家脇本陣があり、往時のままの玄武石垣が残り、上段の間が復元されている。馬籠脇本陣史料館として一般に公開されている。館内には蜂谷家に伝えられてきたものを中心に、宿場、山林などの資料が展示され、宿場のありさまや木曾谷の暮らしがうかがえる。脇本陣の南隣が大黒屋で、前述した島崎藤村の初恋の人「おゆう」様の生家である。

さらに南隣が島崎家本陣跡で、島崎藤村の生家であり、これも藤村記念館として一般公開されており、藤村の自筆の原稿、遺品、作品などが展示されている。藤村の「木曾路はすべて山の中である」で始まる小説「夜明け前」は、馬籠を舞台とした明治維新の激動期を情熱的に生き抜いた木曾の人達の歴史物語である。

藤村記念館から少し先の左側には、島崎家と親交の深かった清水屋(原家)がある。当家は、本陣島崎家(藤村の生家)と共に馬籠宿役人を勤めていた関係で古くから親しく、特に原一平は藤村との親交が深かった。清水屋は現在清水屋資料館として一般公開され、館内には藤村の書簡、宿場関係資料が展示されている。

この先道は楸形に曲がり宿場は町並みが途絶え、先に進むと荒町集落に入り、だんだん視界が開け落合宿が一望出来、振り返ると馬籠宿がはつきりと見える。「木曾路はすべて山の中である」の木曾路も終りとなり、美濃路(岐阜県)へと進んで行く。

45. 落合より中津川へ

旧中山道は荒町集落から坂を下って行くと新茶屋となりここから美濃国(岐阜県)となる。右側に正岡子規歌碑があり、この少し先の左側に島崎藤村筆になる「是より北、木曾路」の碑が建っている。藤村の書いたその独特の筆跡はふるさとの情緒を一層高め、ここが木曾路との思いにふける。傍には「送られつ送りつ果ては木曾の穡あき」の芭蕉句碑がある。またここには一里塚跡碑が建っている。

道は十曲峠となり山の中を通り、岐阜県指定史跡になっている全長八百位の落合の石畳を下って行く。ここから少し行くと左側に医王寺(山中薬師)があり、この本尊薬師如来像は行基作と伝えられ日本三大薬師(御嶽の蟹薬師、三河の鳳来寺、落合の医王寺)の一つである。

道はさらに急な下り坂となり、落合川に架かる下桁橋しもげたを渡り滝場を過ぎ県道と交差する所に高札場跡の石碑が建っており、すぐ落合宿となる。この先、宿場となり右側に井口家本陣跡があり、中津川市史跡に指定されており現在も住居として使用されている。二度の大火にもかかわらず往時の姿をとどめており中山道に残る八つの本陣の中でも貴重な存在となっている。

南隣は藤村の「夜明け前」に出てくる稲葉屋

がある。稲葉屋は島崎藤村の「夜明け前」の林勝重のモデル鈴木利左衛門弘道(一八四九〜一九二九)の屋号である。もとは酒造業であったが、馬籠本陣島崎正樹(藤村の父)に弟子入りして学業に励んだ。後年落合初代村長、学校教諭を経て金融業そして蚕種業を営んだ。時代の流れであったのであろう。左側には塚田家脇本陣跡があるが、遺構は残っていない。この先右側には善昌寺がある。

道はここで左に曲がり、坂を下りて行きまたすぐ上りとなり国道一九号線を横断する。横断して坂を上り切った所が木曾義仲の家臣落合五郎兼行の城跡である。ここには「オガラン四社」と呼ばれる愛宕神社、天神社、山神社、落合五郎兼行神社がある。

ここから道なりに進んで行き国道一九号線を横断し、さらに長い急坂を上って行くと右側に与坂立場跡があり、昔ここで名物の三文餅を売っていたという。与坂を下って行くと左側に子野一里塚跡がある。ここからまた坂を上って行く。右側の林の中に覚明神社がある。天正五年(一七八五)木曾御嶽を開くため中山道を通り、ここに泊まった覚明行者を記念してここに覚明神社を建てた。

さらに進んで行くと左側に観音像、地藏様などが安置されている石仏群がある。子野のこの地には「徳ごんさん」と呼ばれた地藏堂があった。地藏堂はなくなっているが、庚申塔、地藏観音像などの石仏が多数建っている。境内には旅人の旅の疲れを癒すために植えられた見事な枝垂桜が残っている。

46・中津川より大井へ

道は左に曲がりながら下り、今度は右に曲がり急坂を上って国道一九号線の下をくぐり少し進んで行くと、右側に木曾山林伐採を管理した尾張藩白木改番所跡の石碑が建っている。この先の左手は旭が丘公園となっており、ここからは中津川宿が一望出来る。公園の入口に、俗稱すみれ塚と呼ばれる芭蕉句碑がある。句は有名な「山路きて何やらゆかしすみれ草」で、ここからすみれ塚と呼ばれている。公園内には庚申塔、標示石、二十三夜塔、灯籠などの石造物が多数建っている。

公園から茶屋坂を下り国道二五七号線を横断して少し行くと、左側に高札場跡がある。家業専念、ばくち禁止、人足駄賃などの札が掛かっている。道は新町に入ると右側に中山道新名所往來庭がある。この先左側にある本町電電公社が森家脇本陣跡である。電電公社の向かい側が市岡家本陣跡で、かつては建坪二百八十三坪、門構え、玄關付の大きな建物であったが今は電電公社の駐車場になっている。本陣、脇本陣ともに案内板が建っている。

電電公社の南隣が庄屋肥田家で、中津川宿の歴史を語る貴重な存在である。江戸時代からのそのままの建物で文化遺産として貴重な建造物である。肥田家は享保三年(一七一八)から明治五年(一八七三)まで、江戸期の半分と長い間庄屋を勤めた。幕末には平田国学に入門し、日本の夜明けのために活躍している。

この先少し行くと道は直角に、左そして右へと曲がる榊形になっている。道は中津川橋を渡り橋場を通り駒場下の榊形を曲がると、すぐ左

側に駒場村高札場跡の石碑が建っている。先に進むと東山道坂本駅跡があり案内板が建っている。ここから、曲がりくねった坂道を上って行くと右側に中津川市文化財指定となっている双頭一身道祖神が建っており、「是より苗木道」と刻まれている。

この先右側に上宿一里塚跡がある。上宿、会所沢を通って行き国道一九号線を横断して進むのが旧道である。与ヶ根に入ると右側に六面六地藏があり、この先右側に八幡神社がある。この先少し行くと右側に雑貨屋「ちりんや」があるが、この手前を左に入るのが旧道で、細い道をしばらく進んで行くと右側に地元や旅人に信仰された坂本観音様がある。

この辺りからは恵那山が正面に見えて景色が楽しめる。道は茄子川に入り、中町には秋葉大権現の常夜塔があり、左に行く道は遠州秋葉道である。常夜塔の手前には篠原家茄子川小休所跡がある。中津川宿と大井宿の間は長く、「こに小休所が置かれ大名、姫宮通行などの休憩所の役割を果たした。明治天皇が休息された部屋は今も残っている。道は恵那市岡瀬沢へ入って行く。

47・大井より大湫へ

旧道は岡瀬沢から上りとなり、しばらく進むと下りとなり濁川に架かる筋違橋を渡り甚平坂を上り切ると関戸に至る。左側に関戸一里塚跡があり、江戸日本橋より八十七里と刻まれている。道は長い急坂を下っていくと右側に鬼子母神があり、ここで県道と合流し中央自動車道の架橋を渡ると右側に菅原神社がある。

ここで県道と別れ右の道を下りて行くとすぐ

大井上宿石仏群が立ち並んでいる。昔の人は神仏に病気の治ることを祈ったり、村境に地藏菩薩や賽の神を建て、病魔が村へ入らないように願うことが多かった。ここは大井宿を一望できる位置で、宿場の人達はここに石仏を建て病氣平癒とともに悪病や悪人の侵入を防ぎ、宿内の無事息災を祈ったのである。この先明智鉄道の下をくぐると、右側に高札場跡が建っており大井宿に入っていく。

大井宿は、榊形が六ヶ所もあり他では見られない町並みとなっている。高札場跡の先を左に直角に曲がり、続いて右に直角に曲がると林家大井本陣跡がある。大井本陣は昭和二十二年(一九四七)の火災で大半を焼失したが、幸い表門付近が焼け残り安土桃山様式を伝えるこの門を見ることが出来る。表門は他の本陣に比べるとやや小ぶりであるが、屋根は、そりをもたせた瓦葺きで、破風板や小屋組みの細工や彫刻も丁寧に仕上げられている。門の傍に立つ松は樹齡三百年をこす見事な老木である。

本陣跡を右に曲がるとすぐ左側に大井村庄屋を勤めていた古山家の建物が残っている。この先左側に安田薬局があり、ここが高木家脇本陣跡である。安田薬局の向かい側の岩井住宅が、明治天皇行在所跡で石碑が建っている。この先をすぐ右直角に曲がる道が旧道で、突き当たり市神神社があり、正月七日は祭礼が行われ七日市が立ち大いに賑わう。

ここを左直角に曲がりまたすぐ左直角に曲がって進むと阿木川に架かる大井橋に出る。道は商店街となっている東銀座、西銀座を通り長島町に入ると、左側に立派な門構えの本酒屋の屋号

をもつ中野村庄屋がある。この先長島橋を渡り坂を上って行くと五差路に出るが、左から二番目の道を進んで行く。しばらく進んで行くと左側に西行硯水がある。文治三年(一一八六)西行は二度目の奥州の旅に伊勢を出発、鎌倉で源頼朝に会い、平泉で一年間滞在した後、木曾路を経てこの地を訪れ三年間暮らしたという。歌人である西行は多くの歌を詠み、昏々と湧き出ることの泉の水を汲んで墨をすったと伝えられる。

旧道はここで右に入り中央本線を横切って急坂の山道を上って行く。しばらく上って行くと右側に西行塚があり、ここには歌碑二基、芭蕉句碑、五輪塔がある。坂を過ぎ平坦地になると西行の森に着く。恵那山が正面に見え絶景である。またここは桜の名所になっている。

この先少し行くと横ヶ根一里塚跡があり、左右に塚が残っている。さらに進んで行くと横ヶ根立場茶屋跡がある。江戸時代には、伊勢屋、榎本屋、東国屋、松本屋、中野屋などの屋号を持つ茶屋が九戸あり草鞋、餅などを売っていた。またここは名古屋伊勢道との追分になっており、左に下りて行く道が竹折、釜戸、名古屋、伊勢への道で石の道標が建っている。

旧道は乱れ坂を下り乱れ橋を渡る。大井宿から大湫宿までは三里半の道程であるが、西行坂とか権現坂とか数多くの坂があり全部で十三あることから十三峠という。この乱れ坂も十三峠の一つで、この坂が大変急であるため大名行列が乱れ、旅人の息が乱れ、女の人の裾も乱れることから乱れ坂というようになった。ここからまた坂を上って行くと紅坂となり紅坂一里塚跡がある。

紅坂を下って行き国道四一八号線を横断した右側に深萱立場所がある。ここは大井宿と大湫宿の中間にあつて、加納家が勤める大名の休憩所となつた立場茶屋があつた。旅人のための茶屋もあり、お茶、お餅、おこわなどを売っていた。ここから西坂、三ツ城坂を上り、茶屋坂を下りて行くと瑞浪市となる。

48 大湫より細久手へ

茶屋坂を下り大久後を通り権現坂、鞍骨坂と急坂を上って行くと細山の集落に入りここには炭焼立場所がある。さらに山道を上って行くと榎の木坂に入り、権現山一里塚が両塚ともほぼ完全な形で残っている。上り坂が続きやがて右側に念仏によって湧き水が出て巡礼の命が助かつたという「順礼水」がある。

道は曾根松坂の下りとなり、昔の石畳も残っており右側に阿波屋茶屋跡碑が建っており、この先右手奥に旅の安全を祈って建てられた、三十三観音が石室の中に安置されている。この先き左手には、尻冷やし地藏が祀られている。横の大木の根元から湧き出る清水は、往時から涸れることなく旅人の喉を潤し続けている。道は石ころ道の曲がりくねつたしゃれこ坂(八丁坂)を上り、山神坂、寺坂、前坂と下りて行くと眼下に大湫宿が見えてくる。

宿場に入ると、左側に宗昌寺があり、ここからの大湫宿の眺めが素晴らしい坂を下り左直角に曲がると宿場の中心となり、右側に小学校があるがここが大湫宿本陣跡で説明板が建っている。校庭には皇女和宮の歌碑が建っている。この先少し行くと右側に問屋場跡があり、この奥に白山神社がある。

問屋場跡に続いて右側に豪華な門構えの保々家脇本陣があり現在も保々氏が住んでいる。江戸時代の貴重な建物である。

また少し進むと右側に文化四年(一八〇七)に建てられた常夜灯のある神明神社がある。境内には宿場のシンボルである大杉がある。樹齢千二百年と推定され周囲十一メートル、高さ六十メートルの巨木でまさに御神木である。大杉の根元からは神明の清水が湧き出ており旅人の喉に湧きを潤していた。

神明神社のすぐ先の右側高台に大湫観音堂がある。堂内の格絵天井六十枚は三尾静暁筆でなかなかの美観で有名である。境内には枝垂桜があり、見事な枝振りでは春には美しい花を咲かせた。またここからは宿場を一望することが出来る。道は宿場はずれとなり、高札場跡があり、ここには中山道大湫宿の石碑が建っている。

この後、大湫病院の先を右に入る山道が旧道である。入口には中山道琵琶峠東上り口の石碑が建っている。苔むす馬頭観音や石碑に古道の趣を感じながら、細く険しい山道を上って行くと、琵琶峠の石畳が六百ほど続き四百年の歴史を物語っている。琵琶峠の頂上には、皇女和宮歌碑があり、「住み馴れし都路出でてけふいくひいそぐともつらき東路へのたび」と刻まれている。この峠から都路を何度も振り返つたという宮様が痛々しい。ここからは伊吹山や鈴鹿山脈の景色が楽しめる。しばしの休憩を得るには絶好の場所である。

49 細久手より御高へ

峠から下りとなり少し行くと、八瀬沢一里塚が左右ほぼ完全な形で残っている。さらに峠を

下りて行くと峠の麓右手方向に菅原道真を祀つてある北野神社がある。ここから道なりに進んで行くと、弁財天池に着く。囲りの木々を水面に映すこの池は、神秘的な雰囲気をもたらしている。天保七年(一八三六)に建てられた弁財天の宮は、池の真ん中に祀られている。弁財天の石祠には「奉祭円池寺弁財天者元文五庚申」と刻まれている。池から七百メートルほど進むと、八ナノキ自生地である南の入口に着く。八ナノキは、別名「はなかえで」といい、四月頃、濃赤色の花を咲かせる。

やがて笹口バス停となり、この先すぐ奥の田一里塚があり、左右ともほぼ原形をとどめている。北塚は高さ三・五メートル、直径十二メートル、南塚は高さ四メートル、直径十一メートルほどある。傍には江戸へ九十二里、京都へ四十二里の道標が建っている。道を進んで行き、見国見晴所を過ぎると、やがて細久手宿へ着く。

宿場の入口右側高台に三百年の歴史がある庚申堂がある。鬼門よけの神様で、境内には三百年の歳月を経た石造物もあり往時の面影を伝えている。細久手宿の本陣、脇本陣は共に小栗家が問屋を兼ねて勤めていたが遺構は残っていない。宿場の中央右側には老舗の暖簾を誇る尾州藩指定宿大黒屋がある。堂々とした構えの観音開きの門、屋根には立派な卯建が上がり、玄関に入れば正面に上段の間と箱階段が目につく。さすが尾州藩指定の宿といった趣き、今も百五十年前と変わらぬ姿で旅館を営んでいる。

宿場の西出口右側には日吉神社がある。道は真つ直ぐに進んで行くと平岩に出る。平岩の北一キロメートルぐらいの所に土岐氏ゆかりの曹洞宗開元

院がある。鶴ヶ城主土岐頼元の協力を得て、月泉和尚が室町時代の嘉吉三年(一四四三)に開基。瑞浪市内では土岐桜堂薬師に次ぐ古いお寺である。本尊は南北朝時代初期の文和五年(一三五六)銘のある檜の寄木造りの観世音菩薩座像で岐阜県文化財指定になっている。

元の道に戻り道を進んで行くと西坂の切り通した急坂を上り切った所の右側の石室の中に秋葉三尊が安置されている。道中安全を願って手を合わせた旅人の祈りが伝わってくる。この先道は尾根づたいに林の中を西へ西へと進んで行くと、鴻之巣一里塚に着く。地形上の理由から北塚と南塚が十六メートルほどずれているのが特徴で、両塚ともほぼ完全な形で残っている。道標は江戸へ九十三里、京都へ四十一里と記されている。

50. 御嵩より伏見へ

鴻之巣一里塚を過ぎると御嵩町に入る。旧道は津橋を通り藤木峠を越えて更に長い坂を上って行くと謡坂の物見峠に着く。左手には和宮降嫁の時に建てられた御殿跡があり、右手には展望台が建っておりここからは三百六十度のパノラマが広がり、晴れた日には御嶽、恵那山、中央アルプス、伊吹山、中山道の道筋などを望むことが出来る。右手には馬の水呑み場跡がある。峠を下って行くと左側に唄清水があり、さらに進むと謡坂集落となり、左側に一呑の清水があり和宮も賞味されたという。

道を進むと一里塚跡があり、この先左側に十本木茶屋跡がある。この先石畳の坂が六百メートルほど続く。この石畳の途中、右へ三百メートルほど入った所にマリア像があり、江戸時代この辺りに隠

れキリシタンが住んでいたという。旧道に戻り更に坂を下りて行くと、右側に耳の病を治す全国でも珍しい耳神社がある。ここからは更に急坂の西洞坂、牛の鼻かけ坂を下って行く。

やがて道は平坦になり井尻で国道二一号线に合流し、合流点の右側に平安三女流歌人として名高く、そして恋に苦しみ悩んだという和泉式部の廟所がある。中山道(当時は東山道と呼ばれていた)を旅してきた彼女はこの地で病に倒れたという。この先国道をしばらく進み、柏森で左に入る道が旧道である。

宿場に入ると右側に野呂家本陣跡がある。建坪百八十一坪、門構え、玄関付であった。ここには当時の面影を残した門や貴重な古文書などが残されている。本陣跡の一部は、御嵩町郷土館となっており、貴重な資料が展示されている。郷土館の少し先の右側に、天台宗大寺山願興寺がある。蟹薬師とも呼ばれ、創建は平安時代といわれ伝統ある名刹である。本尊の薬師如来座像を含め二十四体の国の重要文化財を持っている。中でも秘仏とされている本尊は子年の四月一日に御開帳が行われる。約四百年前に再建された本堂も国の重要文化財に指定されている。

旧道は願興寺の角を右に曲がり百メートルほど進み左折する榊形となっており、更に右折、左折すると国道二一号线に合流する。合流するとすぐ右側に鬼の首塚がある。鬼岩に住んでいた盗賊関の太郎の首を都に運ぶ途中桶から首が出て動こうとしなかった。やむをえず首塚を建てて供養したという。首から上の病に効き目があるという。鬼人関の太郎が福神として蘇り、厄払いをするという節分の祭りでは、福を運ぶのが鬼で

あるため「鬼は内福は内」という珍しい掛け声
で豆撒きを行うそうである。

国道を進んで行くと顔戸に入るが、ここから
左に入り名鉄線顔戸駅を越えた所に在原行平墳
がひっそりと建っている。在原行平は平安時代
の歌人で、在原業平の兄にあたる人物で、美濃
国の国司に在せられていたという説があり卿の
墳がここにある。五輪塔二基と寛保三年(一七
四三)に建てられた高さ一・五メートルの石碑が今も
残っている。「立別れいなばの山の峰に生ふるま
つとしきかば今かえりこん」の歌碑が建ってい
る。

51. 伏見より太田へ

道は国道二一号线に戻り先へ進む。顔戸橋を
越えてすぐ右に入る道が旧道で、少し進んで行
き共和中学校の所で国道二一号线に合流する。
この先名鉄八百津線を越えると伏見宿で、左側
に伏見公民館があるが、ここが本陣跡である。
公民館の前に本陣の跡と刻まれた石碑が建っ
ている。傍には東尾州領石碑も建っている。本陣
は岡田家が勤め建坪百二十坪、門構え、玄関付
であったが、嘉永元年(一八四八)の大火で焼失
しその後再建されなかった。公民館の裏側には
真宗浄覚寺があり、ここには尾張藩主徳川友光
夫妻の墓がある。

道を先に進むと右側に弘法堂があり、更にこ
の先右側には上恵土神社がある。国道二一号线
を進み太多線を越えて少し行くと住吉の信号と
なるが、国道は直進、旧道は左折する。左折し
て少し進むと右側に今渡神社、続いて臨濟宗竜
洞寺がある。この先道は右カーブ、左カーブし
て木曾川に架かる太田橋を渡って行く。太田橋

の手前左に少し入った所に弘法堂があり公園と
なっている。弘法堂の下が昔の渡船場跡である
が正確には確認出来ない。中山道三大難所の一
つ木曾川の太田の渡しは対岸の太田宿と今渡を
結んでいた。

52. 太田より鵜沼へ

太田橋を渡り左にカーブして道を進んで行く
と三叉路となるが、ここに道標が建っており、
右東京善光寺、左飛騨高山と刻まれている。こ
の先すぐ左に入る道が旧道で宿場の面影を残す
町並みを進んで行くと左側に五百年の歴史があ
る裕泉寺があり、木曾川の絶景が目前に迫り、
昔と変わらぬ溪流の瀬音を聞きながら境内を一
巡すると、播磨上人の墓をはじめ、日本ライ
ンの命名者志賀重昂地理学者の墓碑、芭蕉句碑、
北原白秋歌碑、郷土の文豪坪内逍遙歌碑など他
にも様々な石造碑が建っている。隣には太田稲
荷がある。

有名な日本ライン下り(木曾川下り)はこの地
の可児市の中の島センターから乗船する。

裕泉寺の所は枳形になっており、道は左に折
れてこの先左側に太田脇本陣の建物が残ってい
る。林家が勤めた太田脇本陣は明和六年(一七
六九)に建て替えられたもので、約二百三十年
前の建物である。格子戸に連子造りの窓、そし
て屋根の卯建、さらに門構えと玄関、いかにも
江戸時代の建物に相応しい。国指定重要文化財
となっている。脇本陣の斜め前には福田家が代々
勤めた福田家本陣跡がある。屋敷跡は住宅に変
り、全容を見ることは出来ないが街道に面した
表門は往時の面影を今に残している。この表門

は文久元年(一八六一)皇女和宮が降嫁の折、宿
泊された時建てられたという。

道を進み下町に入ると高札場跡があり、この
奥には西福寺がある。道はここで枳形になって
おり、左直角に曲り庚申堂の前を通りまた右へ
直角に曲がる。国道四一号线の下をくぐるとす
ぐ左側に、太田代官役人の子息として生まれた
文豪坪内逍遙が子供の頃よく遊んだという
虚空蔵堂がある。境内のムクノキをこよなく愛
したという。後年夫婦そろって生まれ故郷を訪
れ、ムクノキの根元で撮った記念写真が残って
いるという。この先右側にある太田小学校がそ
の太田代官所跡である。旧道はここから木曾川
沿いとなるが護岸工事で道は寸断され通行不能
である。したがって太田小学校前を通りこの先
深田町で国道二一号线に合流し、坂祝、坂倉、
勝山と進んで行く。

53. 鵜沼より加納へ

勝山に入るとまもなく正面に岩山が見えるが、
ここに推古天皇時代(五九二―六一八)に建てら
れたといわれている岩屋観音があり、岩窟内には
石像の観音様が安置されている。ここからの
溪流木曾川の眺めは絶景である。旧道はこの先
高山本線のトンネルの手前をうとう峠へ向かっ
て上って行く。長坂、乙坂を越えて頂上に至る
うとう峠は「日本ラインうぬまの森」として整
備され、名勝木曾川、名城犬山城、濃尾平野の
遠望を楽しむことが出来る。頂上付近には原形
をとどめている一里塚、平和観音、展望台など
がある。うとう峠を二キロほど下って行き国道
二一号线に合流する少し手前を右に折れて行く

道が旧道で、少し進むと三叉路に出るが、ここに道標があり、「これよりとう峠、左」と刻まれている。

道は三叉路をそのまま直進し大安寺川を渡ると宿場の中心地となり、右側に桜井本陣跡がある。本陣は桜井氏が勤めていた。建坪百七十四坪、門構え、玄関付、上段の間、二の間、三の間などの部屋があった。現在は往時を偲ばせる古い堀と、庭には尾張藩から拝領した自然石の手水鉢が残っている。本陣跡のすぐ右側に鶉沼脇本陣跡がある。脇本陣は野口家が庄屋、問屋場を兼ねて勤めていた。建坪七十五坪、門構え、玄関付きであった。野口家の祖先は関ヶ原の戦いで敗れ、討死にした西軍の名将大谷刑部吉継の三男大谷吉矩である。吉矩は難を逃れ当地の豪農野口家の世話になったという。脇本陣前には芭蕉句碑が建ち、また鶉沼宿の案内板も建っている。脇本陣の隣りには二宮神社があり、境内には古墳も残っている。

道を先に進んで行くと右側に衣装塚古墳があり、すぐ傍には空安寺がある。この先羽島に入り右側に津島神社を見ながら進んで行く。国道二一号線に合流し、高山本線を越え、更に名鉄各務原線を越え、左側の航空自衛隊岐阜基地の前を通って行く。航空自衛隊岐阜基地が終わる辺りで道は二つに分かれており、右側の道が旧道である。旧道に入るとすぐ右側に六軒一里塚跡の標柱が民家の前に建っている。

この先、左側に竹林寺、右側に神明神社、馬頭観音、日吉神社を見ながら進んで行き、突き当たりを右に曲がりすぐ左折する。突き当たり場所には、新加納一里塚の標柱と新加納の案

内板が建っている。鶉沼宿と加納宿の間は四里十丁と距離が長いので、立場と呼ばれる小休所がここ新加納に設けられていた。皇女和宮の降嫁の際にも休息所とされた所である。左に善休寺を見ながら田圃の中の道を進んで行くとやが岐阜市となる。

54. 加納より河渡へ

道は左に大きくカーブして進み少し行くと右にカーブして進む。右カーブする所の左手に神社の赤い鳥居が見える。神社は鳥居からずっと奥の方にある。この神社は天下の名将織田信長と縁が深い。信長は稲葉城を攻め落とした年にこの神社に広大な土地を寄進している。貞観二年(八六〇)の創建と伝えられ長森の鎮守であった。この火祭りは岐阜県重要無形文化財に指定されている。延宝二年(一六七四)に再建された本殿は流造り檜皮葺きで、左右一対の竜の彫刻は見事である。

道は右カーブして進むが右側に浄慶寺があり、この先すぐ右側に長森の人々に信仰されている切通観音と切通陣屋跡がある。この長森の地は戦国時代までは長森城があった所で、美濃源氏の嫡流土岐氏の居城であった。江戸時代に入り、加納藩主であり老中も勤めた安藤信成が飛地であるここに切通陣屋を置いた。今は何もなく観音堂の隅に石碑が建つのみである。

この先右側の伊豆神社、貞宝寺、誓賢寺を見ながら進んで行くと細畑となり、名鉄細畑駅の少し先に細畑一里塚が一对で見られる。細畑一里塚は慶長九年(一六〇四)に造られた。東方の鶉沼宿から三里十四丁(約十三・三キロメートル)西方

の加納宿まで三十丁(約三・三キロメートル)の位置にある。町中に現存する一里塚は貴重な存在で、両塚とも榎が茂り、一対で見られるのは珍しく、現存する貴重な史跡である。

この先すぐ左側に、地藏堂があり、ここには「伊勢名古屋近道笠松爪一里」の道標がある。道を進むと左側に八幡宮があり、この先東海道本線、名鉄線の踏切を越えると名鉄茶所駅の右側に出る。左側に薬局があるがここを左に入らず右側に関取鏡岩の碑がある。傍には「東海道いせ道、江戸木曾路、天保十一年鏡岩浜之助内建立」と刻まれた道標が建っている。

元の道に戻り、次の四つ角の少し先に加納城の鬼門除けであった八幡神社がある。この四つ角を右に曲がり荒田川を渡り二つ目の三叉路を左に曲がり、県道を横断して用水を越えると右側に加納宿東番所跡の標柱が建っている。番所跡のすぐ先を左に曲がると突き当たりが善徳寺で、寺の前を右に曲がり広い道を斜めに横断すると加納新町となり、左側に専福寺がある。当寺には戦国期を中心とした文書が多数残されている。その内、織田信長朱印状、豊臣秀吉朱印状、池田輝政制札状の三通が岐阜市重要文化財に指定されている。特に貴重なのは織田信長朱印状で元龜三年(一五七二)の石山本願寺攻めに際し信長から専福寺に出されたものである。内容は専福寺及びその門末が、石山本願寺への加担を禁じたもので、石山本願寺攻めの緊張状態を伝えている。

この先、加納南広江町に入ると、「左中山道、右ぎふ道」と刻まれた道標があり、ここを左折して進んで行くと左側に加納城大手門跡碑が建つ

ている。ここを右折すると加納本町となり、曲がつてすぐ左側に鰻屋の二文字屋があるが、この店の欄間に彫つてある兎は左甚五郎の作と伝えられ、その由来が店先に紹介されている。

道はこの先桜通りを横断して進んで行くが、横断する手前の右側に中山道加納宿当分本陣跡の標識が建っている。これは一時期本陣を勤めた宮田家で今も広大な屋敷に子孫が住んでいる。道を隔てた右側が本陣跡で松波家が勤めていた。遺構も資料もなく現在は中山道加納宿本陣跡の標識が建っているだけである。この先、同じく右側に脇本陣を勤めた森家があるが遺構も資料もない。

ここから右に百歩ほど入った所に歴代藩主の護神とされた加納天満宮がある。文政二年(一四四五)の創建で、祭神は菅原道真である。初代加納藩主奥平信昌正室亀姫をはじめ住民たちの信仰は厚く四月四日、五日の例祭は多いに賑わう。天満宮の少し先右側に曹洞宗久運寺があるが、今は廃寺となっている。この寺は寛文五年(一六六五)お茶壺一行の宿泊を断つたことで有名である。道はこの先栄通りを横断し、久保見町を通り右にカーブしながら東海道本線の架橋の下をくぐって行く。

55. 河渡より美江寺へ

道は本荘小学校の前を通り道なりに進んで行くが、まもなく大通(本荘岐阜線)と交差するが、ここが森屋で右側に森屋天満宮がある。この先道は左に大きくカーブしながら進んで行くが、鏡島弘法前の信号の所から右へ五百歩ほど入ると、臨濟宗乙津寺がある。開山は行基で寺を構えたのは空海で、地元の人々に鏡島の弘法さん

と呼ばれ親しまれている。本尊は千手観音立像で檜の一本造りである。藤原時代初期の作で重要文化財に指定されている。本堂に安置されている木造毘沙門天立像、木造偉駄天立像も同じく国重要文化財に指定されている。

元の道に戻り右手に神明神社、北野神社を見ながら進んで行くと、長良川に出る。昔はここに渡船場があったが今はない。長良川に架かる橋を渡り堤防沿いの道を左に八百歩ほど行くと旧道に出る。右側に馬頭観音がある。河渡宿の荷駄役の人達が天保十三年(一八四二)に道中と家内安全、五穀豊穡を祈願し愛染明王を奉祀した。地元では馬頭観音さんと仰ぎ、猿尾に六間四面の堂宇を建立した。昭和五十六年(一九八二)当地に遷座された。

この先道は右に曲がり、曲がるとすぐ右側に河渡宿碑と一里塚跡碑がある。傍らに小さな松下神社がある。河渡宿は東に長良川、西南に糸貫川、北に根尾川があり洪水の被害が絶えなかつた。特に文化十二年(一八一五)六月には未曾有の洪水にみまわれ、このままでは宿場は壊滅するとみた時の代官、松下内匠が三年がかりで宿場中を五尺あまり土盛して村を洪水から守つた。この功績に村人は松下神社を建立し、碑を刻んで感謝した。戦災で焼失し今は可愛らしい神社になってしまった。ここから左へ百歩ほど入つた所に杵築神社がある。祭神は素戔鳴尊で、その年の豊凶を占う粥づけの神事は有名である。河渡宿は明治の濃飛大震災、長良川大洪水、昭和の大空襲によって壊滅しており遺構は何も残っていない。

56. 美江寺より赤坂へ

杵築神社から道なりに進んで行くと、穂積町生津に入り道は大きく右カーブ、そして左カーブして、やがて糸貫川を渡ると本田となり、左側に文化三年(一八〇六)建立の本田地蔵堂がある。堂内には左手に宝珠、右手に錫杖を持つた高さ九十センチの石仏座像が安置されている。江戸時代ここを往来した旅人は一休みして旅の安全を祈つたと伝えられる。毎年八月二十四日には盛大な地藏祭りが行われる。かつては尾張、美濃、江州の三国素人相撲が行われていたが、現在は子供相撲に変わった。

この先右側には、本田代官所跡があるが遺構は残っていない。案内板が民家の入口に建っている。江戸時代この辺りが幕府直轄地であったため代官所が置かれていた。今も「代官跡」「御屋敷跡」「牢屋敷跡」という地所が残っている。十三代の代官川崎平右衛門定孝は寛延二年(一七四九)から十一年間在任し治水工事などの善政を行い名代官といわれた。

続いて同じく右側に高札場跡の標識が建っている。この先左側には、大正天皇行啓記念碑が田圃の中に建っている。道は五六川に架かる五六橋を渡ると巢南町美江寺となるが、この川の名前の由来は、美江寺宿が五十六番目の宿場に当たるところから名付けられたという。昔はこの辺りは松並木であったが今は全く残っていない。一軒町に入ると右側に美江寺一里塚跡の石柱が民家の前に建っているが遺構は残っていない。

道を進んで行くと右側に美江寺観世音と美江神社がある。美江寺観世音の本尊は、天文十八

年(一五四九)美濃のまむしと恐れられた斎藤道三が美江寺から岐阜に移したが、織田信長が、永禄十年(一五六七)岐阜から美江寺に戻した。現在、本尊は堂内には無く美江寺城主の末裔和田氏の蔵の中にあるという。美江神社の祭神は、熊野三社大権現で、別名権現様ともいわれている。

中山道は美江神社の所を左に直角に曲がって進むと、左側に美江寺宿本陣跡の石柱が建っているが遺構は残っていない。本陣跡裏には美江寺城跡があるが、今は小中学校の敷地となっている。かつては美濃国守護土岐氏の部将、和田氏の居城であった。道を進むと「右大垣赤坂二至ル」と刻まれた道標が建っている。ここを右に直角に曲がって進むと、右側に神明神社、そして美江寺千手観音像がある。この先巢南中学校の前を通り、そして揖斐川に架かる鷺田橋を渡ると赤坂宿となる。

57. 赤坂より垂井へ

鷺田橋を渡り堤防沿いに左へ進んで行くと、この辺りが呂久で右側に良縁寺、白鳥神社がある。この先で右に直角に曲がるとすぐ左側に即心寺、蓮生寺があり、右側には明治天皇小休所跡がある。ここから少し進んで行くと左側に小簾紅園、別名和宮公園がある。和宮降嫁の時、呂久の渡しで歌を詠まれたことを記念して造園された公園である。「おちてゆく身としりながらもみじ葉の人なつかしくこがれこそすれ」と詠まれている。毎年春と秋の二回、宮の遺徳をしのび例祭が行われる。なおこの公園には呂久渡船場跡碑が建っている。

道はこの先右にカーブしながら坂道を上っていくと大島堤の堤防に出る。中山道、墨俣道との分岐点で「左きそ路、右すのまた宿道」と刻まれた道標が建っている。この先大島町、赤花町、三津屋町を経て西之川町に入りこの辺りから、中山道七曲がりと呼ばれる道が延々とつながりながら続いている。この先近鉄養老線の踏切を渡るとすぐ左側に菅野神社がある。奈良時代の建立と伝えられこの辺りの地名は神社にちなんで菅野大門という。

左手に白山神社を見ながら進んで行くとやがて赤坂新町に入り杭瀬川に架かる赤坂大橋を渡ると赤坂の中心街となる。赤坂大橋を渡るとすぐ右側が杭瀬川水運の赤坂港跡である。杭瀬川はかつては揖斐川本流であったが、享禄三年(一五三〇)の大洪水によって現在の流路となった。豊富な水量を利用した舟運は、江戸、明治を通じて最盛期で約五百隻が行き来していたという。今は史跡赤坂港跡碑と常夜灯が往時を偲ばせてくれる。

この先の交差点が四ツ辻で、天和二年(一六八二)に作られた常夜灯の道標と赤坂宿の案内板が建っている。ここは北に向かう谷汲巡礼街道と南に向かう伊勢に通ずる養老街道の起点である。東西に連なる街筋には本陣、脇本陣をはじめ旅籠屋十七軒と商家が軒を並べて繁盛していた。道を少し進んで行くと左側に赤坂本陣公園があるが、ここが本陣跡で本陣跡の石柱と和宮降嫁碑が建っている。この先すぐ左側に榎屋旅館があるが、ここが昔の脇本陣であり書院、上段の間が残っている。

この辺りの右手奥には、八王子神社、秋葉神

社、子安神社、金生山神社、妙法寺、観音寺などの神社仏閣が集中している。道の左手奥には正安寺があり、さらにこの奥にはお茶屋敷跡がある。ここは慶長九年(一六〇四)徳川家康が織田信長の造営した岐阜城御殿を移築して造った將軍専用の休泊所跡である。お茶屋敷は中山道のほぼ四里毎に設置、現在残っているのはここだけで、当時の城郭を偲ぶ土塁や空壕が残っている。現在は東海一の牡丹園となっておりシーズンには多くの人が訪れる。

道は西濃鉄道の踏切りを渡り右手に如来寺を見ながら東海道本線を越えると、青墓町に入る。右手一体が国分寺跡で、奥まったところに歴史民俗資料館があり、さらにこの奥には美濃国分寺がある。ここには国重要文化財の木造薬師如来座像が安置されている。元の道に戻り県道大垣関ヶ原線を越えて進んで行くと、右側に春日局ゆかりの教覚寺があり、この先右側に一里塚跡がある。道はやがて相川橋にさしかかり垂井の町となる。

58. 垂井より関ヶ原へ

相川橋の手前が中山道と美濃路の追分、宝永六年(一七〇九)建立の道標「右東海道大垣みち、左木曾街道たにくみみち」が建っている。美濃路は中山道から東海道へ通ずる脇街道で、ここから大垣、墨俣、起、萩原、稲葉、清洲、名古屋を経て東海道の宮宿(熱田)に至る道であった。かつては戦国街道とも呼ばれた。

相川橋を渡るとすぐ左側に東見附跡があり、道はすぐ右折、突き当たりが旅籠屋亀丸屋で今も旅館を営んでいる。鉄砲窓、細格子、欄間、

上段の間などが今も残っている。ここから左手に百ほど路地を入って行くと、紙塚がある。美濃和紙発祥の地といわれる官設紙漉き場の跡で、紙漉きの技術はここから揖斐川、板取川水系の地方に伝播していった。ここには紙屋の守護神「紙屋明神」が祀られている。

元の道に戻り亀丸屋の所を左鍵の手に曲り少し進むと、左側に南宮大社の大鳥居がある。高さ二十一メートルの鉄製の大鳥居で東海一のスケールを誇っている。鳥居をくぐって左へ百五十メートルほど入ると岐阜県名水五十選に指定されている垂井の泉がある。垂井の地名の由来ともなった泉で、県指定天然記念物の大櫓の根元から現在も水が湧き出ている。古代から旅人が歌や絵に憩いの場に、又住民の水資源として利用されてきた。芭蕉も元禄四年(一六九二)「葱白く洗いあげたる寒さかな」と詠んだ由緒ある泉である。

南宮大社はここから二キロメートルほど南に入った所にある。祭神は金山毘古神で、美濃国一の宮として、また全国の鉾山、金属業の総本山として、今も深い信仰を集めている。慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の合戦で社殿の全てを焼失したが、寛永十九年(一六四二)、徳川三代將軍家光が再建した。境内には本殿、拜殿、楼門など、朱塗りの華麗な姿を並べ、江戸時代の神社建築の代表的な遺構十五棟が、国の重要文化財に指定されている。年間を通じて大小五十余の祭典が行われ、五月五日の例大祭、十一月八日の金山祭(ふいご祭り)は特に有名である。

元の道に戻り少し行くと左側に脇本陣跡そして問屋場があり、問屋場は金岩家が勤めていた。脇本陣の玄関と門は、この先の右側にある本陣

寺に移されている。ここは高札場跡でもあり、また明治天皇御小休所跡でもあり、明治天皇垂井御小休所の石柱が建っている。道はこの先右カーブしながら進んで行くと西の入口の西見附となり、町並みはここで終わっている。

この先、東海道本線、国道二一号线を越えて進んで行き、日守に入ると垂井一里塚があり、南塚はほぼ完全な形で残っている。樹齢百数十年といわれる山桜の古木が残っており春には白い花を咲かせる。中山道にある一里塚のうちで国指定史跡になっているのは東京の志村一里塚とここだけである。なお中山道から少しはずれるが五キロメートルほど北に入ると豊臣秀吉の名軍師であった竹中半兵衛の嫡男重門の陣屋跡があり櫓門、石垣、壕、土塁などが昔のまま残っている。元の道に戻り、垂井一里塚を後にして日守西信号の所で国道二一号线、そして東海道本線を斜めに横切って行くと関ヶ原町野上に着く。

59 関ヶ原より今須へ

野上に入るとすぐ右側に「これより中山道、関ヶ原宿、野上松並木、関ヶ原町」の標識が建っている。この地は天下分け目の戦いが繰り広げられた所で古くは天武天皇(大海皇子)と弘文天皇(大友皇子)が戦った壬申の乱(六七二)そして徳川と豊臣が戦った関ヶ原の合戦(一六〇〇)である。

野上松並木を進んで行くと、左側に行き倒れを祀った六部地藏があり、ここから少し行くと左側に、関ヶ原の合戦で東軍が最初に陣を置いた桃配山が見えてくる。道沿いに陣跡の案内板が建っている。家康は壬申の乱の時、大海皇子が桃を配ったという言い伝えにちなんで、戦

勝祈願に桃を配ったといわれている。

旧道はやがて国道二一号线と合流し、そのまま進んで行くと右側に若宮神社そして法忍寺がある。この先関ヶ原町駅前の方が伊勢街道との分岐点で、この先役場の所が北陸道との分岐点で、三街道が交差し宿場は大変な賑わいをみせていたそうである。役場の前が脇本陣跡である。脇本陣は相川家が勤め、建坪七十九坪、門構え、玄関付であった。現在中山道に面して脇門が残っている。臨濟宗の名僧といわれた至道無難禅師はここで生まれている。

伊勢街道を少し入ると本田忠勝陣跡がある。北陸道を入って行くと、すぐ右側に八幡神社があり境内には関ヶ原の合戦の本陣にあった関ヶ原本陣スタジイがあり、県指定天然記念物となっている。北陸道をさらに進んで行き、東海道本線を越えると、右側に東首塚がある。慶長五年(一六〇〇)九月十五日関ヶ原の合戦が終わると徳川家康は部下が取ってきた首を実検して東と西の二ヶ所に埋めた。ここは東首塚で関ヶ原の戦い直後にこの地の領主竹中氏が造ったものである。ちなみに西首塚は宿場はずれの中山道沿いにある。多くの人が通る街道沿いに首塚を造ったのは戦乱の恐ろしさを人々に知らせるためであるといわれている。

東首塚の裏手に井伊直政陣跡がある。北陸道を先に進むと、まもなく徳川家康最後陣があり「史跡関ヶ原古戦場徳川家康最後陣」の碑が建っている。家康は合戦がたけなわになると桃配山からここ陣場野に陣を置き最後まで指揮を取り勝利後の首実検もここでやっている。傍には歴史民族資料館があり、関ヶ原合戦の資料がたく

さん展示されている。ここから北の方角に笹尾山があり、ここに石田三成陣跡がある。この辺り山側に西軍、平地側に東軍が陣を敷いていた。元の道に戻り国道二一号线を進んで行くと、右側に円竜寺があり、門前には明治天皇御膳水の碑が建っている。道を先に進むと右側に前述した西首塚があり、ここから三百^ヤほど行くと「左旧中山道」の石柱が建っている。旧中山道を進んで行くと左手の森の中に不破関跡がある。壬申の乱(六七二)後、天武天皇が東国に対する軍事的防衛基地としてここに設置した。ここには、関の守り神である戸佐々明神がある。

藤川を渡り坂を上り国道二一号线を横断し、集落に入るとすぐ右側に源義朝の妻常磐御前の墓がある。常磐御前は、今若丸、乙若丸、牛若丸の三人の子供を生んだ。源義朝は平治の乱で敗れ、常磐御前は捕らわれ清盛の愛妾となった。牛若丸が鞍馬山を降りて東国へ走ったと聞いて、ここまで追ってきたが付近の山賊に殺されてしまった。哀れんだ土地の人がここに墓を建てたという。傍らに芭蕉句碑があり、「義朝の心に似たり秋の風」と読まれており、絶世の美人の哀れさを誘う。旧道は山の中の坂道を上って行く^と今須峠となる。

60. 今須より柏原へ

峠を越えると今須宿が一望でき、坂を下って行く^とやがて国道二一号线と交差し今須宿へと入って行く。国道と交差した左側に今須一里塚跡がある。道を少し進み、右側に入り東海道本線のガードをくぐるとすぐ曹洞宗妙応寺がある。南北朝時代鎌倉から移って今須城主となった長

江重景が、母妙応のために建てた寺である。妙応おばあさんが使ったという大きい升と、小さい升が寺の宝になっている。この升が今須の地名の由来といわれている。年貢取立てには大升、米を貸す時には小升を用いた。即ち異升(います)が変じて今須(います)となったという。境内には大きな鬼瓦が展示されている。

この先道の左側には本陣、脇本陣、右側には問屋場があったが、本陣、脇本陣の遺構は残っていないが、問屋場山崎家が昔のままの姿で残っている。左側の真宗寺、八幡神社を見ながら進んで行くと、西のはずれには大阪の河内屋が寄進した常夜灯がある。大阪の問屋河内屋が荷を失い金比羅さんに問うたところ、今須にあることが判明、そのお礼としてこの地に建てたものである。

この先が伝説「車返し」の坂」で、文明元年(一四六九)京の二条良基は不破関が荒れはてて屋根のひさしから漏れる月の眺めが風流であると聞き、ここまでやって来たところ、地元の人^が関の屋根は葺き替えられたので情緒はなくなるといわれ、ここで牛車を引き返したという。記念碑と地蔵堂がある。旧道はここで国道二一号线、東海道本線を横断し左カーブすると近江国(滋賀県)となる。

61. 柏原より醒井へ

国境には「美濃国、近江国」の標識が道案内になっている。ここから少し進んだ所の右側に「寝物語りの里」の石碑が建っている。国境に人家が小溝を隔てて接するので、両国の者が寝ながら壁越しに話あえる所からこの名が生じたという。

道は楓並木が続き、東海道本線の踏切を渡り

右折するとすぐ右手に、照手姫笠地蔵が祀られている。これは常陸の国の城主小栗判官助重が毒酒を飲まされ危篤になった時、愛妾の照手姫が地蔵に笠をかぶせて病氣平癒を祈ったことから笠地蔵と呼ばれるようになった。小栗判官は熊野の湯で全快したという。

道はこの先、右手に竜宝寺跡、八幡神社を見ながら進み、柏原駅前を過ぎると右側に郵便局があり、その隣が脇本陣跡、さらにその隣が問屋場跡で、ここに柏原宿の案内板が建っている。問屋場跡の隣りが本陣跡で、すぐ脇が高札場跡である。問屋場跡の裏手が西来寺である。この先、秋葉山常夜灯の建つ市場川橋を渡ると、左側に伊吹堂亀屋左京家があり、もぐさの販売と茶店、旅籠屋を営んでいた。店の中には「せつたいやすみ所」という札が掛かっている。

この先、右側の日枝神社、左側の「やくし道標」を通り過ぎると、右側に柏原御殿跡がある。御茶屋御殿とも呼ばれ元和九年(一六二二)將軍の宿泊休憩所として建てられた。元禄二年(一六八九)の廃止まで記録によれば十四回利用された。屋敷跡に残る古井戸と小字名「御茶屋」が名残をとどめている。

この先、左側には加藤家郷宿跡がある。柏原宿で現存する一軒の貴重な江戸時代に建てられた加藤家である。郷宿とは脇本陣と旅籠屋の間、ぐらいいに位置づけされる宿泊所である。武士や公用で旅する庄屋などが利用したという。中井川を渡ると一里塚跡があるが遺構は残っていない。ここから千五百^ヤほど進むと柏原宿西見附跡がある。道は長沢をすぎ梓川を渡ると国道二一号线に合流する。

62・醒井より番場へ

国道二一号线を少し進み一色信号の手前「めしや山形屋」の所を左に入る道が旧道で、右に八幡神社、等倫寺を見ながら進んで行くと、やがて枳形となりここを左折すると宿場となる。

宿場に入るとすぐ左側に加茂神社がある。祭神は別雷命と応神天皇で、四石の一つ埋没した影向石は、別雷命が姿を変えて出現した石といわれている。ここから湧き出る清水は宿場沿いに西へ流れて地蔵川となる。この清水が「居醒の清水」で、伊吹山の賊退治に出掛けた日本武尊が、大蛇の毒を受け発熱、ここの清水で熱を冷ましたという伝説から名付けられた。四石のうち三石(腰掛石、鞍掛石、蟹石)がここにある。

醒井の地名は、居醒の清水に由来しており様々な文学にも登場している。西行は「水上に清き流れの醒井に浮世の垢をすすぎてや見ん、源実朝は「わくらばに行てもみしかさめが井のふるき清水にやどる月影」、芭蕉は「ころみに浮世すがん苔清水」と詠んでいる。また東関紀行、十六夜日記などの紀行文にも居醒の清水が登場している。

居醒の清水のすぐ先左側に尻冷やし地蔵と呼ばれている地蔵堂がある。地蔵堂の隣が本陣跡、続いて問屋場跡となっている。本陣跡は現在樋口山といつ割烹料理店になっていて関札が残っている。この先右側に手づくり醤油のヤマキ醤油屋、明治天皇行在所となった法善寺、そして了徳寺と続く。この寺の境内には、葉面にイチョウの実がなる不思議な樹齢二百年のお葉つきイチョウがあり、国天然記念物に指定されている。

地蔵川を渡るとすぐ左側に平安時代の天台僧

が水源を開いたという十王水、続いて西行ゆかりの西行水泡子塚がある。西行に恋した茶屋の娘が彼の飲み残しの茶の泡を飲んだところ、男の子が生まれた。その後このことを聞いた西行は「もしわが子ならば元の泡に帰れ」と唱えたところ、子供は泡となって消えたという。これを見た西行は五輪塔を建てて供養したという。醒井の名勝として知られる三水は、居醒の清水、十王水、西行水をさす。この辺りに六軒茶屋があつたが、今は右側に一軒のみ残っており貴重存在となっている。

63・番場より鳥居本へ

醒井宿を出てしばらく行くと、国道二一号线に合流し、すぐ丹生川を渡り三叉路を右に進むのが旧道で、樋口を通り国道二一号线を斜めに横断し、右に敬永寺を見て進むと、左側に久礼一里塚跡がある。遺構はなく自然石の石碑が建っている。江戸へ百十七里、京へ十九里の一里塚である。久礼一里塚は、右側にはとねり木、左側には榎が植えられていたそうである。

この先、道は楓林の中の曲がりくねった薄暗い道を進んで行くと、右側に番場宿の碑が建っている。ここから少し進んだ右側に脇本陣、本陣、問屋場があつたが遺構は残っていない。本陣跡には明治天皇番場御小休所と刻まれた石碑が建っている。本陣は建坪百五十六坪、門構え、玄関付であった。

ここから少し進み左へ百石ほど入った所に浄土宗蓮華寺がある。当寺は飛鳥時代、聖徳太子が創建し法降寺と称していた。建治二年(一一二七)雷火で焼失、その後弘安七年(一一八四)

一向上人が再興し、蓮華寺と改称したため一向上人をもつて開山と仰ぐこととなった。同年銘の梵鐘は国重要文化財となっている。元弘三年(一一三三)、南北朝の戦いで敗れた北朝方の六波羅探題北条仲時は南朝方に追われこの寺にて部下四百三十二人と共に自刃した。時の住職が仲時一行を弔い墓を建てた。またこの寺には、長谷川伸作の「まぶたの母」の主人公番場の忠太郎の地蔵様が長谷川伸によって建立されており、架空の人物ではあるが墓まである。

この先道なりに進んで行くと右手に北野神社がある。寛平六年(八九四)摺針峠越えをした菅原道真が座った御影石は菅公の死後、この石に触れると腹痛を起すため天満宮として祀ったといふ。やがて道は上り坂となり摺針峠へ進んで行く。

64・鳥居本より高宮へ

坂を上って行くとやがて小摺針峠を越えて中坂を右折すると、摺針峠の上り口となる。峠の頂上には江戸時代、望湖堂、臨湖堂という峠茶屋があり、名物すりは餅を食べ、琵琶湖を眺め中山道随一の遠望を楽しんだといふ。

峠の頂上から曲がりくねった坂を下りて行く国道八号線に出る。国道に出た所に「摺針峠望湖堂」と刻まれた石柱が建っている。国道八号線に入るとすぐ矢倉川を渡り、左に入る道が旧道である。この後、申し訳程度の松並木を通って行くとやがて鳥居本宿に着く。宿場に入ると右側に白壁作りの堂々たる構えの赤玉神教丸本舗(有川製薬)有川家がある。赤玉神教丸は多賀神社の神の教えによって作られたと伝えられ、店舗販売が主で道中土産として腹痛によく効く

丸薬である。宝暦年間(一七五一〜一七六六)に建てられた屋敷には、応接門、上段の間があり、明治天皇行幸小休所にもなっている。

道はここで櫛形となっており、左に曲がった辺りに大倉屋、四つ目屋などの旅籠屋があったが遺構は残っていない。右側には「本家合羽所木綿屋嘉右衛門」の看板が掛っており、かつては当宿の名産品の両合羽が作られていた。合羽はポルトガル語のCAPAの当て字である。中山道は木曾路をひかえ雨量多く鳥居本合羽は繁盛していた。最盛期には十七軒の店があつた。現在元合羽屋の建物があるのは二軒だけでその内の一つが木綿屋である。

木綿屋の隣が脇本陣高橋家跡、向かい側が本陣寺村家跡であるが、遺構は残っていない。道を進むと右側に浄土真宗専宗寺がある。寺の由緒記に鳥居本宿の成立が出ている。「その昔百々村、西法寺村、上矢倉村、三ヶ村、四ヶ村一続きとして鳥居本と成る」とある。この先右側に「右彦根道左中山道京いせ」と刻まれている道標が建っている。この道は江戸寛永年間以降、朝鮮通信使の通行道となり、朝鮮人街道と呼ばれるようになった。鳥居本宿から琵琶湖寄りの道約四十キロメートルを中山道と平行して走り、守山宿の手前で中山道に合流する街道である。

65. 高宮より愛知川へ

鳥居本宿を出て小野の集落を過ぎると、左側に小野小町塚がある。ここは小野小町の出生地といわれているが真偽のほどは判らない。この先旧道を左カーブして進むと、右側に八幡神社があり、祭神は聖徳太子で境内には芭蕉昼寝塚

があり「ひるかおにひるねせつものこのやま」という芭蕉の句が刻まれている。左側には芭蕉の高弟森川許六が老人四人と共に掘った老人井戸跡がある。

道はこの後、国道三〇六号線を越えて地藏町を通り芹川を渡ると右側に石清水八幡宮があり、さらに進み右側に鳥籠山唯称寺を見ながら、近江鉄道の踏切を渡ると高宮宿に入る。宿場に入ると右側に高宮神社があり、ここから少し進むと左側に高宮郵便局があるが、向かい側は提灯屋で、脇には多賀大社の大鳥居があり、ここが多賀大社の表参道口である。大鳥居は寛永十二年(一六三五)の建立で、高さは八・二メートルあり鳥居の横には常夜灯と「これより多賀道三十丁」と書かれた道標が建っている。三ヶ村先にある多賀大社の祭神は、伊弉諾尊、伊弉冉尊の夫婦神で、「お伊勢参らばお多賀へ参れお伊勢お多賀の子でござる」と歌われ「お多賀さん」と親しまれ延命長寿、縁結びの神として多くの参詣者が訪れる。名物はオタマジャクシの語源となつた多賀杓子と糸きり餅である。

元の道に戻り少し行くと、右側に芭蕉ゆかりの紙子塚がある。貞享元年(一六八四)の冬、縁あつて小林家に一泊した芭蕉は、自分が横になっている姿を描いて「たのむぞよ酒なき夜の古紙子」と詠んだ。紙子とは紙で作った衣服のことだ、小林家は新しい紙子羽織を芭蕉に贈り、その後庭に塚を作り古い紙子を収めて紙子塚と名付けた。

その先が脇本陣続いて真宗円照寺がある。境内には徳川家康が大阪の陣に出陣の時休息したという腰掛石がある。また明治天皇巡幸の際、

宿泊された所でもある。円照寺の向かい側には小林本陣跡があり今も表門が残っている。道を進んで行くとやがて犬上川に架かる高宮橋となる。この橋は別名無賃橋とも呼ばれ彦根藩が近江商人に命じ募金を集めさせ天保三年(一八三二)に建立し旅人に無料で開放させた。橋の袂には無賃橋地藏尊が祀つてある。

66. 愛知川より武佐へ

高宮橋を渡り法土町を通り葛籠町に入ると、街道の名残の松並木がしばらく続き田圃の中の道を進んで行くと出町となり、四十九院に入ると右側に阿自岐神社の鳥居がある。左側には唯念寺がある。この先左側に豊郷小学校がある。昭和十二年(一九三七)に建てられ当時東洋一といわれた校舎がある。道は石畑に入るが、ここは高宮と愛知川の間で一里塚跡があり一里塚の郷、石畑と刻まれた石柱が建っている。

この先左側には伊藤忠の創始者伊藤忠兵衛の生家がある。生家は「紅長」の屋号で繊維製品の小売業を営んでいた。忠兵衛は十七歳の時、近江布を持つて西日本へ行商に行き伊藤忠の大商社を築いた。直ぐ傍のくれなゐ園には記念碑が建っている。

さらに進んで行くと右側に豊会館(又十屋敷)がある。松前に漁場を開き回船業も営んでいた豪商藤野喜兵衛の旧宅を資料館として公開しており、豪壮な庭園なども残されている。又十は藤野家の屋号であり、この先にある千樹寺の二度の再建はこの藤野家によるものである。当会館前には一里塚跡がある。その千樹寺は、この先右側にあり、臨濟宗の寺で俗に観音堂とも呼

ばれている。寺は信長の兵火で焼失したが、藤野太郎右衛門によって再建された。落慶法要の際、時の住職根与上人は経文に節をつけて唄い、群衆に踊らせた。その後、毎年七月十五日に盆踊りを催したのが江州音頭の起源といわれている。寺の前に江州音頭発祥地の碑が建っている。道は不飲川に架かる歌詰橋を渡り石橋、沓掛を通り中宿に入ると和菓子屋が並んでおり、この先左側にポケットパークという小さな公園があるが、ここには全国でも珍しい黒ポストが設置されている。明治四年(一八七二)に作られたものと同じ型で、「このポストは他のポスト同様に取り集めを行いますのでご利用ください、愛知川郵便局」と説明書きがあるのがおもしろい。ここからが宿場の中心となり昔の面影が残っている。右側には麻織物の商社で今は倉庫になっているユニックス、その隣は八幡神社で、ここが高札場跡である。この先が脇本陣跡である。左側には提灯屋、赤かぶら漬で有名なマルマタ屋、そして老舗の和菓子の小松屋がある。

この先、左側には格調高い門構えの料亭竹平樓がある。江戸時代には旅籠「竹の子屋」として繁盛していた。明治天皇巡幸の小休所となり、座敷には玉座が保存されている。外観も素晴らしいが、小堀遠州作の庭園を眺めながらの日本料理を楽しむのは格別である。竹平樓を出て、に架かる不飲橋を渡ると国道八号線に合流し、合流点の右側に一里塚跡がある。国道をしばらく進み愛知川、不飲川に架かる御幸橋を渡ると梁瀬となり、左に入る道が旧道である。旧道を進んで行くと中村となり常夜灯の所を右折する。

67 武佐より守山へ

常夜灯から小幡に入り近江鉄道五個荘駅前の所が御代参街道との分岐点で左側に道標が建っており、「左いせ、ひの、八日市みち、右京みち」と刻まれている。この先道は三叉路となり右折、続いて左折して位田、三俣と通り石塚の所で国道八号線を斜めに横切って進んで行く。交差点の所に近江商人が天秤棒を担いだ銅像が建っており台石に「天秤の里、旧中山道」と刻まれている。この辺りが近江商人発祥の地として知られ、川並、金堂周辺には蔵や舟板堀に囲まれた豪商の邸宅が残っている。金堂の作家、外村繁の生家は近江商人屋敷として一般公開されている。

この先旧道は狭くなり、清水鼻に入りすぐ左折して国道八号線に合流する。国道を進み、すぐ左折する道が旧道でこの辺りが東老蘇で、右手奥に老蘇の森と奥石神社がある。当社は、鎌大明神、竈大明神ともいわれ、祭神は天児屋根命一座で、安産の神様として親しまれている。本殿は三間社流造り檜皮葺きで、重要な文化財となっている。鬱蒼とした老蘇の森のこの地一帯は、地裂けて水湧いてとても人が住める所ではなかったが、人皇七代孝靈天皇の御代、住人であった石辺大連という翁が神助を仰ぎ、松、杉、檜の苗木を植えたところたちまちに大森林になったという。この翁は長寿だったので老蘇の森といわれるようになった。

道は西老蘇に入ると右側に、奥石神社の若宮である鎌若宮神社があり、その先に東光寺がある。西生来に入ると右側に西福寺、牟佐神社があり、神社の前が高札場跡で、この隣が平尾家役人宅である。続いて大橋家役人宅があり、四

百年前の建物である。役人であると同時に米や油を売っていた商家でもある。役人としての仕事は伝馬所などの取締役として勤務していたという。大橋家の隣が番所跡で、この斜め前の武佐郵便局の所が武佐本陣跡である。本陣は下川家が勤め建坪二百六十二坪、門構え、玄関付であった。本陣跡の一部は武佐郵便局となり、下川家の門は昔の本陣門である。

この先信号の所が八風街道との分岐点で、八日市から永源寺、八風峠へ至る街道で、現在は国道四二一号線がほぼ踏襲している。左側に文政四年(一八二二)建立の道標が建っており、「いせみな口、ひの、八日市道」と刻まれている。この先すぐ左側に松平周防守陣屋跡がある。道の左手奥には山があり麓には長光寺があるが、源平盛衰記や太平記に登場する武佐寺のことである。聖徳太子ゆかりの寺で付近には白鳳、平安時代の遺跡が存在する。

道はこの先、近江鉄道武佐駅を左に見ながら進むと西宿で国道八号線と合流し、工業団地の道の道を進んで行くと、六枚橋に至る。旧道はここで左折し、少し進み象印工場の所を右折する。この先右側に住蓮坊の首洗いの池があり、この先馬淵で国道八号線に合流する。合流すると、すぐ右側に八幡神社があり、旧道はこの先馬淵信号の所で右に入り、さらに進んで行くと、東横関に入り日野川に着く。旧道には橋が架かっていないので、左に曲がって国道八号線に架かる横関橋を渡り、すぐ右に曲がり再び狭い旧道を進んで行く。西横関で国道八号線に合流し善光寺川を渡る。

68・守山より草津へ

善光寺川を渡り左に入る道が旧道で、ここを
進んで行く鏡口信号でまた国道八号線に合流
する。この辺りが鏡宿で、中世の宿駅として栄
えた所である。源頼朝、源義経、足利尊氏など
が宿泊したり宿陣したりしている。鏡口信号の
すぐ右側が、旅籠屋の寺田屋跡で、その隣に真
言宗真照寺があり、この先すぐ源義経宿泊地跡
があり、ここが本陣跡である。同じく右側に鏡
神社がある。祭神は天日槍あめのひやりで、本殿は南北朝時
代に造営されたもので国重要文化財に指定され
ている。牛若丸が鞍馬山から降りて奥州に行く
途中、鏡神社で元服したと伝えられる。境内に
ある「烏帽子掛松」は元服の際帽子を掛けたと
いう伝説による。神社の下に元服の池があり、
義経元服の池碑が建っている。

ここから少し進んで左に入る道が旧道で、し
ばらく進んで行くと再び国道八号線に合流する。
合流地点のところを左に二百メートルほど入ると、平
宗盛終焉の地がある。壇ノ浦の戦いで義経に捕
らえられた平宗盛親子が、この地で首を斬られ
た。首を洗った池は、蛙が泣かなくなり、
蛙不鳴池と呼ばれ、池の傍には平宗盛終焉の地
碑が建っている。国道八号線に戻って善光寺川
を渡り右に入る道が旧道で、ここをしばらく進
んで行き魚万楼の所で再び国道に合流する。

ここから少し戻った左手奥まった所に大笹原
神社がある。現在の本殿は、応永二十一年(一
四一四)馬淵定信が再建したもので国宝に指定
されている。境内社の篠原神社は「餅の宮」と
もい、鏡餅の元祖である。国道に戻り篠原堤
を通り小堤で右に入る細い道が旧道で、新家棟

川を渡るとこの先左側には、大岩山古墳群の一
つである青山・円山古墳があり、家型石棺が埋
葬されている。

小篠原を通り野洲病院前を過ぎると、すぐ朝
鮮人街道分岐点となり、左に進む道が旧中山道
である。朝鮮人街道は、下街道、安土街道とも
呼ばれ、琵琶湖寄りの道を中山道と平行して走
り、鳥居本で合流する。江戸時代、將軍の上洛
道となり、寛永以降は朝鮮使節の常道となった。
道標はこの先の蓮照寺境内に移設されている。
中山道を進んで行くと、すぐ左側に行事神社、
そして背くらべ地藏があり、この先右側には前
述の蓮照寺がある。

先に進むと右側に十輪院があり、ここは旅人
の休憩所として親しまれていた。裏手には芭蕉
句碑がある。野洲晒やぶせで有名な野洲川を渡ると守
山市となる。川を渡ると右側に馬路石辺神社が
あり、さらに進んで行くと左側に旅の安全を祈
願する帆柱観音を祀る慈眼寺がある。この先左
側に酒蔵宇野本家があり、今も醸造している。
銘柄は「英爵」である。この先左側に甲屋跡が
ある。甲屋は元本陣跡で謡曲「望月」の舞台と
なった宿屋である。この辺りの街道筋は江戸時
代の面影を残す古い家が点在しており、今でも宿
場情緒を楽しませてくれる。

道を進んで行くと三叉路に至り、ここが高札
場跡で、道標が建っており、左大阪、右京と記
されている。右の道が旧中山道で、進んで行く
と右側に延暦寺の東を守る寺として建てられた
東門院がある。境内にある鎌倉時代の三基の石
塔は重要文化財である。吉川を渡ると守山宿の
加宿であった今宿に入り、商店街を抜けると左

側に今宿一里塚跡がある。江戸から五百キロメ
地点で東側のみ榎が残っている。滋賀県で現存
する一里塚はここだけである。

この先、閻魔堂に入ると右側に十王寺がある
が、ここは小野篁おののたかむらが閻魔王と十王を祀ったと伝
えられ、村の名前にもなっている。この先、二
町を過ぎると栗東町に到達する。栗東町に入る
とすぐ左側に大宝神社がある。大宝年間(七〇
一〜七〇四)の創建といわれ大鳥居をくぐると
参道が続く。境内社追来神社本殿と木造狛犬一
対は鎌倉時代に作られたもので国重要文化財に
指定されている。境内には芭蕉がこの地織村を
詠んだ句「へそむらの麦また青し春のくれ」の句
碑が鳥居左手に建っている。

道はこの先、栗東駅前を通り笹川に入るとす
ぐ左に曲がり琵琶湖線と草津線が合流する地点
の線路の下をくぐり、歩行者専用の民家の中の
細い道を通って行く。陸橋の下をくぐるとすぐ
左側に伊砂砂神社がある。祭神は、素戔鳴尊すさののりのみこと、
寒川比女命さむかひのめのみことで、雨乞いに靈験あらたかといわれ
ている。本殿は室町時代に作られたもので国重
要文化財に指定されている。

この先右側に蓮如ゆかりの光明寺を見ながら
古い家が立ち並ぶ宿場の面影が残る旧道を進ん
で行き、草津駅前を通り商店街の「きたなかア
ベニュー」に入って行く。商店街の中心から少
し左に入った所に、覚善寺があり、ここの門前
には東海道、中山道の分岐を示す道標がある。
商店街をさらに進んで行くと、天井川となって
いる草津川に至る。天井川の真下のトンネルを
くぐるとここが東海道、中山道の追分で、左側
に「右東海道いせみち、左中山道美のじ」と彫ら

れた火袋付の追分道標が建っている。中山道は、ここから先は東海道と同じ道筋で、大津を経て京都三條までとなる。

69・草津より大津へ

火袋付の道標の向かい側が田中本陣跡で、現存している五街道最大級の本陣で国指定史跡となっている。本陣屋敷は敷地千四百二十坪、建坪四百六十八坪、部屋数は三十九室を有していた。屋敷内には表門、住居台所、湯殿、御除ケ門他の建物が現存し、江戸時代の姿をほぼどめた記念物である。百八十年間に及ぶ宿帳をはじめ貴重な江戸時代の資料が残っている。

脇本陣はすべて左側にあり田中本陣向い側に大黒屋、藤屋、仙台屋と続いており、この先に九蔵本陣跡があつたが遺構はない。この先右側には草津最古のお寺の常善寺がある。天平七年(七三五)僧良弁の創建と伝えられる名刹で、慶長五年(一六〇〇)九月十五日の関ヶ原合戦に勝利した徳川家康が、上洛の途上に宿陣した草津随一の大寺であつた。時運衰退し、かつての伽藍を偲ぶことは出来ないが、現本堂に安置されている本尊木造阿弥陀如来座像と両脇土像は宋様の名品で国重要文化財指定となっている。

寺院の向かい側には問屋場跡である太田酒蔵がある。大田家は代々問屋を勤めていたが、幕府の命により隠し目付も勤めていたという。この先左手の正定寺を見ながら進んで行き志津川橋を渡るとすぐ右側に宿場第一の立木神社がある。旧草津村と旧矢倉村の氏神で、創建は神護景雲元年(七六七)と伝えられる。境内には県内最古の石造道標(旧追分道標)が移築されている。

神木のウラジロガシは推定樹齢四百年の大木で見事である。

この辺りから古い家並が続ぎ、矢倉に入ると右側に「右やばせ道、これより二十五丁」と刻まれた道標が建っている。ここから三ノ木西に行くと琵琶湖畔の矢橋に出る。道標のある所が立場茶屋跡で、名物姥ヶ餅うばがもちを売っていた。今は瓢箪を商っている瓢泉堂となっている。ここが草津宿の出入口であつた。なお姥ヶ餅屋は代替わりして国道一号线の方に店を出している。

旧道はこの先の野路の篠原で国道一号线と交差し、野路、玉川、月の輪、大江と進んで行き瀬田市民センターの所を左に曲がり、さらに進んで行き初田仏壇店の所で右に曲がり、右側の浄光寺を見ながら進んで行くとやがて突き当たりとなる。突き当たりを左に曲がりしばらく進むと神領に入り右へ曲がるのが旧道であるが、左手には建部神社がある。近江一宮として知られ、祭神は日本武尊で、源頼朝十四歳の時ここに参拝し源氏復興を祈願したといわれている。境内にある平安時代作の女神座像三体と文永七年(一一七〇)銘の石灯籠は国重要文化財指定となっている。

旧道に戻り右に曲がって進んで行くとまもなく瀬田の唐橋に着く。琵琶湖から流れ出る瀬田川に架かる橋で近江八景の一つ、瀬田の夕照の面影を残す有名な瀬田の唐橋である。瀬田川は宇治川となり、そして淀川となる。唐橋は、宇治橋、淀橋とならんで三大名橋と呼ばれ、広く知られている。橋の袂には常夜灯、石碑などが建っている。昔から「唐橋を制するものは天下を制する」といわれたように都に対する重要な

関門で多くの戦いが繰り広げられた歴史を持っている。橋の東詰には竜神社と雲住寺がある。

唐橋を渡ると鳥居川信号があり、ここを右折して左側に建っている明治天皇鳥居川小休所碑を見ながら進み京阪電鉄線、東海道本線を越えて行くと粟津となる。この近く左側の日本電気工場の裏手に木曾義仲の四天王の一人、今井兼平の墓がある。兼平は義仲が粟津の戦いで戦死したことを知りこの地で自害した。

旧東海道は粟津中学の前を通り、さらに進んで行くと突き当たりが膳所藩の南総門の番所跡で、ここから膳所藩の城下町となり、ここを左に曲がり、この先若宮八幡の所を右に曲がる。この先突き当たりを左折し、少し進んで京阪電鉄線の踏切の手前を右折するまもなく左側に膳所神社がある。この表門は膳所城の城門で慶長七年(一六〇二)の建築で重要文化財に指定されている。

道をさらに進んで行くと左側に本多家の菩提寺である縁心寺があり、続いて和田神社がある。本殿は鎌倉時代の建築で重要文化財に指定されている。道はここから左カーブして突き当たりにある響忍寺の所を右に曲がり、すぐ左に曲がり進んで行くと北総門の番所跡がある。今は普通の民家となっており跡碑が建っている。

この先馬場一丁目に入ると左側に、木曾義仲公の御墓所である義仲寺ぎちゆうじがある。義仲は北陸路に平家の大軍を打ち破つたが、従兄弟の源頼朝の妬みにあい、範頼、義経軍と戦い寿永三年(一一八四)この地で討ち死した。その後義仲の側室巴御前がここに草庵を結び供養を行った。巴御前没後、この草庵が無名庵、巴寺、木曾寺そして義仲寺と呼ばれるようになった。また当

寺には、義仲公墓の他巴御前地藏堂そして芭蕉翁墓がある。有名な「木曾殿と背中合わせの寒さかな」の句はここに泊まった時に読んだ句である。「ここを過ぎると大津の宿場となる。」

70大津より京都へ

京町、滋賀県庁前を通り市街地を進んで行く。左側に天孫神社があり、この先左側にロリア皇太子遭難の地である大津事件碑が建っている。この先が札の辻で東海道は左に曲がる。ここからが宿場の中心地で、今は車が多い坂道を少し上って行くと左側に本陣跡の案内板が建っている。

この先右側には妙見寺、そして有名な関蝉丸神社下社がある。醍醐天皇の第四皇子蝉丸を祀っている。蝉丸は盲人であったが琵琶の名人であった。小倉百人一首の一つ「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」は、蝉丸がこの逢坂の関で詠んだ歌である。さらに坂を上って京阪電鉄の下をくぐると右側に安養寺があり、旧道はこの先で国道一号線に合流する。

合流するとすぐ右側に関蝉丸神社上社がある。国道一号線は右に大きくカーブしながら上って行き、上り切った所で旧道は右に分かれるが、ここに逢坂山関跡碑と逢坂常夜灯がある。この地は京都と近江を結ぶ交通の要所で平安時代には逢坂関が設けられ、関を守る関蝉丸神社や関寺も建立され和歌などにも読まれた名所として親しまれてきた。伊勢の鈴鹿、美濃の不破とともに天下の三関といわれている。

旧道に入るとすぐ左側に鰻専門の料亭「かねよ」があり、庭内には大津絵の元祖吃り又平の小屋跡がある。右側には関蝉丸神社分社がある。

旧道を下って行くと再び国道一号線に合流し、この先左側に月心寺があり庭内には小野小町像芭蕉句碑がある。この先すぐ左に入る道が旧道でもまもなく山科の追分となり、左へ行く道が大坂道で右へ行くのが旧東海道で、こちらを進んで行き国道一号線を斜めに横断して行く。

五百元ほど進み小川を渡ると右側に六角堂があり、六地藏が祀られておりお休所となっている。この裏手には十禅寺がある。道を先に進むと国道一号線に合流し、東海道本線をくぐると右側に天智天皇陵、いわゆる大津の都跡がある。旧道はここから左に入り日岡を通りこの先で再び国道一号線に合流する。

坂を上って行き蹴上の清水跡を通りここから坂を下って南禅寺の左側を進み粟田口を過ぎるとやがて東海道の終着地京都三条大橋に着く。三条大橋は、橋の長さ五十七間二寸、幅四間一尺、本邦初の石の橋杭だそうで、天正十八年(一五九〇)秀吉の命により増田長盛が作った。東詰には高山彦九郎の座像、西詰には東海道中膝栗毛の弥次喜多像が建っている。長旅の中山道(但し草津、京都間は東海道)六十九次であったが先人が残してくれた歴史をかみしめながら古都京都でゆっくり旅の疲れを癒すのも一興であらう。

贈収賄事件の顛末

上野清太郎が、信州から東京の法律事務所に戻ると、決まって所長の岸本義一より冷かし半分の労いの言葉があった。

「お疲れさん！背中から後光が射してみえるよ！どうだ、いっそのこと信州で開業したら、人脈もできただろう。初めての仕事場で遣り甲斐あるぞ。」

「止してくださいよ。そんなに早くこの事務所から追い出さないでくださいよ。それってひよっとしてリストラですか？」

十年余の弁護士経験を積んだ上野清太郎の答えに、事務所の中に笑いがこぼれた。

「上野先生がスッカリ老練弁護士になった証拠ですよ。逆に喜ぶべきですよ。」

「いやー義雄先生には負けますよ。」

岸本法律事務所、息子の実施的ボス弁の岸本義雄に上野清太郎がお世辞を言う。事務員の澄子が、思い出したように報告した。

「上野先生！、お留守中に何度かジャーナリストの関口轍次さんという方から、お電話ありましたよ。何でも取材をしたいのですって・・・きつと信州の贈収賄事件ではないですか？お知り合いですか？」

「関口轍次？！知らないなあ・・・学生時代の友達かなー、今度電話あったら要件を聞いておいて下さい。」

「それが、要件をおっしゃらないのです。直接ご本人と逢って話したいということでした。」

「一体誰だろう？電話番号を聴いて、関口某なる人物を調べておいてくれませんか？結果を信州まで知らせて下さい。」

「承知しました。」

弁護士という商売は時には仕事柄、他人

の恨みを買うこともあり、依頼人の素性を独自に調査する機能も内部にあった。

また迂闊に弁護士個人の情報や行き先等を、他人に教えない電話対応のコツも必要だった。その辺を万事心得たベテラン事務員の澄子からの応えだった。

ここでパソコン贈収賄事件の中心を成した、昭和五十年後半以後の日本のパソコンの業界の歴史を、簡単に振り返ってみたい。

昭和四十五年代、N電気の半導体部門は既にマイクロプロセッサを開発していた。

昭和五十一年、組立式で電子工作キット的な、ワンボードマイコン「TK-80」を発売した。これが、日本最初のマイコンである。日本の黎明期には、当時パソコンと呼ばれず、マイコンと呼ばれていた。

秋葉原の店頭試販売で、学生やマニアを中心に爆発的に売れた。

米国では、既にザイログ社の「Z80」が世に出ている。昭和五十二年、大人気の米アップル社の「アップル」が、日本にも輸入され、忽ち技術者の口コミによって日本市場を席巻した。電子キットでなく、直ぐ使用可能な完成品だったからである。

N電気「PC-8001」やS電気「MZ-80」で市場を二分しながら巻き返すのは、昭和五十四年以降のことであった。

その間、マイコン市場の将来性を確信して数社が新たに参入した。

昭和五十六年、8ビットの世界が、16

ビットの世界に転換し始める。

昭和五十八年(一九八三年)、N電気の16ビット機「PC-9801」が発売されると、これ以降の改良機種が国民標準機種となっていた。

F社とP社が連合軍で参入したのも、ゲーム機メーカーがファミコンを始めて市場に投入したのも、この時期である。

他会社は、N電気「PC-9801」系と戦うために、海外では米国のIBM PC互換機路線で共同戦線を張った。

更に、32ビット、MS-DOS搭載の機種に変わるの、昭和から平成に切替る頃のことである。この頃、カバンに入れて持ち運びも意識したラップトップ(膝上の意)、ノート型パソコンの原形が出現しているが、デスクトップ(机上の意)型に比べても、何と1・5〜2倍も高かった時代があったのである。

パソコン贈収賄事件の発生は、正にこの日本の第一次パソコンブームが訪れた最中に発生している。

長野県庁土木部はもとより全国自治体としても、現在のパソコンの全員所有ニーズには程遠く、必要性は強く感じていたものの、OA機器に特別予算を付けて事務合理化のための備品を購入する習慣も余りなかった頃のことであった。

最初から、赤池主任弁護士と上野清太郎弁護士の連携は、今回のパソコン贈収賄事件において見事だった。上野清太郎は、地元の赤池主任弁護人の立場をたてながら、

知恵を振り絞った。やや年若の赤池主任弁護人が作戦を立案すると、東京から助っ人で行班と参謀の役目を勤めた。

過去の地裁での判例調査面でも抜かりなく、ある時は木曾署に飛んだり、勾留時の被疑者の青木被告と接見、青木被告の安曇野の実家に赴いたり、またある時は、東京に戻って岸本義一弁護士に指示を仰いだり、松本の支援の「きずな」発起人会との打合せと縦横無尽に駆け回り、若い赤池弁護士を盛り立て適切な助言を与え、作戦を補間しながら自ら進んで助っ人らしく行動した。時折状況を東京に報告した。

青木久男被告の40日間の松本支部勾留に続き長野地裁での勾留と、全勾留期間は230日余と意外に長かった。

捜査官榊原真二の逮捕後の取調べに対して、青木被告は頑強に罪状を否認し続けたからである。

支援する会から、二人の弁護士を通じて長野地裁の裁判長宛に保釈申請の嘆願書が六月に提出された。

保釈申請の嘆願書全文

裁判長殿

審査中の青木久男君に関する入札妨害並びにパソコン贈収賄事件についてお願いがあります。高校の同級生を中心とした、私たち「青木君を支援する会」では、現在青木君の高校や大学の同期生、及び各地域の一般住民を対象として嘆願書への署名活動を実施しております。嘆願書

を持参し、今回の事件について説明して署名をお願いする、非常に高い確率で支援と励ましの言葉を戴いております。そして一ヶ月余りの活動で既に二千八百名を越える方々から署名を戴くことができました。

特に青木君が無罪を主張しているために六ヶ月の長きに渡って勾留されていることに対しては、多くの方々から「組織ぐるみなのに一人だけ勾留されて可哀想だ」という声を耳にします。公判は今後も数ヶ月継続することを考慮すると、長期の勾留生活によって青木君の健康や精神衛生に重大な損失を招く恐れがあります。また、青木君は誰もが認める正直な人間です。決して証拠隠滅をはかったり、逃げ隠れるようなことは無いと断言できます。

裁判長におかれましては、どうかこのような事情をご高察の上、青木君に対して一日も早く保釈の許可を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

木曾福島の何処からか発せられた、匿名投書を検察が取上げること端を発した今回のパソコン贈収賄事件であった。

第一回公判以後、公判の都度毎回のよう、新聞各社も温存した情報と、捏造とは言わないまでも憶測情報を混在させながら、紙上に吐き出すように積極的に記事にした。検察の初動捜査は、本件に関して予想以上に早かった。ある筋からの意図を受けたかのように、ある目的の下に整然とである。この段階までは、地検丸山次席検事の思惑どおりであったといえる。

保釈までの署名者数は三千人弱の人員が

集まり、その後も嘆願書の署名活動は継続された。最終的に一万八千人もの人々が署名した。

青木被告は、結局第五回公判まで勾留され、終了後の七月十一日234日ぶりに自宅に戻された。裁判は、長野地裁で実に十二回の公判が継続された。

一審裁判は一年間に及んだ。
第二十九回十一月公判で一般証拠調べが終了した。

十二月第十回の公判で、検察側の論告求刑があった。翌年一月、第十一回には弁護側の最終弁論、同二月第十二回に弁護側提出の証拠調べと続き、三月に行なわれた公判で、一審判決が長野地裁で言い渡されたのである。

検察側の論告求刑懲役二年にたいして、判決は懲役一年十ヶ月(未決期間百四十日)執行猶予三年、追徴金九万五千円であった。この後、青木被告は地裁の判決を不服として公訴した。

あくまでも「無罪」を主張し、東京高裁(最高裁まで上告したのである)結局最高裁判決で一審二審支持があつて、被告人青木久男の有罪が確定した。

捜査段階で、組織的な慣行として賃金、委託料等の名目で不適切な方法で調達されたパソコン(備品台帳に未記載)の台数が、県土木部だけで六百台余りあることが浮かび上がった。

この事実は、弁護側に最初有利な証拠であった。

しかしながら、贈賄側の加藤測量会社の三人は、自社の運営上の事情でか、勾留段階で自白し罪状を認めて、恭順の姿勢をみせた。早々五月段階で執行猶予付きの有罪判決が下されたのである。

「自分達は賄賂を贈ったという認識があり、窓口の青木係長も賄賂を受取っていたと認識があつたはずだ」

と証言したのである。自白の信憑性に問題あるところであるが、この自白証言こそ検察側の待つていたもので思う壺であった。

逮捕勾留期間中、連日の厳しい取調べで、被疑者は嘘でも罪状を認めて保釈になりたいたいという気持ちになるものらしいが、この場合もそうであつたかどうかは不明である。でも過去の裁判でも、これに類した事実誤認の強制的自白誘導で、過去何度も冤罪が発生した事例があるのである。

この証言が弁護団の立場を苦しめた。贈収賄というのは、一体の裁判構成を成すものである。片方が早々と罪状を自白して認め、既に執行猶予付きであつたが、判決まで出されていたのである。手続き上現在の刑事訴訟法では、自白させるための勾留であつた。頑として罪状を自白しない青木被告の勾留期間が、長引いたのは実はそこに原因があつたよつである。

この段階に至って、検察側の有利、弁護側の不利は否めなかつた。

青木被告の無罪を主張する弁護団は、序の口段階で、支援の「きずな」も二人の弁護士も、検察側はもとより、県庁土木

部をも完全に敵に回した形となった。

県土木部は威信に賭けて攻勢に廻った。様々な謀略も駆使され、検察側の証人尋問や証拠調べに応じた。

謀略の主なるものは、新聞社への情報漏洩であった。十二回の公判の間も、何度も新聞各社は記事を書いた。

組織は常に個人に責任を押し付け、組織の名誉を守ろうとした。本来向けられるべき、長野県庁土木部に対する怒りが、何故か新聞各社によって個人の青木被告に対する怒りに転化させられようとしていたのである。事件の発端は、虚偽内容を記した一通の匿名投書が新聞社と木曾福島の出先検察区に届いたのが始まりだった。

何処からの匿名投書であったかは、新聞社と検察の情報秘匿の原則によって闇の彼方にある。

こうして、意図的に作られたパソコン贈収賄事件は誕生した。

県組織の全責任が個人の犯罪に摺り返えられ、青木被告が責めを負わされる形となった。いわば県組織の生贄ないし、スケープゴードであった。常態化し習慣化した、長野県庁官僚の悪知恵と処世術の何処も同じ澱のような「蜥蜴の尻尾切」構図が、県土木部の組織の中にも露骨に見え隠れしていたのである。

こうして、パソコン贈収賄事件の決着をみた。長野地検の丸山泰三次席検事の思惑は、ある程度まで成功したかにみえた。つまり、地検の無罪率の減少化方針である。

配下の捜査官榊原真二は、次席検事の指示に従い、赤池主任弁護士と上野清太郎弁護士と法廷闘争の場で、戦って勝利した。榊原真二の胸には、勝利の喜びは余りなかった。青木被告とその弁護団の戦い方のほうが、心情的に好感がもてたからである。

普通予定価格を漏らした位では、公務員の逮捕勾留、まして懲役刑等は在り得ないとされてきた。

公訴するには、地検や警察は贈収賄事件に絡めて捜査起訴する必要があった。争点は受領パソコン三台、賄賂性有無の被疑者の意識の問題に過ぎなかったのである。

事件に関し、丸山次席検事と榊原真二は何度も基本方針について議論した。

木曾福島建設事務所以外でも、業者側に入札価格を漏らしたり、同一手法もしくは類似手法を執って土木部内部でもパソコンを調達されていた証拠は明瞭であった。

何故遺憾めいた垂れ込み情報があった、青木被告の場合のみ、事件として表面に出さなければならぬのか？

丸山次席検事の答えは、「一罰百戒」一言であった。一審判決文でも、この点が指摘されていた。

正規の購入費以外の方法でパソコンを調達する方法が常態化し、従来から入札予定価格を教える悪慣行があったことは否定できない。従来の土木行政の不透明さが背景にある。土木部の体質をもって、被告の行為は正当化できない。

最初の段階では、捜査官の榊原真二は、

匿名垂れ込みを元に、木曾福島区事務官が書いた一枚の簡単な報告書を確かに読んだ。まさかこの垂れ込み情報で、高裁を経て最高裁まで行く、二年越しの事件に発展しようとは思ってもみなかったであろう。

現に、公訴が始まると意図した検察側作りが成功し、贈賄側三人はあつけなく早期に落ちて地裁段階で自白して罪を認めた。

勝利の要因はここにあったのだと喜ぶべきところ、逆に榊原真二は、後で振り返ると、ここに判断を誤らせる落とし穴があったと自戒するのである。

元の上司の首席捜査官の中田晋ならどう戦ったであろうか？と榊原真二はふと思つた。

ただ丸山次席検事の本当の狙い、県庁幹部級と議員にまで波及させたいという功名心、東京地検特捜部時代の同僚の演じた派手な逮捕劇は、結局丸山次席の地検時代には演じられなかったのである。

黙っていたが頑強な県庁のある筋の抵抗にあつて、達成できなかった。

この辺が、長野地検丸山次席検事の弱さであり限界といおうか、東京と信州の風土の違いといおうか・・・今迄、東京地検特捜部で大した成果を上げられずに、定年間に長野地検に左遷させられた丸山次席の力の無さ信念の無さ、本人限界を如実に物語るものであった。

被告人青木久男は、逮捕後二年余の係争で、無罪を主張し、地裁→高裁→最高裁にまで控訴した。最高裁での判決が棄却となり、青木被告の有罪が正式に決まった。

係争の最中は、休職扱いであったが、最高裁の棄却判決により、一審二審が支持されるや、青木被告は懲戒免職となったと聞いている。

些細な事件であるにも拘らず、青木被告は、態々最高裁に控訴までして何故争ったのか。

生まれも育ちも安曇野の被告人青木久男は、重要な問題提起を司法の場を借りて、捨身で試みたのではあるまいか。

そんな疑問すら湧いてくる。

関係者誰もがこの程度の事件なら地裁もしくは、精々高裁で決着すると思っていたはずである。

逮捕当初、青木久男が、部下を庇って逮捕されたらしいという噂が県土木部内に急速に広まっていた。

然も、逮捕される数日前、十一月の変な時期に木曾福島建設事務所の計画調査で人事異動があった。

青木被告の部下が突然移動した。

欠員の玉突き人事ではなかった。

二つの噂は出先の木曾福島地方建設事務所から、湧上るように県庁に届いた。

上司や周辺関係者は、その噂を否定するのにやっきとなった。自らの保身で体面を保つためにも、綱紀粛正を図る意味でも、部下の引締めが必要だった。

二度目の地検の自宅捜査を受け、書類を押収された県土木部の組織関係者にとつては、早く意図して忘れたいと願っていた事件であったのであろう。

世論の作られた声「県の職員の贈収賄」の暴露新聞記事に、誰も口を閉ざして語りたがらなかった。特に、青木被告人の直属の元上司当時課長、現市川英男土木部長は、あの事件を忘れないと願っていた一人であったに違いない。

あの時青木久男に、新卒の技術職員を配したのは拙かったと、悔いが今でも残っていたからである。

何故なら、起訴と同時に始まった青木久男被告の無罪を主張して始まった、友人や市民を中心とした署名嘆願書や電話抗議の類が、県土木部にまでおよんできたからである。

上野清太郎は、中央本線木曾福島への普通列車の車中から窓外の景色を眺めていた。裁判は弁護側の敗訴であったが、今回の贈収賄事件の助っ人弁護経験で、それなりに弁護士としての反省点もあり、学んだ点多かった。

臆気な検察や警察の底無しの暗部を、改めて覗き込んだような気がした。

パソコン贈収賄事件のために、常時松本や長野に滞在したわけではなく、その都度特急あずさで信州を往復していたが、上野清太郎には、未だ信州でやり残した自分の仕事木曾署訪問があった。

出かけた当初、上野清太郎の方が年長で、実質場数も踏んでいたが、後輩を立てて赤池主任弁護人の手足となって補佐をした。

信州での裁判という初仕事で赤池弁護士を始め、長野の弁護士会の会長に世話になった。結果は敗訴であったので、その会長期

待に応えられなかった悔いが残った。

安曇野の実家に青木被告本人と面談しにいった記憶は無論、高校同期を中心にして結成された、「きずなの輪」という支援団体、その発起人会で出逢った、正義感に溢れた一人一人の顔を思い出していた。

パソコン事件の新聞社の過剰報道が、逆に作られた世論に應えるかのように、捜査陣が追い詰められたのではあるまいか？

木曾福島駅に至る駅名が一つ一つ過ぎる度に、年若の一途な赤池弁護士の悲憤口外する言葉を想い出していた。

「私は、操作当局の問題というより、日本社会全体の問題だと思えます。良識や叡智を持った人々はとも少なくなっている。大衆という神にも等しい存在を代表すると見せかけたマスコミによる世論操作があるだけです。今の社会は世論や大衆が正しいという大衆迎合のふりをした言葉に満ちているのです。そう言っている県庁や新聞社の人達が、実は大衆を苛め、馬鹿にしているというインチキ社会なのです。青木君の捜査に延べ何百人の警察や検察を動員し、億単位の金が使われているのです。警察や検察も一旦方針が決定すると、それに向けて徹底して努力し軌道修正はなされないものなのです。」

赤池弁護士は、次なる自分の抱えている傷害罪の案件にも触れながら、上野清太郎に助言を求めてきた。

上野清太郎は、特に塩尻駅を過ぎた辺りから何故か無力感とも違う、満たされない

想いに駆られていた。弁護士の仕事は果たして良い職業であろうかと。じっくり弁護士の仕事を、こうして振返ることが出来る純行に乘車したのはやはり正解であったと。塩尻を過ぎると洗馬、贄川、奈良井、藪原、宮ノ越、福島である。

下車予定の本曾福島駅を乗り越した。上松、須原、野尻、次ぎは妻籠や馬籠のある南木曾であった。上野清太郎は、思わず車中をきよきよと眺め回した。

それは、敗訴の禍根が頭から離れず過敏になつて自分のある種の杞憂であった。ひょっとしてあの時のように尾行されてやしないか？判決は弁護側の敗訴だったから・何か被告人側に恨まれることがあつただらうか？

上野清太郎は、あの大学二年の留年時に中山道の一人旅で、歩きながら身体に得体の知れぬ纏わり付くような不快感を、経験したのをその時思い出していた。

それがやがて、高校時代の忌まわしい妻籠での父親の自殺と葬儀の記憶に繋がった。確かに誰かに尾行されている。

始め、その影は軽井沢辺りから、付かず離れず付き纏うように自動車で見られては消えていた。錯覚と思いたかった。

徒歩の上野清太郎の行く先々で、待ち伏せしているように思えた。

自分を誰かと勘違いしているのでは、と始めは思った。

よっぽど近くに寄って、言葉を掛けてみようとも思った。

「何か僕に御用ですか？」

勘違いしているとしたら、早いとこ他人の空似で間違ひであることを、自動車の影に知らせねばならない。自動車に寄ろうとすると、影はスルリと走り去った。

中山道の一人旅を知っている者だろうか？

でもどうやら、相手は自分を尾行し続けているようなのである。

過激に学生運動をやった闘士に、公安警察の尾行が付くという話を友人から聞いたことがある。でもそうだとしたら、自分とは無関係のはずだ。抗議デモに参加した程度であるのだから・。

帽子を目深に冠っているの顔は判然としない。確信はないのだが、こうした事は人間の直感でわかるものである。

でも自分に危害を加える様子もないので放置していた。和田峠を過ぎる辺りで、自動車に乗ったその影が消えたので、やはり勘違いであつたかと一先ず安堵した。

ところが、塩尻を過ぎると影が、今度は自動車ではなく、徒歩で追ってきた。距離を置いて確実に上野清太郎を尾行した。

影は、執拗に本曾福島を過ぎる辺りまで背後から確実に距離を狭めて付き纏った。

上野清太郎は、南木曾駅に下車した頃には、昔学生時代尾行された厭な記憶を意識して自分の中で払拭させていた。

昔の記憶を辿りながら、下車後徒歩四分で、妻籠城址入口に着いた。妻籠宿入口の鯉岩まで五分。更に高札場を過ぎて南木

曾博物館辺りまで十分余りであった。

博物館少し手前にある、四十年前父親が自殺した場所、妻籠の鄙びた「妻吉」という旅館を訪ねてて足を休めた。

客も少なくウィークデイを見越して、予約なしで薄暗い玄関に飛込んでいた。

「妻吉」前に、街道独特の櫛形ますかたがあつた。昔外敵の侵入を阻止するために、故意に道を鍵型にしたのだという。連子格子窓と江戸情緒の暖簾が下がっていた。二十名ほどの客で満杯になるような、妻籠にあつて雰囲気の良い小さな小奇麗な宿であつた。

父の上野一太郎が中山道の街道沿いに、

債権者から逃げるように逃避行を続け、歴史の面影の濃い、山深い四十二番目の宿場伊那道との交差点でもある交通の要所、ここ妻籠にきて泊まったと思つと感慨深いものがあつた。大学留年中の学生のあの時も、裁判官新任拒否にあつて、岸本義一に拾われる間の弁護士浪人中の二度目の時も、

「妻吉」の前で、玄関を横目にしながらやり過ごしたのを思い出していた。二度共に、逡巡して、とても「妻吉」に泊まる気も起こらなかつた上野清太郎である。

玄関脇のフロントに人はおらず、机の上のベルを鳴らして、暫く従業員のくるのを待っていた。

「まあ、まあ！お待たせしてますみません。ご予約いただいておりますでしょうか？」

「いいえ、東京から参りましたが・。」

「妻吉」の女将と思しき女性がいそいそと奥からとんで来た。暮れかかった昔の妻

籠宿と異なり、すっかり観光客慣れした妻籠宿がそこにあった。玄関以外の総檜造りの廊下や調度品は、如何にも現代の木曾の趣きを醸していたが、薄い化粧の女将は妻籠の鄙びた雰囲気そのままの美人であった。

上野清太郎は、女将を見て友人から聞いた「木曾美人の落し子説」を想いだした。

それは、街道を往来した京都の高貴な公家や江戸の武士と、地元女性との間にできた不倫の子、即ち時代の落し子の末裔として、信州人にしては珍しい面立ちが、木曾には意外に多い美人の裏付けとなっていた。

愛想の良い五十歳前後の女将に従った。どうやら人手が無いらしく、女将自ら部屋係も兼ねて、案内しているようだった。

上野清太郎は、旅館自慢の日本庭園に面した廊下を進んで部屋に着き、浴衣に着替える前に、宿の女将に尋ねた。

「前からここにおられますか？」

「ハイ。十代の末だ若い時分からずーっと。」

「古くからおられる方ですネ？」

お茶を入れる手を休めて、女将は何故そんなことを尋ねるのかと怪訝そうであったが、清太郎の答えに納得したようだった。

「いいえ、もう一人古手の婆がおりますが。」

「学生時代、四十年前、妻籠に来たことあるので、昔のことお聞きしたいのです。」

「なる程、思い出旅行ですか？そういうお客さんが、昔を懐かしんで再度お見えになりますヨ。後で昔の美人を話相手にここに来させます。」

「お願いします。」

上野清太郎は、昔の父親の自殺と、その後の経緯について、もし知っている人間がいたら聞き出そうとしていたのだ。

風呂場で、やはり中山道を歩いていると称する泊まり客の一人と一緒にあった。

「藤村の故郷、妻籠や馬籠はやはり良いですね。行灯の灯が洩れる夜の妻籠は特に情緒ありますね。」

島崎藤村ファンだという、話好きの中年男性と共に浴槽の湯を溢れさせ、街道沿いの話に調子をくねながら、清太郎は自分の二度の中山道一人歩きを思い出した。

檜造りの浴槽で一風呂浴びてから、部屋に戻ってビールを二三本頼んだ。

夕食は、この宿の名物と称する、妻吉御膳と岩魚の塩焼きと、馬刺しがでた。

女将から聞いたと言って、古手の仲居の婆が上野清太郎の給仕にきた。

ビールを開けてから、木曾の地酒を二三本追加注文した。婆と聞いていたが、確かに昔の木曾美人の面影を残した、六十歳がらみの末だ色気ある女性であった。

妻籠の人かと訪ねると、婆は地元の人間ではないと名乗った。

なんでも今は廃村になったが、古い檜川村桑崎の出身だという。桑崎には義仲の馬蹄石が残っていて、家と言えば今は中腹に分教場の校舎があるだけとか。桑崎の部落の先祖は、平家の落ち武者の山窩くずれかもしれないと、自ら名乗った。

山窩と聞いて婆の出身地の話に興味があったが、素性を余り問い質すのも失礼と思っ

た。でも婆は問い質してみたくなるほどの、女将の言葉を借りれば昔の美人だった。

「いいえ、お客さん！もう恥も何も感じない年齢になってますから、何でも聞いて下さって結構ですよ。私の話で、少しでもお客さんをもてなすよう、女将に言われてますから。こう見えても、妻籠の観光語り部の一人ですから。」

語り部と名乗った婆に、懐紙に包んで心付けの五千円を手渡した。

「有難う御座います。もう少し若ければ、もつとお客さんをもてなすこともできるのですが、もう身体にガタきて、そういうと、チップを懐に納めながら、片目を瞑ってみせた。婆は仲居兼元芸妓だったのであるまいかと思った。

その婆は、上野清太郎から問われる前に界限の観光案内を兼ね、妻籠や馬籠の歴史話を始めた。酒を進めると猪口を受けた。

内容は、殆ど上野清太郎の知っている話だったが、婆の腰を折らずにじつと相槌を打ちながら辛抱強く機会を待った。

話が藤村一族の狂気の血、「夜明け前」の小説モデルの父親正樹や姉の園子の自殺未遂話に及んだ時、すかさず上野清太郎は猪口の酒を一挙に飲み干しながら、警戒させないように、昔の父親の自殺に絡まる話題に矛先をそれとなく向けていった。

弁護士稼業の客応対のノウハウが、今夜も宿のこの婆に対して役にたった。

先ずあの時の父の自殺事件を、この彼女が記憶してるかどうかの探りを入れた。

「藤村ファンが、妻籠や馬籠にやってきて、ここで自殺するという話を昔聞いたことがあるのですが・・関連の自殺話は本当にあったのですか？太宰治の睡眠薬の力ルチモン自殺の後に、ファンが睡眠薬自殺した話を聞いたことがありますか？」

「ありましたよ！それがねーお客さん！睡眠薬自殺で想いだしたのですが・・余り大きな声でいえませんが、関連の話がこの宿でもありました。もう時効かもしれないませんが・・女将には当時厳しく口止めされた話ですが・・あの時は皆警察に聞かれてそりや大変でした。自殺話はこの宿以外でもあったのです。でも安心して下さい。当時の部屋はもうないのです。この宿も改築していますから・・」

やはり、思ったとおり彼女は知っていたのだ。でも、他にも自殺者がいたかもしれないと思っただけで、更に探りを入れた。

「この辺は自殺者が多いのですか？富士の青木ヶ原樹海や北陸の東尋坊とか・・場所によっては自殺の名所がありますか？」

「いいえ・・たまに聞く位です。でもあの日の中年男性の自殺は、藤村のファンの自殺のようにも観えましたが、私は直感で違うとおもいましたね。木曾署の刑事さんは、ヒョットして殺人事件を疑ったのではないのでしょうか？私は推理小説を読んできましたから、そう思ったのです。」

「どうしてですか？」

「この場所には長年働いていると、客を見る眼が肥えてきますから・・前夜その

人を訪ねて、客があつたから・・唯何となくです。これは私の推理です。」

「一目で、客の懐具合や客の商売まで読めるそうじゃあないですか？」

「そうですね。お客さんの商売も大体見当つきますよ。あててみましょうか？島崎藤村のこと詳しいし、自殺話に興味持っていますか？・・大学の先生か物書きの方ではないですか？・・良くそういつた御商売のお客さんがここにも来られて泊まると・・お客さんひよつとして作家さん？・・解つた！・・小説のネタ探してしよう。」

「当つたような、あたらないような・・」

「図星でしょう！ネタ提供したんだから、本になつたら一冊送つて下さいね。」

上野清太郎は、自分の身分を曖昧に誤魔化したがる、彼女はすっかり物書きと勘違いしているらしかった。それならそれで、物書きらしく振舞つてやろうと思つた。

それにしても、流石宿の婆の観察眼と記憶力に鋭いものがあると感服していた。彼女は横道に話を反らしながら、あの日の前夜・事後の事まで記憶していたのである。

清太郎を作家かジャーナリストと見当つけてか、木曾の地酒が身体に廻つてきたのか、長年の女将の緘口令の鬱憤を晴らすかの如く、彼女はあの事件の顛末を、警戒心を解いて、スラスラと話してくれた。口調に妻籠の婆の純朴さを、再認識しながら、父の死を再度顧みる思いであつた。

もちろん、母喜美子や兄の信夫がこの宿に来たこと全て覚えていた。上野清太郎は、

弁護士特有の巧みな誘導によって、彼女の口からそうした状況の聴取に成功した。彼女が話した、睡眠薬自殺の当事者こそ、父の上野一太郎に真違ひなかつた。

「お客さん、ひよつとしてその筋の方ですか？もしそうだったらどうしよう！」

流石に咎めたのか最後は警戒感をみせた。「いや、ちがうよ。単に懐古旅行です、東京から懐かしい想い出訪ねての旅と取材を兼ねています・・昔この辺りで木曾の美人女性に出逢つたことがあつて・・」

「木曾は昔から美人が多いところですよ。お客さんが昔あつた女性が、今もここに居るかもしれませんよ。私の出身地桑崎にも、平家の落ち武者伝説がありますよ。」

「探してみようかな・・」

「明日、妻籠から馬籠宿まで歩いてみたら如何でしょう。女性の名前は覚えていいますか？」

「うる覚えだけど・・澄子とかいったかな・・逢えば解るかも・・」

上野清太郎は、婆との話の成行き上東京の法律事務所の事務員の名を勝手に口にした。婆は暫く自分の記憶を辿るように「澄子・澄子ねえ・・」と繰返していた。

上野清太郎は、咄嗟に藤村の「若菜集」初恋の詩を口遊んでみせた。これを機に、その婆は藤村の詩のモデル「おゆう」さんの住んでいた場所、脇本陣奥谷の話や木曾特産のみねばりの木から作つたお六櫛に話題を変えた。

女性は、清太郎の部屋を退室する時も抜

け目なく、妻籠の観光宣伝をした。

「お客さんー明日はお荷物をここに置かれて、ぜひ妻籠から馬籠までお歩きになられては如何ですか？澄子さんを探す想いの旅・良いじゃないですか？念のため熊避けの鈴を貸し出していきますから、持つて行かれると良いですよ。お泊り戴いたお客さんには、檜板の完歩証明書をお出ししているのですよ。馬籠までお荷物をお届けするサービスがありますから・馬籠でお荷物を受取られたら、バスで中津川に出て下さい。」

「熊がこの辺には出没するのですか？」

「いいえ、今は殆ど出ませんが・。昔はでました。今も餌が無いと里まで降りてくる話を時折聞きます。ですから四国巡礼の鈴と買って下さい。記念に鈴の販売もしておりますヨ。」

その夜、婆から聞き出した最大の収穫は、父の上野一太郎の自殺の前夜、一人の男性客と一太郎が夜遅くまで話しこんでいたらしき節があったことであった。それにしても、彼女が殺人事件と推理した根拠が気になつた。木曾署も、この事実を宿の人間の証言から把握していたに違いない。

床に就いても、中々寝付けなかつた。

上野一太郎は、前夜の父の合い方は、ひよつとして葛飾で父が破産宣告の手続きを相談した代理人平井弁護士であるうと、見当をつけたが確証はなかつた。別の人間の可能性も、あるかもしれないと思つた。

明日早朝は、婆の勧めるままに、妻籠か

ら馬籠までの二宿を端から端まで歩いてから、中津川までバスで出て、JRで木曾福島に戻るうと考えていた。

経験から三時間もみれば、歩けるはずで、檜板の完歩証明書を、岸本事務所の皆に見せてやるうと思つていた。それから、木曾署に戻り、パソコン贈収賄事件で、参考意見聴取に赤池弁護士と一緒に訪ねた時の、面識ある刑事を訪ねる積りであつた。

「妻吉」宿泊の後、母喜美子と兄信夫が、木曾署の刑事から事情聴取を受けたはずの調書を、駄目元で見たかつたからである。

事件が異なるので無理は承知であつた。それに、自分は検察官の身分でもないので、何故捜査めいたことをするのか？弁護士が何故興味を抱いているのか？と逆に刑事から質問されるのがオチだと思つた。

翌日の木曾署訪問は、刑事に面談を申入れたのだが、案の定無駄な骨折りとなつた。その糸口さえ警戒されて掴めなかつた。

上野清太郎は、誤魔化して刑事の前を引き下がつた。木曾福島を後にすると塩尻まで戻つて、塩尻発の午後二時五分の特急スパ・あずさ22号で東京に戻つていった。

何時もは、殆ど松本から帰るのだが、今回は特に、中山道三十番目の宿、塩尻からの帰京であつた。葡萄やワイン産地の塩尻で、岸本法律事務所の女性達にと、駅の売店でワインカステラの土産と、車中二時間を寝て帰るためのワンカップ酒を二本買った。本当に久しぶりに、妻籠から馬籠の約十二キロを歩いた疲れが心地良かつた。

今回の長野会、PC贈収賄事件の助っ人弁護の方は、残念ながら敗訴で終わった。もう一つの上野清太郎自身の事件解明の目的は、木曾署の調書入手こそ逸したものの、宿「妻由」の老芸妓との面談により、当初目的以上の成果を得たことで終わったのである。

公安警察Z-180

「とつさに澄ちゃんの名前を使ってネ、妻籠の婆さんの矛先かわしたつてわけです。」

「上野先生！島崎藤村は口実で、本当に昔の彼女探しに、妻籠や馬籠に出掛けたんじゃないですか？だって今迄先生が藤村に興味持つてるなんて初耳ですよ・。」

塩尻土産のワインカステラを摘みながら、上野清太郎の面白可笑しい饒舌とベテラン事務員の澄子の遣り取りに、弁護士法人・岸本法律事務所が久し振りに湧いた。

もちろん、本当は父親自殺の真相究明に行つた事は、事務所の誰にも明かさなかつたし、木曾署に行つた件も黙つていた。

「こつ見えても大学時代、あの辺りを一人でリュック背負つて彷徨つたことあるんだぜ、悩み多き青春の一頁ですよ。」

「なら藤村フアンの証拠見せて下さいよ。」

上野清太郎は、妻籠宿「妻吉」でやつたように、やおら昔口遊んだ若菜集の詩の一節をゼスチャ入りで朗々と詠んでみせた。

こころなきつたのしらべは

ひとふさのぶだうのごとし
なさけあるてにもつまれて

あたゝかきさけとなるらむ
ぶだうだなふかくかゝれる

むらさきのそれにあらねど
こゝろあるひとのなさに

かげにおくふさのみつよつ
そはうたのわかきゆゑなり

あぢはひもいろもあさくて
おほかたはかみてすつべき

うたゝねのゆめのそらごと

「私、上野先生惚れ直しちゃうわ!」

「へえ・・・若菜集『初恋』の詩でなく、

『序一』の詩ですか? 僕も若い頃は、若菜

集や落梅集を愛読したもんだが・・・上野

先生も見かけによらず、かなりの文学青

年だったんですね。なのにどうして、お

嫁さん貰わず今も独身なんですよね・・・」

一人の会話を聞いて、所長の岸本義一弁

護士は、老眼の鼻眼鏡越しにデスクから顔

を上げると、皮肉を込めて妙な感心の仕方

をした。息子のボス弁岸本義雄弁護士まで

が、『序一』の詩を朗読後に、調子に乗り

正に『初恋』を得意気に口遊まんとする上

野清太郎の機先を制して腰を折った。

「でも、折角請われて松本くんんだりまで、

助ベンに行ったのに、長野会の木曾福島

の贈収賄案件では負け戦じゃあ、藤村フア

ンの上野先生も形無しだなあー」

「それをいつちやあお仕舞よ!」

と咄嗟に上野清太郎がボス弁の言葉を、

映画の寅さんの決め台詞で切り返したので、
またひとしきり笑いの渦となった。

「あーあ、二人に攻められて、車寅次郎の
心境ですよ。妻籠や馬籠の話なんかする
んじやなかった。さてつと・・・関弁連

だよりの原稿でも書くかな・・・」

「でも先ずはご苦労様! 長野会の面々に、
東京会に上野弁護士ありと名前が売れた
のだから・・・長野弁護士会の会長から

もお礼の電話がきたよ。」

「所長! 名前が売れただけでは困るのです。
長野検察や長野地裁に勝つて、あの場合

は無罪を勝取ってもらないと・・・岸本法

律事務所の面子丸潰れですよ。」

ボス弁岸本義雄弁護士の言葉は父親に対

しても容赦ない。すかさずの反撃追求は、

正に法律事務所としての本音であった。上

野清太郎とて重々承知していたのであるが、

面と向かって言われると、精一杯やった身

としては流石に少しむっときた。しかしイ

ソ弁の立場から、ボス弁の岸本義雄弁護士

に反駁できなかった。

所長の岸本義一が続けた。

「まあ良いじゃないですか・・・原稿書き

が終わってからで良いのだが・・・早速葛

飾の東京拘置所に接見に行ってもらいた

い案件があるのでお願いします。」

「承知しました。」

所長岸本義一の何時もの上手な煽てと労

いの言葉に加えて実務案件の話があつて、

上野清太郎は、ボス弁岸本義雄弁護士の追

求から開放されてほっとした。

接見とは、長野地裁の青木被告の時もそ
うであつたが、逮捕後の勾留されている被

疑者もしくは裁判拘禁中の被告人に文字ど
うり面談することで、弁護士は立会人無し

で直接面談する権利を有していた。

参考までに勾留は拘置ともいうが、同音
の拘留は自由刑の一種で一日〜三十日未満

の範囲で科せられる刑罰のことで、報道機
関でも、良く混同して使用されている。

ちなみに、葛飾区の小菅拘置所が東京拘

置所と名前を変更したのは、昭和四十五年
のことであつた。

東京に戻つたある日のことである。

上野清太郎は、フリー・ジャーナリストを

名乗る、以前にも電話のあつた男、関口轍

次の訪問を受けた。もちろん抜かりなく、

澄子は人材データベースを使って、関口轍

次の素性を事前に調べて報告してくれた。

澄子の報告の内容を読んだ限りでは、左

程警戒する相手でもなさそうであつた。

その日関口轍次は、法律事務所のパーティ

ションで区切つた応接室にとつされた。岸

本法律事務所には二つの応接室があつた。

素性の解っている顧客の場合は、所長岸

本義一脇の、完全個室の応接室が使われた。

初対面の様子が解らない顧客の場合は、上

空間から話の内容が外に洩れるパーティショ

ンで仕切られた簡易応接室が使われた。

機転の利く澄子は、何時も初見の客の場

合はそうしていた。警戒して簡易応接室の

声に耳をそばだてることも怠らなかつた。

弁護士稼業は、何が起るか予測が付かない職業である。何時も泣きながらの不倫や交通事故の大人しい家裁や簡裁扱いの客とばかりとは限らず、面談途中で声高に暴言を吐く丸暴系の客も稀にいたからである。いつぞやも、暴れだした客の退散に備え、屈強の丸暴対策の手練のバイトを雇ったこともあったくらいなのである。

関口轍次は、案内されるとお茶を持ってきた澄子の目の前で、先ず挨拶代わりといって、鞆から自分の著書「時代の見方」を一冊取り出して、その上に名刺を乗せて上野清太郎に差し出した。退出した外の澄子にも、二人の会話が聴こえてきた。著書と自己紹介を兼ねた関口轍次の声が暫く聴こえた。その内、二人の音が落ちて密談のように聞こえなくなった。澄子は、それで大丈夫だと安心し、以後お茶の入替えで一度応接室に入っただけであった。

上野清太郎は、一時間余の第一回の関口轍次との面談で、自分の秘めたるあの事件究明に協力してくれる、唯一ジャーナリストの相棒を得た感触を抱いたのである。

確かに電話でのアポや初対面の第一印象では得体が知れぬ相手と思っていたから、少し警戒もしていたのだが、話している内に自分の琴線に触れてくる、関口轍次の不思議な魅力に気付いたのである。

「私は貴方の味方です。上野清太郎さん！貴方の秘密の一端を、偶然の機会から貴方の自費出版の紀行文から知りました。」

「私関口轍次を、以後信頼して事件究明の貴方の助手と思って使って下さい。できればこれからは、お逢いする時は、岸本法律事務所以外の別の場所でお逢いするのが良いと思いますが、如何でしょうか？」

「次回は汚いですが、私の事務所でお眼に掛かって、具体的に作戦を立てましょう。また電話致します。宜しいでしょうか？」

「そう致します。電話お待ちしております。気圧されるように、上野清太郎は引込まれて応えていた。物静かな二人の会話は、幸いに澄子の耳に全く届かなかった。

別れ際、関口轍次のジャーナリストとして自信に満ちた低いが念を押すコメントに、上野清太郎はとも勇気付けられた。

何をどう察知したのであるのか？でもこの男は紀行文からあの事件を察知している。

今迄一人ひたすら標的を追い続けてきたが、場合によっては、これから初めて心許せる相棒と二人で標的に迫られるかもしれないという予感がしていたからだ。

二度目に、上野清太郎が関口轍次に逢ったのは、それから二週間後のことである。

関口轍次の事務所は、神田神保町二丁目「株DトップP・ニュース」と看板のある、小さなビルの一角503号室であった。ソファに座ると、関口轍次は、ジャーナリストとは異なる別な名刺を出した。

肩書きに「株DトップP・ニュース」取締役とあった。法律事務所に来訪時とは、うって変わっ

た雰囲気でも寛いでいた。机の上に雑然と資料が積み上げてあって、その中に昔の「中山道一人歩き」も混じっていた。

父親のDTP印刷のチンケな、雑誌出版の手伝いもしていると自嘲気味に語った。

その言葉の裏に、下積みで獲物を追う強靱なジャーナリスト魂のような、関口轍次の強かな個性を感じて、上野清太郎は好感が持てた。然も、関口轍次は自分をすっかり信頼して、鬱積した心の裡を曝け出すのを待っているかのようだった。

「ここ良かったら、何時でも使って下さい。合鍵を作っておきました。弁護士という神経の張り詰めるお仕事、息抜き場に所々、私不在の時でも自由にどうぞ。」

「冷蔵庫の中に、何時でも飲み物があります。好きなものをお飲み下さい！無くなったら時々補充して下さい。あーそうだ。私への指示や調査依頼はメモ書きして、その机の横の伝言板に貼っておいて下さい。こう見えても、昔探偵事務所の友人の仕事手伝ったことあるのですよ。いわば、便利屋と思って下さい。」

恐らく、神田神保町に拠点を持つDTP出版をやっている関口轍次の父親も、葛飾四つ木で苦勞した、自分の父親上野一太郎と同類の人物であろうかと思ってみた。

以後上野清太郎が、紹介を受けた時点から、関口轍次の気さくな神田神保町の事務所を、何回となく利用する切欠となった。その日は、二人で缶ビールを開けながら、

関口轍次は簡単に「中山道一人歩き」の行間に秘められたある事件に関する、彼なりの推理を披露してみせた。推理上の解釈は必ずしも全部当たっていたわけでは無かったが、経過の2/3位は当たっていた。

「紀行文に、貴方は二つの暗号文を仕掛ましたね。そして影に怯えていましたネ。」

関口轍次は、そついいながら文中の仕掛を指摘した。後述するが、あとがきと正誤表に込めた、上野清太郎が標的に宛てた怨嗟の言葉と二箇所ある暗号文を解読してみたのみならず、上野清太郎が、板橋宿、馬籠宿までの四十三宿間を、二度歩いたことも言い当てたからだ。

以下に、当時上野清太郎が記した「あとがき」と「正誤表」を再録してみる。

あとがき

日本橋(江戸・東京)を起点にして実際に中山道歩いてみたが、結構楽しい旅であった。私は大学の二年時に幸いにといおうか、不幸にもといおうか留年した。その間暇を持て余し、中山道の一人旅を思い立った。中山道は別名木曾街道ともいわれ、島崎藤村の故郷を通過している。地図と観光資料をガイドブックにして、ある時は市町村役場にお世話になり、地元のみなさんから道順を教えて戴きながら、個人が築いた歴史の影を振り返りながら中山道を一人で歩いた次第である。

折角歩いた中山道なので、これから歩く方の参考資料となればと思い、稚拙な紀行文の出版を思い立った。便宜上、京都を入れて七十宿を、

二編に別けて記述したが、別け方に他意はない。最後にお断りしておくが、その後道の工事や目印の建物やお店が無くなったり、新しくなったり、また筆者の記憶違いや記録ミスもあるかと思うが、その所は読者の現地での臨機応変の対応をお願いする次第である。

昭和三十九年盛夏

上野清太郎

正誤表 四十三箇所 板橋、馬籠宿

1	日本橋より板橋へ	行11上04	ぬた	23	岩村田より塩名田へ	行23上09	やて
2	板橋より蕨へ	行23下07	され	24	塩名田より八幡へ	行35上03	がく
3	蕨より浦和へ	行19上09	るが	25	八幡より望月へ	行12下11	きる
4	浦和より大宮へ	行22上12	ゆや	26	望月より芦田へ	行18上22	とそ
5	大宮より上尾へ	行03下10	てつ	27	芦田より長久保へ	行02上19	るの
6	上尾より桶川へ	行18上11	した	28	長久保より和田へ	行11上16	なに
7	桶川より鴻巣へ	行28上09	けか	29	和田より下諏訪へ	行30上03	にん
8	鴻巣より熊谷へ	行26上02	はい	30	下諏訪より塩尻へ	行11上04	かげ
9	熊谷より深谷へ	行18下13	しず	31	塩尻より洗馬へ	行19下10	らん
0	深谷より本庄へ	行09上11	たれ	32	洗馬より本山へ	行29上21	きを
1	本庄より新町へ	行10上05	わあ	33	本山より贄川へ	行17上15	あわ
2	新町より倉賀野へ	行11下05	をき	34	贄川より奈良井へ	行26上07	れた
3	倉賀野より高崎へ	行22下09	んか	35	奈良井より藪原へ	行18下17	しし
4	高崎より板鼻へ	行25上13	げん	36	藪原より宮ノ越へ	行20上21	いは
5	板鼻より安中へ	行28上09	んか	37	宮ノ越より福島へ	行19上04	かけ
6	安中より松井田へ	行03下02	にな	38	福島より上松へ	行15下01	たし
7	松井田より坂本へ	行19上01	のる	39	上松より須原へ	行32下12	つて
8	坂本より軽井沢へ	行22上10	そと	40	須原より野尻へ	行19上08	やゆ
9	軽井沢より沓掛へ	行28下05	くる	41	野尻より三留野へ	行15下04	がる
0	沓掛より追分へ	行31上16	くが	42	三留野より妻籠へ	行32下12	れさ
1	追分より小田井へ	行29下09	てつ	43	妻籠より馬籠へ	行19上08	たぬ
2	小田井より岩村田へ	行30上04	つや				

更に驚いたことに、標的に迫るために、すでに上野清太郎の知らない調査を関口轍次が開始していたことだった。

それは、形式上葛飾署の交通課に配属されてきたという公安警察官の事であった。

「暗号名、Z80といます。」

葛飾署の交通課同僚も上司も、Z80が何んの目的で同署に配属されているかも、何をしているのかも不明であったという。

「大丈夫ですか？そんな危険を冒して・・・」

「なに、蛇の道は蛇の同僚が居ますので・・貴方を何時か尾行したのは、このZ80だと思いません。暗号名が示すとおり、パソコンに精通した公安警察官です。初期米国ザイログ社のZ80の名前はご存知ですか？今何故貴方を尾行したかの理由を探っています。」

「そうだったのですか！知りません。」
 「弁護士の貴方の方は、ぜひ『自殺関与罪』で標的を追い込めるか調査下さい。私の方は、継続して公安警察官Z80を追いませ。当分分担して進めましょう。」

「標的の罪状が、刑法第202条『自殺関与罪』だったとしても、殺人罪より刑が軽いですから、既に時効が成立していません。殺人罪であったとしても、時効は十五年で成立です。時効の停止は、外国に逃亡していた場合のみ有効でしょうが・・」

「そうですね・・ご専門の立場から無理と承知していたから、自費出版本の紀行文を標的に直接送付したのですね。標的は貴方の意図に気付いたでしょうか？」

私は気付かず古本屋に本を出してしまっただような気がします。今だに貴方の存在すら・・気付いていないと思います。」

突然、上野清太郎は、標的への制裁から離れて自分の正直な気持ちをぶちまけた。

「私が裁判官新任拒否を最高裁判所から受けた時から、日本の司法制度の暗部に気付きました。今回の増収賄事件では検察の暗部をみて癡々しました。なにが理不尽な個人の権力に押し流されて 司法

の現場が捻子曲げられているのです。」

また、妻籠宿では父親の自殺の前夜に話していた人物がいたことを最近知って、実に無念な気持ちになったと語った。その人物を標的として、復讐の制裁を考慮中であるとも補足した。関口轍次は、初めて弁護士上野清太郎が己の内面を吐露し、過去を曝け出したと思った。警戒を解き自分を信頼してくれたと思うと嬉しくなった。

「そんな過去や事実があったのですか？それは何故だかご自分で見当つきますか？」

「その理由が今だに解りません。」
 上野清太郎は、あのときつと最高裁判所に、眼に見えない何処からかの力が働いたのに違いないと思った。ひよつとすると、危険を冒して現在関口轍次が追っているという、Z80と関係あったのかもしれないと、初めて気付いたのである。

上野清太郎は今となつては、刑法上の罪状による制裁でなく、標的を社会的に葬り去ることいわば復讐、合法的に復讐する手段を考える事だと秘めた心情を告白した。

関口轍次は、父親自殺の前夜背後にいた人物の存在に気付く、長年の怨嗟で凝り固まる上野清太郎の気持ちを考えると、これ以上逆撫ですることを止そうと思った。

あたり弁護士的身でありながら、今となつては罪状による制裁の出来ない身の無念さが痛い程理解できたからである。

「ところで、前から貴方に一度お聞きしようと思っていたのですが・・本当のところ『中山道一人歩き』自費出版を思い立つ

たのは、一体何時だったのですか？ 私には、とてもあとがきの昭和三十九年とは思えないのですが・・」

「関口さんのお気付きのとうり、学生時代ではありません。出版は、私が二回目の旅を終えた頃・・そうです。今の岸本法務事務所に拾われる前のことです。」
 上野清太郎は、少しいい淀んむと笑いながらそう応えた。

三週間後、二人はまた神田神保町の関口轍次の事務所に行った。Z80の意図が解つたという電話連絡があったからである。

「貴方の育った葛飾は、昔から左翼運動が盛んな土地柄で、日本共産党の拠点があった所らしいですね。」

「父もシンパ活動をしたようです。」

「お父様が相談したという弁護士さんのことご存知ですか？貴方自身も、ひよつとして、その弁護士を標的として制裁を加えようとしたのではないですか？」

「母から聞いて覚えていきます。その弁護士は、父が破産宣告手続きを東京地裁に出す時の代理人でした。確証は無いのですが状況証拠として、父の自殺の前夜逢っていた人物だと思っています。」

「私の調査によると、もう名前を出してもいいでしょう・・葛飾を根城にしていた民青系の平井貴一こそ、実は公安警察官Z80の操る、日本共産党に潜り込ませた諜報活動の協力員だったのです。表向きは、倒産して困った経営者の味方と称し、地裁への破産宣告手続きと、審尋を

受けさせ債権の免責を可能にしてやるという活動していた弁護士でした。」
それから、関口轍次が語った話は、上野清太郎自身も、自分の耳を疑った位の驚くべき本当のような嘘のような話であった。もしこうした司直の手によって、自分の人生が狂わされたとしたなら、断じて許し難いことと怒りが込み上げてきた。

Z80は、警察大学校警備専科教養講習を受講した。生抜きの公安警察官であった。警備専科教養講習所とは、大学一般教養等ではなく、諜報教育、情報収集、尾行訓練、即ち昔の陸軍中野学校のような特務機関である。この男の頭脳明晰さと、身体強健が買われて公安に選抜された一人である。

Z80は、最所から公安警察官ではなかった。高校を卒業すると、東京警視庁に入庁以後、独学でコンピュータを学び当時としてはかなり特異な存在の警察官として、交通係に配属されとても重宝がられた。

昭和五十年以降はその腕が役立つた。

もちろん今でいう、腕はパソコンオタクに近かったかもしれない。違った点は運動で鍛えて屈強で身体は筋肉質、眼鏡を掛けたひ弱なオタク容貌の青年ではなかった。

高校時代の部活は剣道部で、その腕前は三段であった。同期入庁の仲間で、Z80のパソコンと剣道の腕に並ぶ者は一人もいなかった。昭和四十五年頃から、正式に葛飾の交通課に、公安として配属を命じられた時、未だZ80は名乗らなかつた。

当時、暗号名のない極普通の公安で任務は、日共・民青系専属担当であった。ザイログ社のパソコンが日本に入った昭和五十年以降、同社製品を所有、情報整理をしたことで頭角を現し、暗号名Z80で警視庁警備局公安一課に届出をした。

以後Z80の目覚しい活躍が続いた。

葛飾署所長でさえ、報告義務をZ80に課すことは出来なかつた。面が割れては仕事にならない。交通課の業務は、一切しなかつた。緊急動員業務すらしなかつた。本庁直属で、裏の公安としての任務を帯びた。諜報活動のために、未成年者、女性、犯罪歴のある者、現役警察官の家族等が本庁の事前承認を得た上で利用された。そうした子飼の何人かの配下の諜報員に、金を渡して情報を得る任務に専念した。

一般警察官とは、異なり署に出ることも全くない。特別任務命令が、警視庁公安部の総務課の然るべき人間から、電話回線でパソコン端末に発信されてきた。

システムは、Z80自身が作成したものだという。全国の裏の公安全員がザイログ社の端末を所有していた。当時としても大変珍しく、足と恫喝で鳴らした昔の特高警察と全く異なる電子機器で武装していた。

共産黨員やシンパ等、民青系の公安特別対象者のデータが、端末のパソコンから本庁に集められた。このデータは特別パスワードを有する者なら、何時でも取り出せた。

Z80は、徹底的に洗脳され、反日共思想を植え付けられた。強い意志の下、葛飾の拠点組織に配下の諜報員を忍び込ませることに成功した。得意の盗聴器を仕掛けて回線傍受もやったが、どうしても組織に潜り込める鋭敏な協力者が必要であった。

その候補者の一人が、民青系の平井弁護士であった。平井弁護士の身辺を洗って、人妻との不倫現場の盗撮で弱みを握った。

その内に平井弁護士の口から有力情報が入った。上野一太郎経営の(有)上野玩具工業の倒産話であった。素材接触を図るには、金銭の懐柔策だけでは駄目で、素材周辺の何らかの弱みを握る必要があった。

若い素材の発見に努めていたZ80は、最所上野家の二人の兄弟に眼を付けた。二人を逆境に追込む必要があった。接触し説得し獲得の課程を得て、先ず兄の信夫を協力者として仕立て上げた。

条件を付けて指示を与え、先ず資料入手方法から手解きし、民青同や日共の事務所から、梱包されたビラや新聞を収集させた。入手の難易に応じた対価をその都度支払った。清太郎の学費の一部に金が廻った事は言うまでもない。兄信夫の言葉を思い出す。

「折角良い高校に入ったのだ。絶対に高校だけは卒業しろ！俺の二の舞だけはするなよ。お前は更に大学まで頑張って行け！学費は俺が何とかしてやる。」

「俺の二の舞はするな・・・と絶えず言っていた訳は、実にZ80からの協力報酬受

理のことだったのである。兄の諜報協力活動は、葛飾から川崎に移っても続き、Z80が公安として退職する時点まで続いた。

川崎から兄信夫が葛飾に戻ってきたのは、Z80が退職し、その呪縛の罫から逃れられるようになってからのことであった。

一方、平井貴一には、父親上野一太郎と絶えず接触させ、接触情報を得る度に、一回三〇数万円程度の対価が、支払われていた。特に債権者から逃げようと懸命だった。特に債権者から逃げようと懸命だった。父上野一太郎への精神的な攻撃は執拗だった。やり方はZ80から指導を受けた。平井貴一は、母親に夫の生命保険を掛けさせて、父親には債権者に死を持って償わせるという自殺教唆の方法で迫った。生命保険の掛け金ですら、Z80に請求して自分で立替払いしているが如く装った。母親はすっかり平井貴一を信用した。

呼吸中枢を阻害するバルビツール酸系(バルビタル)の供給は、自殺幫助の平井貴一の手によってなされた。地裁への申請業務と称して、中山道に沿って逃避行を続ける一太郎と接触するのは容易であった。

次に素材としてZ80が狙ったのは、弟のT大生上野清太郎であった。

大学入学後も、ノンポリのようだが、一般大学生にない逆境に耐える強靱な個性が、必ず役に立つと踏んでZ80は、自ら尾行により度々接触を試みた。

T大駒場寮は、全共闘の拠点であり、日共・民青の巣窟であったからだ。

Z80から報告を受けた上野清太郎の情報は、彼ら本庁公安幹部にとつて魅力あるものと映った。しかも司法試験に合格する程の頭脳は、将来高次元の外国諜報組織と接触できる可能性をも秘めていた。

泳がせて大学全共闘や民青系各派閥の動向を探るのみならず、将来司法仲間、政治家や各党幹部クラスとも接触できる、内部諜報公安官に仕立て上ることが公安トップの至上命令としてZ80にも発せられた。

上野清太郎は、次期公安警察の核となることを期待されて狙われたのである。

公安の全力上げて警察機構、特に警視庁公安部に入るよう、在学中は、大学先輩から、司法修習時代は教官の口から説得が本人に直接なされた。法律に詳しい専門公安が組織に必要であった。

本人の裁判官任官希望を先ず潰した。

最高裁判所より発した「ニンカンキョヒ」の電報である。新任拒否は、彼ら公安警察の仕組んだ策謀の手が、最高裁判所の官僚にまで及んだ結果であったようだ。

関口轍次の一連の話を聞いていた上野清太郎は、噂には聞いていたが、未だに正体不明の、昔の特高警察の遺物のような、公安警察の凄まじい、眼に見えない化け物のような権力を改めて意識したのである。

米国CIAがオクトパスと呼ばれ、蝟の触手の化け物であるなら、日本の警視庁公安部という組織は正に妖怪の巣窟であった。

その夜、事件解明の相棒として、いや人の相棒としても意気投合した上野清太郎

弁護士とジャーナリスト関口轍次の二人は、近くの赤提灯で久し振りに痛飲していた。

「まず、始めにどうして弁護士さんが昔書いた、紀行文に私が事件の匂いを感じたかを順を追ってお話しましょう。」

関口轍次は、おもむろに杯を傾けながら、上野清太郎の文章が異常だと思ったのは、最後の正誤表だと言いつつ切った。

「行上下」の該当する個所に、その文字が有ったり無かったり、更に妙だと思っただけ、板橋から馬籠で終わっている点だったという。中山道は、東海道とダブっている草津・大津を入れて、京都まで七十宿なのに、正誤表が四十三宿で終わっていたのが不可解だったからだという。

「文字の羅列を横に読ませるとは考えましたね たれがやったかはいずれあきらかになるときがやってくるそのにんげんをわたしはけしてゆるさぬ」誰がやったか何れ明らかになる時がやってくるその人間を私は決して許さぬ・・・と読めた時は、私も興奮しました。事件のメッセージを標的に向けて発信しているのだと気付きました。ジャーナリストの直感的中したからです。でも何のために・・・後半分の謎がどうしても解けませんでした。」

関口轍次は、その正誤表に込めた暗号文のような、上野清太郎の怨嗟の恨節を解読したのだが心は晴れなかったという。

この暗号文は、余りに高度で素人に解けないようなものであってはならない。精神的な打撃を標的に与えなくてはならない。

標的が気付き、読んだ標的が復讐者の追求を意識して怯なくてはならない。

次に国立国会図書館の、検索システムで上野清太郎という弁護士がいることを知った時は、ちょっと驚いたという。

まさか弁護士さんが、何故このような手の混んだ仕掛をする必要があったのかと。そこで同姓同名かと疑っていたという。

友人の探偵社に行つて、WHO's WHO という人材データベースで調べてみると、日本橋の事務所に該当の名前を見つけた。

葛飾区生まれの弁護士で、両国高校卒、T大法科卒、弁護士登録、関東弁理士会の東京会所属等。葛飾は仕事柄、企業倒産の多い地域であることを知っていた。ひよつとして簡易裁案件・調べたが案件もわからず家族も出てこない。

妻籠宿の文

南木曾博物館の傍に「妻吉」という宿があつて、宿の前に、井戸と水場がある。平日にも拘らず、井戸の周りが賑やかで、貴重なものを失つて、一つ無くしたような人ばかりである。

馬籠宿の文

森の奥に死体の上がらぬ池があり、木の枝に不思議な縄が揺れた後に白骨が横たわる

観点変えて、妻籠・馬籠で正誤表が切れている点に着目した。著者は藤村ファンと見当を付け、妻籠・馬籠二宿のみ一字一句念入りに読んでみた。

奇妙な文を妻籠・馬籠宿で発見した。

そこだけ表現がどうも妙だ。

後から執つて付けたような文章である。

然も、目に付くように妻籠・馬籠宿の文章の真中にある。

調べてみると、旅館「妻吉」はあるが井戸や水場は無い。有る特定標的宛のメッセーじらしいが、これが、第二弾の素人向けの暗号と気付くのに時間が掛つた。

妻籠の文を分解し、頭文字を続けると人物の名前「平井貴一」が浮んできた。

「貴重なものを失つて」「殺された無念さ」とある。これは誰かが殺されたことを暗示しているのではあるまいか？

馬籠の文は、正に復讐を誓つた者の「お前を殺してやる！」と標的宛ての謎めく脅しの文ではあるまいか？と理解できた。

今度は文章を一字一句詳細に読まなければ事件の鍵は握れないという反省から、軽井沢から本山までの信濃路十五宿、贄川から馬籠までの木曾路十一宿、合計二十六宿を、念を入れて読み始めた。

ある共通事項に気付いたのである。

それは、あとがきと塩尻から馬籠宿までの全宿に、著者が「ある影」を感じていたらしい節があつたからである。その影という文字を宿毎に残した痕跡が十四宿にある。

影の文字を宿別に文章から拾つてみる。

あとがき

影を振り返りながら

30 下諏訪より塩尻へ 影の如く

31 塩尻より洗馬へ 影ぼうし

32 洗馬より本山へ 裏影

33 本山より贄川へ 面影

34 贄川より奈良井へ 影絵 追つてくる

35 奈良井より藪原へ 魂影が付き纏つ 面影を残し

36 藪原より宮ノ越へ 影に沿って追われて

37 宮ノ越より福島へ 影人を思う 尾行されて

38 福島より上松へ 影の牢獄 逃げて行く

39 上松より須原へ 影の密談 面影を伝える

40 須原より野尻へ 面影が残っている 追いかけて

41 野尻より三留野へ 影すら感じさせない 人影も疎らで

42 三留野より妻籠へ 影を引いた 策謀のロマン

43 妻籠より馬籠へ 貴重なものを失つて 殺された無念さ

影すらもない

あとがきでは「影を振り返りながら」塩尻宿から「影のごとく」生まれて、馬籠宿では「影すらもない」のである。つまり、尾行者は塩尻で現われて、馬籠で消えたのである。ここではたとと解らなくなった。

著者は確かに誰かの影を意識している。

影の尾行者は一体誰なのか？これが何を意味するのか？最初皆目見当も付かず、理解できなかったのであるが、後日、影の存在はZ80の尾行を、著者が怯えながら書き

残したものと判明するのである。

影の存在はさて置き、先ず暗号文の人物「平井貴一」で検索してみると、何人かの名前が浮んできたが、上野清太郎との接点となりそうなキイワードを付加し、葛飾の弁護士の名前に到達できた。そうだ同業弁護士であると断定。ひよっとすると殺人事件か？と気負った匂いも感じた。弁護士共に、葛飾生まれと葛飾在住で繋がったので、平井貴一弁護士の仕事振りを調査してみると、これがまた評判は余り良くない。

「ところで、以前おっしゃったお父様に掛けられた生命保険はどうなりましたか？通常自殺の場合は保険金は下りないと商法では規定ありますが、生保は免責期間を設けて、例えば、契約後一年以内の自殺は下りないとされているけど、当時から一年過ぎれば自殺であつても保険金は下りたはずですよ。」

関口轍次に言われるまでもなく、上野清太郎は、無論その父親に掛けられた生命保険の保険金についても調査していた。当時母親の喜美子も父一太郎同様、平井弁護士をすっかり信用していたからである。母貴美子は不正を見抜けなかったであろうが、保険金の受取詐欺があつたのではないかと、上野清太郎は喝破していた。

つまり、当時母貴美子には、会社破産宣告後に、父親の一太郎に掛けられた新たな生命保険の、掛け金を出費する金銭的な余裕すらなかった。然も、平井弁護士は、不

慮に備え親切にも、掛け金を代替してくれたと信じて疑はなかったのである。Z80から一部出費させてである。

唯でさえ、弁護士費用も支払えない負い目を感じていた、母貴美子にしてみれば、その平井弁護士の行為に感謝すれこそ疑いもせず藁に縋る思いの心境だったはずである。結果的に悪知恵に嵌り、口車に乗せられたのであるが、母は今でも平井弁護士の行為に感謝し、息子の調査報告には、一切耳を貸そうとしなかったそつである。

「例えそつだったとしても、あの時平井先生が、そう言つて生命保険を掛けてくれなかつたら、一家で首吊るような羽目になつていたのよ！お父さんの自殺後の、見舞金すら受け取れなかつたのよ！平井先生を、そんな風に悪くするのはおよしなさい！」

上野清太郎は、お人好しの母の言葉を関口轍次にそう告げたのである。更に、恐らく葛飾で平井貴一は同一手口で、他にも保険金詐欺をやっていたのではないかとさえ付け加えた。

「やはりそつでしたか。同僚から平井貴一の悪徳弁護士ぶりは聞いていました。これは怨恨事件と思いましたが、後はもう直接お逢いして、訪ねてみる他はないと思ひました。始め平井弁護士とも面談しましたが、ボ口を出しませんでした。」

「私も本を、事務所と平井貴一宅に送り付けてみたものの、何とも私の気持ちは癒

えませんでした。私の意図に気付いたかどうか不明でした。そんな折ジャーナリスト関口轍次さんの訪問を受けました。今は唯お逢いできて良かったと、ご好意に感謝しております。長年の、私の人生のモヤモヤしたシコリやわだかまりが、少し氷解した想いがしているからです。」

「そつですか・・・」

「私は今でもわすれませんが！母と兄が妻籠から持ち帰つた父親の旅行鞆に入つていた玩具類をです。木曾五木の端材で作つたと思われる、木製の馬の玩具と曲げ物細工、奈良井宿で入手したのでしよう・・・二百地蔵の土人形、それに素朴な藁の馬人形でした。母親に土産のおろく櫛でも何度も泣いてました。」

「・・・」

上野清太郎は、小さい時に見聞きしていた父親像について語つた。上野一太郎は、一時日本の「からくり人形」の研究に没頭した時期があつたという。趣味で集めたそうした玩具の類が、家の父親の部屋に所狭しと置いてあつて、清太郎にとっては玩具であることは理解できたが、まるでガラケタのように思えたという。上野一太郎は、そうした玩具を集める収集癖があつたようだ。日本の玩具だけでなく、オルゴール付の西洋の「オートマータ」という、関口轍次のまるで知らない玩具もあつたようだ。

上野清太郎が、自分の口調で父親の玩具

収集癖を語る時、まるで弁護士というよりは、別の一人の少年に戻って昔を回顧しているかのように関口轍次には思えた。

関口轍次は、首を振って相槌を打って応じたが、返す言葉がみつからなかったのである。恐らく、推察するに上野清太郎が二人の父親自殺関与の謀略に気付き、調査する旅にでたものと警戒感から、探りながらのZ80の尾行だったのではあるまいか。

紀行文には、42・三留野より妻籠への個所に「貴重なものを失って」43・妻籠より馬籠への個所に「殺された無念さ」とあるのみで、父親が平井貴一とZ80の「自殺関与」の謀略によって自殺したくだけの記述は、詳細に記されていないかった。

唯、12・新町より倉賀野への個所に、遺骨を埋葬した、藤岡の母方の菩提寺光明寺に寄り道した形跡があるだけであった。

若い上野清太郎が、父上野一太郎の中山道逃避行に沿って、一度目は、Z80の尾行に怯えながらも、学生時代木曾に至る道を歩いた時、また二度目の弁護士浪人時代に歩いた時も、どんな想いだっただであろうかと、改めて関口轍次は思っただった。

「そうですか。私もそれを窺って安堵しました。ひとつ上野さん 私に提案があります。ぜひ聞いて下さい。」

「何でしょうか?」

「私も、上野さんの紀行文の謎に取組めたお陰で仕事のヒントを掴みました。」

薄汚い小さな神田神保町の「株Dトップ

P・ニュース」社の503号室の事務所を脱出する思いで練り上げた、自分の大構想を始めて弁護士の「上野清太郎」だけに、関口轍次は打ち明けたのである。

それは、関口轍次のジャーナリスト生命を賭して、ノンフィクションの範疇で世に問う長編を数年掛けて上野清太郎と共同執筆し、その標的平井貴一に打撃と、社会的制裁を加え、同時に返す刀で日本の巨大権力機構である、司法・検察・警察の暗部を鋭く抉り、且つ斬る構想であった。

「いいですね!私にもぜひ協力させて下さい。可能な限り資料提供を致します。場合によっては、今度は一緒に中山道を歩いてみませんか?」

「それもいいかもしれませんが。歩いて一緒に中山道の風を感じ、一緒に中山道に風を起しましょう!」

関口轍次の言葉に、積年の怨嗟の想が、歩く風に乗って消えていく予感さえしていた。上野清太郎は、関口轍次に手を伸ばすと、その手を固く握り締めていた。

エピソード

中山道は、東海道と並んで江戸と京都を結ぶ日本の幹線道路であった。

江戸日本橋から、武蔵国(埼玉県)上野国(群馬県)信濃国(長野県)美濃国(岐阜県)を通り、近江国(滋賀県)草津で東海道と合流、京都までの宿駅六十九、全長百三十六

里(五百四十四キロメートル)である。

当時の旅人は、この間を十八日から二十日掛けて歩いたという。文字どおり、歩きによって、日本の歴史は始まっているのだが、今の人々は交通網の進展により、歩きの良さを忘れてしまっている。

多くの人々が、それこそ老若男女が、自分の今居る場所から自由に誰からも縛られることもなく、動きたい時に動く、このような感覚を持つ時、自分は何かの犠牲になっているという想いから暫し逃れることができる。その自由な感覚が生み出す精神的な余白こそ、「道の文化」の原点である。

それも自動車や電車や汽車、あるいは空間を一拳に飛び越える飛行機等の機械文明に頼らずに自分の足で移動した時こそ、「道の文化」が形成され発展もしてきた。

中山道ならずとも、江戸時代にあった全ての街道沿いの宿場の旅籠や茶屋が、また本陣・脇本陣や荷駄を扱う諸大名の移動のためのあらゆる設備が「道の文化」を体現しつつ、支えるものであった。

長い距離を徒歩で移動した後の、旅籠の行灯の明りに、人々は自分の家以上の小さくないけれど、温かい安息の灯を感じとつたに違いない。隣り合わせになった人々と共に一夜を過ごす蠟燭の灯に集まる、暫しの憩いと慰めの心は、家族と異なる交流の絆を新に通わせる。行灯も蠟燭も、文化発生の源の灯と人々に映っていたに違いない。

中山道宿駅六十九次の中で、今でも歩く人々に最も人気があるのは、軽井沢から本山までの信濃路十五宿、贄川から馬籠まで

の木曾路十一宿、合計二十六宿である。

何れも信濃国といわれた長野県にある。

最も、極最近木曾路最南端の馬籠宿のある山口村が、岐阜県中津川市に編入されたので、平成十七年二月十三日以降は、二十五宿と言いつ直さなくてはならなくなった。

信濃国は、「古事記」上巻に科野国名で登場しているという。国名由来に三説あって、ひとつは級坂(傾斜地・河岸段丘)の多い地であるという説、ひとつには科の樹が多い所であったという説である。三つ目は風の強い国、古語で風の神を級長戸辺命といい、風の吹き起こる地を科戸というそうであるが、有力なのは、前一説である。

二説目の科の樹説であるが、シナはアイヌ語で「結ぶ・纏める」の意がある。

別名日本菩提樹とも言われ、ドイツ同様に街路樹として使われる。科の樹の並木が、松本市の旧大名町と上田市にもある。五月〜六月になると、レモンに似た甘酸っぱい香りの花が咲き、採れる蜂蜜は絶品である。今では繊維に着目する事は余り無いが、

水に強く丈夫な繊維が採れた樹である。樹皮から織物を作り、賦課として納めたと聞く。古代織物のしな布(科布)の伝統を、今も細々と受継ぐ工房が信州安曇村にある。新潟や山形の山里でも、しな布が観光特産品として販売されていると聞く。

文化二年(一八〇五年)に出版された、「木曾路名所図会」にも、信濃国が以下のように記述されている。この場合の木曾路とは、無論中山道全体を指している。

信濃は日本の内にて地形の高き所也。其処は海遠くして山上に至る国也。四方の隣国より信濃に行くには皆上る也。甲斐、飛騨も地形高く陰気深しといえども、信濃より低し。故に冬春の頃は、雪深くして寒し。北国は信濃より雪深けれど、地の低き故、此よりは暖か也といふ。

近世には、木曾路界限は信濃国筑摩郡で、尾張藩領であったが、明治四年の廢藩置県後に信濃国北部は長野県となり、中南部は筑摩県となった。木曾は筑摩県に属したが、明治九年に全てが長野県に併合された。筑摩郡は、明治十二年に郡区町村編成法により、東西二郡となり、松本は東筑摩郡、木曾地方は西筑摩郡に属したが、やがて木曾郡と改称された。岩に肩を擦り付けながら抜けていく木曾路は、昔から人気があった。中山道は、下諏訪宿から塩尻峠を越え、塩尻宿を過ぎると、義仲が自分の馬を洗ったという洗馬宿で、その先に中山道と善光寺西街道の追分がある。善光寺西街道は、北国西街道とも呼ばれ、松本、麻績を経て長野に達している。

信州人が集まると必ず歌い、誰でも歌えるという稀有な「信濃の国」の県歌がある。明治三十二年(一八九九)長野師範教師・浅井冽が作詞し、北沢季晴が作曲した。歌詞は文字どおり地理、産物、名所、偉人等が歌いこまれている。急峻な山々と、中山道の木曾峠の深さも唄っている。一部歌詞を抄出してみよう。

「信濃の国は 十州に境連ぬる国にして聳ゆる

山はいや高く、流るる川はいや遠し。松本 伊那 佐久 善光寺。四つの平は肥沃の地。海こそなけれ物さわに・・」四方に聳ゆる山々は、御岳乗鞍駒ヶ岳。浅間は殊に活火山・・」木曾の嶺には、真木茂り 諏訪の海には 魚多し・・」
「尋ねまほしき園原や旅の宿りの寝覚めの床。木曾の棧 かけし世も心して行け久米路橋」

奈良井宿から少し行くと、難所で知られた鳥居峠である。眺望が良いことから、ここに御岳山の遥拝所がある。

信濃の国にも唄われた御岳山は、県境に聳えるコニーデ型の火山である。頂上に御岳神社を祭る信仰の山で、夏には現在も多数の御岳講の参拝者が集まる。元は、修験道場として厳格に身を清めた者のみが一、六月四日に登拝を許可された。

室町時代以降に覚明行者により一般信仰の集団登拝が行なわれ、江戸時代には信者の組織化、御岳講の元締めが作られたのである。明治以降も各地の講社を合せて御岳教が成立した。中山道の木曾への街道は、御岳講の集団登拝で賑ったのである。

「平成の大合併」は、全国各地で区分けの地域の移動をもたらし、旧中山道沿線の市町村でも同様の移動が起こっている。

アイディアとは検証されない仮説である。「合併」というアイディアを検証可能な所まで落とし込んで、具体的作業の中で、関係者の同意を得ていく手段を上手く運んでいくことも役人にとって重要であるが、まず人々の心を魅了するイメージを初手から創りだせるかがキイポイントとなる。

個人的に旅をする人の移動ではなく、人の集団移動であるからである。そこには、個人の移動とは一味異なる、単に区分けの変更と片付けられない、悲喜こもごもの住民感情の移動が共なっている。

中でも、文豪島崎藤村の生誕地、旧木曾街道十一宿の信州最南端にある馬籠宿は、長野県山口村に属していたが、「平成の大合併」初のケース、県境を越える合併として全国的に話題を集め揺れてきた。

馬籠村は、元は明治七年(一八七四年)に、湯船沢村と合併して、神坂村となったが、明治二十八年の大火で、宿内の主な建物は消失し、古い建物は殆ど残っていない。

昭和三十二年にも、今日の「平成の大合併」同様に、神坂村を岐阜県中津川市と合併させようとする動きが起きていた。

大論争の結果、全国でも珍しい総理大臣裁定で、神坂村のうち馬籠・峠・荒町の三地区、即ち元の馬籠村を隣村の山口村に編入、旧湯船沢村は中津川市になった経緯を経ているのである。この時も「信州の藤村」の馬籠の去就が大きく問われたのであるが、当時から経済的には木曾峪よりも、眼下に広がる美濃路にはるかに濃い結びつきがあったようだ。

平成十七年(二〇〇五年)二月十三日、ついに人口約二千人(世帯数六四〇)の山口村は、岐阜県中津川市に岐阜編入されたのである。長野県側反対、岐阜県側大賛成であった。

長野県側及び馬籠宿保存に努力し続けた地元住民も賛否両論真二つに割れ、苦渋の選択を余儀なくされたようであった。生活文化圏は江戸時代から藤村の時代と異なり、

坂の馬籠の宿は女性が守り、男手は皆中津川市で稼いでいたからである。

「夜明け前」は、島崎藤村の長編歴史小説である。第一部は昭和七年に、第二部は十年に刊行されている。第一部を中央公論に連載開始した頃、世界大恐慌が勃発して、一九三〇年代危機に突入していた。

父島崎正樹(小説では青山半蔵)の生涯を辿り、明治維新前後の慌しい時代の推移を克明に描いている。最近藤村の小説の評価面で、新たな別視点の展開の兆しがある。

それは、通信記者時代から、ルポライターとして確固たる地位を確立し、近年では思想、文学領域でノンフィクション作家としても不動の地位を築いてきたといわれ、精力的に多面的執筆活動中の、ジャーナリスト梅本浩志氏(参考文献)の二つの著作に顕著に現われているので参考にされたい。

かくして、人々の幾つもの出逢いの中で、今も昔もこの木曾峪の街道に感じた風の匂いや、変らない宿場の風景がどれだけ人の心をほつとさせてきたか計り知れない。

最後に、梅本浩志氏は、『島崎こま子の「夜明け前」』本の巻末のあとがきで、木曾の山中の生活を以下記している。

木曾の峪は、梅本氏ならずとも全ての人々に、今に息づく古の時間の中、共通の想いを感じさせてくれるに違いない。

私が毎年夏、暑を避けて、地図にも記載されていない信州・木曾路の山奥二週間前後逗留するようになってからもう十数年になる。旧中仙道(現国道十九号線)も本山宿に近い

にえかわ 贄川の入口に建つ「これより木曾路」の石碑近くから山中に入り、標高一〇〇mの地点に到達する。まさにここは木曾山中である。

「夜明け前」の舞台の端だと言えれば言える。冷たい水とうまい空気と鮮やかな緑がこの上ないご馳走の山の孤島だ。(中略)とりわけ島崎藤村の作品を、この木曾の山中で読むのは至悦としか言いようがない。

「夜明け前」や「家」などを読んでみるときなど、その舞台となった馬籠、妻籠、中津川、木曾福島、奈良井宿などを訪ねてみたりするのだが、藤村の描いた世界の跡を直接確かめられて、味わいも深くなる。

了

徒歩なれや野の花恋しき忍ぶ草・踏基

参考文献

- 「裁判官になれない理由」 ネット46編青木書店
 「破産逃避行」 戒滋著 朱鳥社
 「五街道一人歩き」 岡部登著 小倉編集工房
 「奇妙な喫茶店」 たなか踏基著 文芸社
 「奇妙な猫たち」 たなか踏基著 文芸社
 「島崎こま子の夜明け前」 梅本浩志著 社会評論社
 「島崎藤村とバリエーション」 梅本浩志著 社会評論社
 「汚職・贈収賄」 河上和雄著 講談社 + 新書
 「検察を斬る」 澤田東洋男著 図書出版社
 「政官腐敗と東京地検特捜部」 佐藤道夫著 小学館文庫
 「検察捜査」 中博行著 講談社文庫
 「公安警察スパイ養成所」 島袋修著 宝島社
 「中山道風の旅」 軽井沢馬籠編「さきたま出版
 「木曾路をゆく」 贄川馬籠宿 監修児玉幸多 学研
 「蜻蛉の輪」 ホームページ O君を救う会